
魔法少女リリカルなのは ~ Broken beast ~

やまあざらし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Broken beast

【Nコード】

N2613L

【作者名】

やまあざらし

【あらすじ】

青年は世界を殺してしまった。

しかしそれは世界が望んだ結果であり、世界は自身の身勝手のために青年の生涯を狂わせてしまったことを悔やんだ。

世界は罪滅ぼしのため青年の魂を別の世界に送る。青年が自分の世界では手にすることのできなかつた幸福を与えるために。

青年は新たな世界：海鳴という町で魔法に出会い、様々な出会いと別れを通して自分の幸福を求めあがき続ける。

プロローグ

何も無い世界だった。

そこには地面も、空も、光も闇も重力もない、「無」という定義が確かに存在する場所だった。

「はじめまして、でいいのかな？」

青年は目の前にいる少女に挨拶をした。本来ならばここには自分以外の存在が、否。青年自身存在することさえ許されない場所だ。それにもかかわらず青年と、青年を見つめる少女は確かに存在していた。

「はじめましてじゃない。私はあなたを知っているし、あなたも私を知っているはず。」

子供特有の凜としたメゾソプラノの声で少女は答えた。

「そうかな？君みたいな子は一度見たら忘れないと思うけど」

青年の言うとおり少女は確かに一度見たら忘れがたい容姿をしていた。

それはどこかに特徴があるわけでも、強烈に個性的な顔の造形をしているわけではないが、同時にその二つの理由も当てはまる。

少女は純粹に美しいのだ。

陶器のように白い肌。腰まで伸びた艶やかな金色の髪。そしてガーネットのような大粒赤い双眸。まるで名のある名工が造り上げたビスクドールを思わせる程に人間離れした美をその身から惜しみな

く全面に押し出していた。

「それはあなたが、ついさっきまであなたという「個」であったから。私はあなたという存在が誕生した時から知っている。同時にあなたはあなたとして存在した時から私を知っているはず」

「何の禅問答だよそれは」

青年は少女の言葉に顔をしかめた。しかし、少女はそれを無視して言葉を続ける。

「頭ではわからない。あなたが人としてある限り脳の機能がその要領を超えてしまうから。それでも、あなたは私であり私はあなただった。あなただけが私という存在を理解し、許容してくれた」

「待ってくれ。オレが君であって君がオレだって？そもそもオレは…」

そこまで言って青年は気がついた。少女が自分である可能性のうちに。

「君は…世界か？」

その言葉に今まで表情のなかった少女が微かにほほ笑んだ。どこか儂げなスマイルのような微笑みだった。

「そう、私は人間が世界と呼ぶ存在。あなたが滅ぼしたあなた自身の可能性。」

「なるほど。それなら君が言っていたことが理解できるかもしれない

ない」

「あなたの心、魂と呼べるものは私に…、世界と呼ばれる私たちに限りなく近いものだった。だからあなたは本来、人では為すことのできない能力を有して私を殺すまでに至った」

赤い双眸を青年に向けたまま少女は言葉を続けた。

「あなたはあらゆる世界の中でも存在が予見できなかったイレギユラーだった。世界と世界の可能性をすり替えてしまう能力。それを持つあなたが私の世界に生まれた。そしてその結果が此処」

少女は青年にあたりを見るように促すかのように視線を宙に彷徨わせた。しかし、青年は少女の言葉を聞くたびに胸の芯を抉られるかのような痛みを覚え俯いてしまう。

「此処は終焉の場所であり始原の場所。私という世界が死んだ後、新たに生まれる私以外の世界を見届けるまで存在しなくてはいけない場所。」

そう、ここはウロボロスの蛇の頭であり尾にあたる場所なの」

どこか柔らかかさのある少女の声に青年は疑問を感じた。

それもそのはずだ。なぜならば青年は…、

「オレは君を殺してしまった…」

そう。青年は世界を、目の前にいる少女をその手で滅ぼした。同時に少女の中に存在したあらゆる命の可能性を摘み取ってしまった。

「君は、オレに復讐をしにきたのか？」

「違う。むしろ私はあなたに感謝してる」

「は？」

あまりにも予想外の答えに青年は頓狂な声をあげてしまう。

「だって、世界であることはあまりにも退屈だったんだよ。無限に等しい命が私の中で生まれて朽ちていった。その道程であらゆる幸福や絶望を私は間接的に感じてきた。

だけど、それはあくまで私の中にいる存在のもの。決して私自身のものではないし私自身のものになり得ない。

それがどれほどの苦痛か、きっと人の身であったあなたにはわからない。」

少女は一拍置いてから再び青年に向き合い深々と頭を下げた。重くない空間で金糸のような髪が無造作に踊る。

「ごめんなさい。私は世界という呪縛から自分を解放するためにあなたを利用してしまった。

世界に対抗できる、世界そのものの在り方を変えてしまっあなたという魂の起源が誕生したときから私はあなたを利用しようとして決めていた。

絶対に許されることじゃない。許されてはいけないことを私はしてしまった」

「どっぴいっ…ことなんだ？」

青年は自分でも心拍数が跳ね上がったのが判ったが、努めてその動揺を顔や声に出すことはしなかった。少女は顔をあげると、赤い

双眸には哀しみの色がさしていた。

「私は死にたかった。私という無限の可能性がある中で私だけが世界という役割を担い続けた。永遠とも呼べる時間、私は独りだった。」

今、こうしてあなたと話すのだから私が世界になってから初めてのこと。

その絶望の中であなたという微かな希望が生まれた。あなたの肉体に内包されている魂はまだ生まれただけの、起源そのものだった。」

理解が追い付かずに半ば呆けている青年を見ながら、少女は一呼吸置いてさらに言葉をつづった。

「あなたの起源は『換える』こと。私はあなたが生まれた時に歓喜した。」

彼ならば、私を殺せるかもしれない。私を終わらせることができるかもしれないって。」

「オレは君の掌で踊らされていたってわけか…」

「ごめんなさい…」

青年はようやく少女が言わんとしていることが理解できた。つまるところ、少女は世界という役割から解放されるために、その可能性を持つ青年に自分を殺す方向性にしむけていたということだ。

それはなんとも理不尽で、自分勝手なこと。自殺したいもののために、誰かが殺人によって手を汚さなければならぬようなものだった。

「本来ならば…、オレはここで怒るべきなんだろうが不思議と怒りが沸いてこないんだが」

「それはあなたという「個」が終わったから。肉体がなくなった今、脳に蓄積された情報がなくなってしまうたから肉体に刻まれた記憶が魂に刻まれた記録になってしまったせいだと思う」

青年が生前に起きたあらゆることは確かに覚えている。しかし、それはまるで自分が移っているビデオを延々と回しているかのような、どこか他人ごとのような感覚だった。

つまり、これが記憶が記録になるといふことなのだろうと青年は心中で納得した。

「君はこれからどうなるんだ？」

「私は世界であるということから解放されたから、もう一度魂の輪廻に戻ることになる。」

「そっか…。おめでとっ」

「あなたは自分がどうなるかは聞かないの？」

少女の言葉に青年はどこか諦観したかのような笑みを浮かべた。

「理由や過程がどうであれ、オレは君という存在を殺してしまっただ。そして同時に君の中に生きる命も。」

つまり、オレは咎人だ。行き先は地獄か、それに準ずるところじゃないのか」

「地獄なんてないよ。ついでに言えば天国も。あれは死に恐怖し

た人間が恐怖を紛らわす為に造りだしたモノにすぎないから」

「え！？そうだったのか」

目を丸くして、心底驚いた顔をする青年を見て少女は思わず笑ってしまった。青年が自分を責めないこともあるのだろう。むしろ、そんなことよりも知識を得た子供のような反応をする青年を見て少しばかり少女の中で罪悪感が和らいでいるのだろう。

「死んで初めてわかることもあるんだな。正直、今この空間にいることや君がカミングアウトしたことよりも天国や地獄がないことが判明したことの方が驚きだよ」

ある意味、人間の中の究極の謎の一つだからなあ。と青年は腕を組みながら独りで納得するかのように頷いていた。

「あなたはまだ死んでないよ」

笑いかみ殺すかのような表情で少女はそんなことを言い出した。そして青年は固まった。少女は気にもせず言葉を続ける。

「あなたは死んでない。確かに肉体は失った。生物学的な意味では死んだかもしれないけど、あなたの魂はまだ輪廻に組み込まれていないもの。此処にまだ魂としてだけでも存在しているその証拠」

そういうと少女は青年に近づき手を取った。少女の手は小さくて柔らかい、氷のように冷たい手だった。

「だから私は此処にあなたを呼んだ。もう一度あなたをやり直してもらうために」

「やり直す?」

「そう。私はもう滅んでしまったからこの世界では無理だけど、別の同時に並行運営されている世界にあなたがあなたであるまま送る。」

その世界で新しい肉体として生まれ変わる」

「あゝ、待て待て待て待て。ちょっと待て」

青年は手を取られたまま少女を制止した。何か話がとんでもない方向に言っている気がしてきたからだ。

「どづいづいと?」

青年の言葉にちょこんと首を傾げる少女。どこか小動物を彷彿させる可愛らしい仕種だ。思わず抱きしめてしまいそうになる。

「今言っただけ。あなたという魂を保存した状態で別の世界であなたをやり直してもらおう」

「なぜ?」

「あなたに幸せになってもらいたいから」

「幸せに?」

少女は青年の手を強く握り直した。それはこれ以上の反論は許さないと暗に言っている気がした。

「そう。私は私の世界であなたに人として幸福になる権利と可能性を奪い取ってしまった。だからせめての罪滅ぼし。」

あなたの魂を輪廻を介さないで転生させる」

「そんなことができるのか？」

「できる。ただし、送れる世界はひとつしかない。私が接触することに成功した、私に限りなく近い世界」

ふいに背年は足元から温かいものを感じ視線を移すと自分の足が粒子状になり徐々に消えていっていた。

「これは…」

「あなたの新しい肉体があなたという魂を呼び寄せているの。もうすぐあなたはあなたとして生まれ変わる」

光の粉となり散ってゆく箇所が徐々に上へと上がってくる。足から腰、腰から腹、そして腹から胸のところまで来て少女は青年に懇願するような瞳で頼み込んだ。

「もし、もしもあなたが向こうの世界で私という可能性になり得なかった子に出会ったらその子を助けてあげて。」

こんなことを頼める立場じゃないことは判ってる。だけど、私を模倣するたに生まれた子があまりにも哀れすぎる。あの子自身もそうだけど、あの子を産んだ存在もあまりにも哀れだったから…、」

「オレの手に届く範疇だったら、なるべく力になるようにするよ」

青年は少女の言葉を遮るように言った。青年は柔らかな微笑みと

優しい瞳で少女を見つめていた。

それは、少女を赦しているという温かさを孕んでいたことに気がついた少女の涙からはハラハラと熱い雫がこぼれおちた。

「ごめんなさい」

しゃっくり混じりの声を絞り出す少女。しかし何ともないといった表情で青年は肩をすくめた。既に青年の体の八割は光お粒子となつて散っている。

「何が？」

「…、ありがとう」

ついに青年の身体は首だけを残すだけとなった。不意に青年は思い出したかのように少女に問いかけた。

「君、名前は？」

「え？」

あまりにも唐突過ぎた質問に少女は目を丸くした。

「名前だよ、名前。君を指す固有名詞。あるんだろう？」

「アンリマユ…、」

少女はつぶやくような声で言った名前を聞き、青年は満足したような笑顔をつくった。

「さようならアンリマユ。どうか、生まれ変わった君に幸が多からんことを」

その言葉を残して青年は完全に消えた。「無」の世界に残った少女は新しい世界が来るまで此処にいななければならない。

それは遠くない未来だが、決して近くもない未来。

先ほどの青年との会話を反芻して、不意に涙と共に笑みが零れおちる。人と話すのなど、世界になってから初めてのことだった。

気の遠くなるような時間、独りでいた少女にとって青年との会話は、自分の罪を謝罪するために設けた時間だとしても夢のように楽しいものだった。

「幸が多からんことを…か」

少女は何もない虚空を見上げて、今はもういない青年のために言葉を贈った。

「さようなら、私を殺してくれた人。新たな人生で、あなたに無限の幸が訪れることを私は心から願います」

プロローグ（後書き）

はじめまして。やまあざらしと申します。

リリカルなのはの二次小説に触発されて書き出してみました。

小説を書くこと自体が初めてな上に、原作であるリリカルなのはを見たことがない無謀な試みではありますが、どうか生温かい目で見守って下さい。

一話目 入学式（前書き）

話の内容を考えていくうちに、以前のタイトルどおりになる気がしなかつたので変えてみました。

一話目 入学式

最初に見たものは光だった。

次に見たものは温かな笑みだった。

最初に聞いたものは自分の産声だった。

次に聞いたものは皆の賛辞の言葉だった。

様々な人の祝福に包まれて、青年は緋山一葉として新たな生を受けた。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

広い体育館。赤と白に交互に塗られた幕に囲まれ整然と並べられたイスに一葉は座っていた。

イスには『ひやま いちよう』と自分の名前がひらがなで書かれており、体育館には一葉と同年代の少年少女が新たな生活に期待を胸の内に膨らませていた。

一葉が『緋山一葉』として生を受けて早、六年の月日が流れた。前世、と言うべきが・・・、世界が滅んだ後に残った「無」の世界で出会った少女アンリマユ。

彼女の言ったとおりに、一葉に前世の記憶はなく記録だけが残った。

時折、古い日記を読み返すように自分の過去を思い返してもやはり他人事のようにしか思えずに、容姿は当然のことながら人格もだいぶ変わっている。

人格は取り巻く環境の蓄積によって形成される。今の平成の世で、常に戦いに身を晒しつつづけたかつての自分のような人間になり得ることはない。それに関しては一葉は理解しているつもりだった。

かつての自分は戦うことが好きだった。

互いの殺気で剣の刃が研がれる感覚が、命のやりとりの中にある生と死の境界に立つ緊張感がこの上なく心地よかった。

戦い中の高陽感の前ではどんな美酒でも水にさえ劣ると本気で思っていた。

しかしながら今の『緋山一葉』は戦うことを嗜好してはいない。どう言うわけかは判らない。この肉体が原因か、それとも六年間過ごしてきた平和な期間でひよったか、少なくとも進んで喧嘩をしようとは思わなかった。

アンリマユ曰く、自分の魂は本来あり得ないものらしいのだが、自分のことながら不思議でしようがない。

ともあれ、六歳になった一葉が今迎えているのは小学校の入学式だ。

それも、普通の公立ではなく名門と呼ばれる私立聖祥大学付属小学校である。

一葉の家は武家の流れを汲んでいるらしいのだが、今の平成の世に血の流れなどあまり社会的に重要ではないので、父は普通にサラリーマンとして会社勤めをしている。

ただ、それなりに大きな会社の役員をしているため家庭の階級としては中流の上、比較的金銭に余裕のある家庭だ。

それに加えて、一葉は一人っ子だ。

一葉の両親は、大学までエスカレーターで行くことができる聖祥大付属小学校にがんばって入学させた。

入学試験をがんばったのは一葉自信であるが、学費を払うのは親である。

扶養される身としては両親の期待に応えなければならぬわけで、試験も落ちない程度にそれなりにまじめに取り組んだ。

その結果が、特進クラスの学費免除特待生だった。

一葉はかつての自分の記録を持っている。つまり前世の自分が蓄積してきた知識をそのまま有している。

一葉は前世では十八歳まで生きた。ついでに言えば東京の国立大学の入学も決まっていたのだ。

その一葉が、いくら有名私立校だとしてもたかだか小学校の入学試験に落ちるはずもなく、考えるまでもない問題をなにも考えないままに答案を埋めていったら全教科満点というあり得ない結果がでてしまったのだ。

一葉の他にももう一人全教科満点がいたらしいが、その結果に両親は喜ぶよりも先に驚いていた。

将来は学者か政治家か。いつも家ではそういうことを言われるが、正直勘弁して欲しかった。

試験の結果は言い方は悪いがカンニングと同義である。一葉は自

分が天才などではないことくらい重々承知していた。

式は粛々と進んでいく。

最高学年の代表の祝辞や、校長の長くありがたい話。初めて聞く校歌を半ば無理矢理に歌わせられ、在校するにあたっての注意事項を述べられた後、最後に書くクラスの担任が自分を受け持つ生徒の名前を読み上げ、呼ばれた生徒は元気よく返事をして教室に移動と
言う流れだ。

どこの世界でも入学式の流れは変わらないのだなと欠伸をかみ殺しながら一葉は思った。

一葉にとつては二度目の小学生生活である。

子供に混じり、再び六年間小学生を演じ続けなければならないと思つとどこか億劫になる。

今が、アンリマユの言う幸せに至るための下地の時期だということとは判つてはいるが何となく恨みがましく、元凶であるアンリマユを恨みがましく思つてしまうのだ。

式も終盤に差し掛かり、今は一葉が所属するクラスの担任である女性教諭が高い声を張り上げ自分の受け持つクラスの生徒の名前を呼び上げていた。

ア行から始まり、カ行サ行と続いていく。

そして夕行の一番最初の生徒が呼ばれた。

「一年一組十八番！高町なのは！！」

「はいー」

甘栗色の髪を両サイドでくくった、特徴的な髪型の少女が力一杯に声を張り上げて席を立った。

碧色の瞳が印象的な可愛らしい少女だった。

将来はきっと美人になるだろう。

一葉は漠然とそんなことを考えながら、自分の名前は呼ばれるまで重い瞼をこらえながら自分の名前が呼ばれるまで待った。

この時はまだ、その少女と自分が深く、長い付き合いになるなどこの時には露ほどにも思っていなかった。

一話目 入学式（後書き）

小説を書くのは難しい…。

本筋の主人公をようやく出すことができました。

二話目 きっかけ

時間の流れとは早いもので、気がついたら既に三年の時間が流れた。

言は体を表すとはよく言ったものである。子供はまさに怪獣だ。

最初の内はおとなしかった新入生も新しい状況に慣れるに連れてその本領を發揮していった。

好奇心の塊たちは事あるごとに大声を出し、騒ぎ、暴れる。一葉としては落ち着きのない三年間だった。

例えば、酷いようだが同時に充実した三年間でもあった気がする。というか気がしたい。

でなければやっていけないからだ。

おもに精神面で。

小学生に限らず、学校ではクラスを超えたコミュニティが自然と出来上がってくる出来上がってくる。

それは帰る家の方向が一緒だったり、趣味が同じだったり、休み時間に同じボールを追いかけたり、性格が合わなくとも何故か馬の合うやつらといったグループに分かれる。

とくに小学生は、気恥ずかしいのか知らないが確実に男女別に分かれるものだ。

少なくとも、一葉の前世ではそうだった。

そうだったのだが…、

「なんでこうなってるのかなあ…」

「どうしたのよ急に？」

「んにゃ。改めて思うとなんで君らと飯をこうしてつついているのか自分でも不思議になつてさ」

昼休みの時間帯。聖祥は給食はなく、昼食は各自弁当を持っていくことになっている。そして食事をする場所も大抵は制限されない。校舎の屋上の一角を陣取りながら一葉は屋上で自分の母が作った弁当箱をつまみながらしみじみといった。

「私たちとごはん食べるの嫌なの？」

本当に悲しそうな声で聞いてくる。冗談が通じない。

「違うよ。一葉くんは恥ずかしかつてるんだよ？」

「そうなの？」

上目遣いで聞いてくる目の前の少女とすぐ横から鋭い視線を送る少女。多分此処で違つたならば目の前の猫は泣きだし、隣の金髪ツンデレは吠えるだろう。

「一応そういうことにしとく」

「何よその言い方」

「君らの言うところの照れ隠し」

軽口をたたき合いながら、昼餉は休み時間をめいいっぱい使ってゆっくりと進む。

下の校庭からは、サッカーボールを追いかける児童の笑い声が聞こえてくる。

本来、オレはあっちにいるべきなんだよなあ…、

一葉は、自分と共に昼食を楽しむ少女たち…、左から月村すずか、高町なのは。アリサ・バニングスを見てつくづく思った。

なんでこういった状況になっているのかと言うと話は約二年前までに遡る。

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

その日は気持ちのよい春日和で、どこまでも突き抜けるように天気の良い日だった。

校庭に植えられている、新芽がでたばかりのイチヨウやキンモクセイが太陽の光でキラキラと輝いているようだった。

入学式が終わってからの半月間、一葉はほぼ毎日といっていいほど図書室に通いつめていた。

聖祥の図書室は四つある内の西側に位置している三階建ての校舎の二階にある。

入学してから二週間、一葉は毎日のように図書室に通いつめており必要な文献が一番近いということもあっていつの間にか窓側の一番端の席が定位置となっていた。

聖祥の図書室は狭いわけではなく、むしろ広いと定義される面積を持つがその蔵書量から所狭しと並べられる本棚に圧迫されて身狭さ

を感じてしまう。

部屋の中心には生徒が座れる読本のブースがあるが、二十人も座ればいっぱいになってしまふ。基本的にこの図書室のスタンスは読みたいものがあるならば借りて自宅で読め。といったものだ。

つまり普段は読本ブースに座って本を読む生徒は滅多にいないのだ。その証拠に一葉が初めてその椅子に座ったとき、推定三センチ程の埃がたまっていた。

使われないだけでなく掃除も手を抜かれており、それにすら今まで誰も気がつかないという現状だったことが伺える。

そして、図書室に来る生徒も徐々に減っていると極稀にしか来ない司書の先生も言っていた気がする。

やはり今の児童は活字離れの傾向にあるようだ。

一葉自身も読書が嫌いというわけではないが、特筆して好きというわけではない。むしろ情報収集のためだった。

かつて、自分が生きていた世界と過去の事例が相違点が多いことに気づいていたがそれを堂々と両親の前で調べるのは気が引けた。

なぜなら、過去に起きたの重大事件や災害といったものをひたすら調べ続ける幼稚園児を見て大人はいい顔をするだろうか。しかもそれが自分たちの子供だ。

少なくとも、一葉自身もそのような子供がいたら気味が悪いと思う。それが自分の子供だったらなおさらだ。

市の図書館という手もあったが、人気がないことを考慮に入れると最初は手ごころな学校の図書館から始めよう考えだった。

一葉は半ば指定席となった窓側の一番端の席を陣取った。ここは風の通り道なのか気持ちの良い風が入ってくる。

鞆だけを置き、必要な資料を取りに行こうとしたときに、ふと窓の外からカーテンの隙間を通して耳障りな喧騒が聞こえてきた気が

した。

一葉は、本を探す手を止めて年季の入った黄ばんだ白いカーテンを開けて窓の外を眺めた。声の発生源の方に視線を移すと、そこには何かを奪い合っている二人の少女の姿が見えた

「あれは確か…」

アリサ・バニングスと月村すずか。二人とも髪に特徴がありすぎるために遠目からでも一目でわかる。

「なんだってあの二人が…、」

一葉の中で二人の印象は正反対のものだった。

アリサは負けん気が強い勝気な女の子。一葉と同様に入学試験が満点だった一人だと聞いている。

相当な負けず嫌いらしく、ことあるごとに一葉に突っかかってきていた。

そして月村すずかは、どこか儂げなおとなしい少女。

あれは人と馴染めないのではなく自分から他人との一線を引いているように伺える。小学生に似合わず、どこか達観した印象のある少女だった。

一葉が見ている間にも二人の声はどんどん大きなものとなっていく。どちらかがいつ手を出してもおかしくない状況だ。

「見ちゃったしなあ…、仕方ないか」

まだ中休み中だ。ここで本を読み漁る時間を逃しても放課後がある。

そんなことを考えながら、半ば駆け足で一葉は二人のもとへと向かった。

一葉が現場に付いた時に見たものは高町なのはが思いつきりアリサに平手打ちをしている瞬間だった。

綺麗に入ったらしく気持ちのいい程に乾いた音が響いていた。

アリサは殴られた箇所を自分の手で押さえながら敵意に満ちた目でなのはを睨みつけている。

「なにすんのよ!!」

「痛い？」

アリサの激昂した声とは正反対に冷静な声で返すのは。それがアリサにとって更なる苛立ちを覚える。

「当たり前でしょ！」

今にも掴みかからんばかりの雰囲気、本来の当事者であるすずかは顔を青くして一歩引いたところで見ている。

「そう、でもね。大切なモノをとられた人はもつと痛いんだよ？」

その言葉を聞いて一葉は心の中で感嘆の声を上げた。

一葉の中では高町なのは自分の意見を主張しない周囲に流されやすい女の子だという印象があった。その子が気の強いアリサに平手打ちしただけでなくそれほどまでの啖呵を切ったことに一葉は純粹に感心していた。

ともあれ、何となく状況は読めてきた。

なのはが手に持っているカチューシャが原因だろう。おそらく、すずかのカチューシャを無理やりアリサがとってそれをなのはが取り返した。といったところか。

激昂した相手に正論を吹っ掛けることは火の中にガソリンを投げ込む行為に等しい。言葉で反論できないとなるとすぐに行動に移すからだ。

事実、場は既に一触即発の空気だった。何かきっかけがあればアリサがなのはに掴みかかる映像がいやにリアルに想像できる。

早急な事態の收拾が必要だと判断し、一葉は一步前に出て二回ほど自分の掌を叩いた。

突然の響いた乾いた音に全員が目を丸くして一斉に一葉の方を見る。

「はい、そこまで。休み時間終わるよ」

突然現れた乱入者に呆気にとられていた三人の中で一番早く思考が回復したのはアリサだった。一葉の顔を見るや否やい殺すような視線を送ってくる。

「なによ！あなたには関係ないでしょ！」

ウム、正に正論。一葉はこのことに関しては確かに無関係である。しかし、出てきてしまった以上は格好悪すぎて引き下がることはできない。

「確かに関係ないかもしれないけどさ…、例えばバニングスって犬飼ってるよね？」

「なんで知ってるのよ!？」

いちいち、怒鳴って返さないで欲しい。もう誰が何をしゃべっても怒りのスイッチなのだろうなあと考えつつも一葉は続けた。たしなめることは逆効果だとわかりきっているので決してしない。

「イヤ、いつも制服に犬の毛ついてるし。それはともかくオレがさ、ある日バニングスの家で飼ってる犬を誘拐したらどう思う？怒るでしょ？」

「当たり前でしょ!」

「じゃあ、なんで怒るのかその理由を考えてみよう。」

「そんなの…!」

アリサは聡明な少女だ。頭の回転が非常に速い。そこまで言いかけて一葉が言わんとしたことを理解したのだろう。段々と怒気を孕んだ声が尻すぼみになっていく。

「少し冷静になってからもう一度話し合おうか。授業終わってからでいいんじゃない？」

新入生は最初の二ヶ月間は午前授業で終わる。沸騰した頭を冷やすにはちょうどいい時間だろう。

それに今のアリサの反応を見る限り、罪悪感を感じているようだ。きつと根はいい子なのだろうと思いつつ一葉はまだ呆けている二人にも話しかけた。

「二人もそれでよい？」

「え？う、うん」

「私も大丈夫…です」

「…、必要ないわよ」

絞り出すような声でアリサが言った。俯つむいているために表情はよく見えないがきつと涙をこらえていることが伺える声だった。

「ごめんなさい。私が悪かったわ」

そう言ってアリサはすずかに頭を下げた。さすがにこれには一葉も驚いた。

アリサは子供の割にはプライドが高いという印象を持っていたので、簡単に頭を下げることはないと思っていたからである。

「ううん。もういいよ」

すずかもすんなりとアリサの謝罪を受け入れた。こう言うてはアリサだが、くだらないことが発端の喧嘩ほどすんなりと仲直りできるものである。

それはともかくとして、もう一人謝罪させなければならぬ人間

がいる。

「オイ高町」

「にゃ、にゃあ！」

一葉が突然話しかけたので驚いたのだろう。猫のような奇声で返事をした。

「お前もバニングスに言わなきゃならないんことがあるんでない？」

「え？うっうん」

なのはは一葉が何を言いたいのか瞬時に理解したようだった。申し訳ない気持ちがあったのだろう。なのはとしてもきっかけを伺っていたのだ。

「あ、あの…、顔たたいちゃってごめんなさい」

「いいのよ。私が悪かったんだし」

何だみんないい子じゃないか。一葉はそう思った。

多分色々なすれ違いで、このようなケンカになってしまったがこの様子だと尾を引くことはなさそうだ。

三人が三人とも自分の非を認め、許し合っている。それは非常に美しくも微笑ましい光景であった。

しかし、一葉はその空気を壊して冷酷な事実を三人に付きつけなければならなかった。

「あ〜っと、いいかな？」

「あ…、緋山くんもありがとう。止めに入ってくれて」

「さすがが一葉にも感謝の辞を述べるとそれに続くようにアリサ、なのはと続いていく。」

「私からも礼を言っておくわ。アンタが来なかったら私多分なのはを殴ってたわ」

「にやあ!？そうなの!？」

「あ…、うん。それはいいんだけどさ。ちょっと言っていていいかな？」

「何よ？」

首をかしげる三人娘。頭の上には？マークが見えるようである。この分だと本当に気がついていないんだな、と内心で呆れつつ一葉は三人に言った。

「チャイムとつくの昔になり終わってんだけど」

「え…?」

それは誰の言葉かわからない。もしかしたら三人の声が重なっていたのかもしれない。三人の顔色が面白いように青くなっている。

小学一年生にとって、授業を無断でサボることは大冒険にも勝るスリリングさがある。ただしハイリスクノーリターンだが。

「走る？」

一葉のその言葉にその場にいた全員は一斉に走り出した。

「な、なんでもっと早く言ってくれなかったのよ!？」

「そんなこと言える空気だったと思うか!？」

「じゅ、授業サボったつてばれたら、お姉ちゃんに怒られる…、」

「にゃ〜!?! 待ってよみんな〜!?!」

一人送れるなのは。運動音痴ここに極まる。

瞬発力の問題なのだろうか、そんなに長い時間走っていないにもかかわらず既にかかなりの差ができていた。

「ええい! 高町はオレが引つ張っていくから二人は先に行つてくれ!?!」

「うん!」

「わかつたわ!」

そうして一葉一人だけ踵を返し名の葉を迎えに行き、苦しそうに息をしながら走るなのは手を掴んで教室まで強制的に走らせることとなった

ともあれ、大幅に授業に遅れた四人仲好く廊下に立たされた。それがきっかけて仲良くなった訳である。

結局放課後まで立たされた四人はそれぞれの帰途についた。

アリサとすずかは迎えの車に乗って帰って行ったので、今は一葉となのはの二人だけである。

「緋山くんはすごいね…、」

「何が？」

どこか気落ちした声のなのはに一葉は素っ気なく応える。

今一葉は、一つの小石を延々と蹴りつづけている。精神年齢が既に二十代に入っていると聞いてもこういう単純作業は意味もなく楽しいものだった。

「だって、今日言葉だけでアリサちゃんを止めたでしょ。私なんて暴力を振るうことしかできなかったのに…」

「イヤ、あれはあれで正解だったの思うよ」

「え？」

「あの時のバニングスは頭に血が上ってたからね。頭冷やさせるためには何かしらのきっかけが必要だったんだよ。それがたまたま高町の場合は平手打ちだった。

多少乱暴だけど、仲直りできたからそれでいいんでね？」

「でも…、」

「それにさ、オレはあれで高町の印象変わったよ」

「え？」

一葉は大きく足を振って、ずっと転がしながら運んでいた小石を蹴った。

綺麗な弧を描いて石は赤く塗られた逆三角形の標識のど真ん中に命中する。

「高町はさ、自分の意見言つの苦手だろ？」

なのはは押し黙ってしまった。一葉はこの沈黙を肯定の意として受け取る。

「少なくともオレは今日までそう見えただね。その高町がバニングスを平手打ちしてあれだけの啖呵を切ったんだ」

「たんか？」

ふむ、小学一年生には少々難しい単語だったか。

「すごいかつこいいことを言うって意味だよ」

今まで並んで歩いてきた一葉は一步大きく飛び出してなのはの前に出た。そうして振り返り、なのはの顔をようやく見る。

「暴力はいけないことかもしれないが、人のために振るうことができる奴は本当に優しい奴だけだと思う。

それに高町はバニングスに悪いことをしたと思ってたんだろ。だからあんなに素直に謝ることができた。」

人のために力を振るうことができ、人の痛みを知ることができる。

オレからしたらそんな高町の方がよっぽどすごいよ」

その言葉の通り一葉からしたら、なのはの方がひどく眩しく映った。

かつての一葉だった存在は常に自分のために戦い、自分のために誰かを傷つけ、そして自分のために世界を殺した。

例えそれが、前世の話で自分という実感がなかったとしても記録を持つ一葉は、根底が同じな自分も一緒誰かのために何かをできる人間ではないことを知っていた。

「高町は自分で思ってるよりもすごい人間だよ」

一葉の言葉を最後まで聞いたなのはの頬に大粒の雫がぼろぼろと零れおちた。

あまりに突然のことに、一葉はひどく慌ててしまう。

「ちよっ…！なんで泣くんだよ！？」

「わ…判んない。判んないけど…、」

とめどなく溢れ出てくる涙を両手で拭いながらしゃっくり混じりで応える。

この時はまだ知らなかったが、なのはの家は父親が大けがをしてその間家族はなのはを一人にしていたと一葉は後で聞いた。

『高町は自分で思っているよりもすごい人間だよ』

人に迷惑をかけてはいけない、自分はいいい子でなければならぬ。

その根底にあるものは誰かに認められたい、受け入れてほしいといったものだ。

一葉がかけた言葉はなのはを縛りつづけていた強迫概念から解放するためには充分なものだった。

だが、まだ幼いなのはにそれを理解する術はなく、ただ解放の歡喜を涙としてでしか出すことができなかった。

「ありがとう…」

「どういたしまして？」

なのはが紡いだ感謝の言葉に一葉は意味もわからず応えるしかなかった。

結局一葉はなのはが泣きやむまで近くの公園で休み、家まで送った。そしてその日を境に、一葉となのはは下の名前で呼び合うようになった。

一話目 きっかけ（後書き）

ちゃんとした文章になっているだろうか？

出来れば感想お願いします。

第三話 声

殺した。

殺した。

殺して殺して殺しつくした。

漆黒を彩る夜天に浮かぶ円い月だけが全てを見ていた。

まるでその一画だけが、異世界のように血の赤に染め上がっており、辺りには鼻をつく粘ついた血のおいが充満している。

修復が不可能なほどに無残に解体された無数の元人間だったモノの骨と血肉。

その中心で獣は嗟う。

殺しの興奮がまだ冷まないのか、それとも血の酔ったのか、獣にとって戦いはどんな食材よりも腹を満たし、どんな美酒よりも狂わせた。

獣は嗟う。

自分が壊れてしまったことがおかしくて、

自分が狂ってしまったことが悔しくて、

自分のために涙を流してくれた人を裏切ったことが情けなくて、

獣は嗟う。

全ての光を振り切って、

全ての救いを拒み続けて、

全ての十字架をその背に背負って獣は嗤う。

それでも獣は願わずにはいられなかった。

血と業に塗れながらも、それでも天国に憧れた。

そして獣は嗤い続ける。

ああ…、世界など死んでしまえばいいのに…、と

『い…、て。…か、きづ…、さ…』

魔法少女リリカルなのは Broken beast

結局今日もいつもの面子で昼休みを過ごすこととなる。

「一葉君はどうするの？」

「なにが？」

すずかの突然の問いかけに一葉は慌てて頭を上げた。そこには柔らかな微笑みをつくっている。

「アンタ、話聞いてたの?」

「んにゃ。全く」

一葉が正直に答えると、目の前の三人娘は呆れたよう大きなため息をついた。

「進路の話よ。さっきプリントもらったでしょ?」

「進路? ああ、そういやもらった気がするわ」

「気がするじゃなくてもらってるのよ!」

しかし、小学三年生に将来の進路を考えるとこのはいささか酷でなのではないかと思う。

昨今の大学生でさえ自身の将来には霧がかかっているというのに小学生に『将来の夢』ではなく『進路』を求めるのはさすが名門といったところなのか。

しかし、話を聞く限りアリサは親の会社を継ぐために経済系、すずかは工学系に進むと明言している。

何ともできた小学生だ、と一葉は声に出さないにしても驚嘆していた。

「そういや、なのははどうすんの?」

今まで話に参加していなかったなのはに話を振ると以外にも深刻に悩んでいるようだった。

「進路…、かあ」

「意外ね。てっきり「翠屋を継ぐの！」って言いだすかと思ったのよ」

アリサのその発言に一葉は口に入れていたサヤエンドウに煮付けを吹き出し、すずかは飲んでいたお茶を吹き出しそうになるのを必死にこらえていた。

それに悪気はなく、なのを馬鹿にしたつもりはないのだが、アリサがしたなのはモノマネが意外に上手く二人とも何かしらのツボはまっけてしまったのだ。

「ちょ…、アリサちゃん…、」

「アリサの意外な才能を垣間見た気がした…、会社継がなくてもモノマネ芸人で食っていけるんじゃないのか？」

笑いを必死にかみ殺して言う二人に対してアリサは悪のりしたのか、いやらしい笑みを造ってさらに続ける。

「なんなの！私は翠屋を継ぐの！！ニヤー！！」

一葉とすずかは完全に吹き出してしまった。一葉は既に口に含んでいたモノはなくなっていたが、お茶がまだ口に入ったままだったすずかからは綺麗な霧上になったお茶が吹き出た。

角度によっては虹が見えそうである。

自分の友人が友人のモノマネをすると以外と楽しいものである。

それが、普段そういうことをやりそうにないアリサだったらなおさらだ。

すずかは羞恥のためか顔を赤くして、ハンカチで口元を拭いている。なのはからかわれたことを怒っているのかニヤァ、ニヤァ言いながら抗議している。

一葉はそのあまりにも楽しい光景に涙を流すことをこらえながら笑う。

かつての自分が知ることのできなかった、あまりにも温かく穏やかな時間が確かにそこにはあった。

渴望し、求めて求めて止まなくて、己の命を捨ててまで望んだモノが今目の前にある。それがおかしくて一葉は笑った。

結局、どういうわけかこの三人とともに過ごす自分外最も型にはまっていると思わざるを得ない一葉だった。その日も普段通り、放課後まで一葉は放課後まで三人娘といることとなった。

その日は珍しくアリサも、すずかも習い事のない日だったために皆がそろって帰れる日だった。

授業が終わると同時に吐き出されるように校門を抜ける同じ制服を着た生徒たちの流れに乗り帰途につく。

他の歩行者に迷惑になると知りつつも横一列に並んで歩く四人組はいつもの面子である。

「一葉くん、大丈夫なの？」

なのはが不意にそんなのことを聞いてきた。つい先ほどまでなのはの実家が経営している翠屋の新作スイーツの話題だったにもかかわらず、その空気の読めなさに一葉は感嘆せずにはいられなかった。

「確かに、今日のアンド確かに変よ」

「具合悪いの？」

アリサ、すずかと先ほどまで全く関係ない話題に盛り上がっていた二人も一葉の様子を伺ってくる。

おそらく二人も一葉がいつもの調子と違うことに気が付いていたのだろうが、タイミングを逃し続け切り出せなかったのだろう。

「今日のオレ、そんなに変か？」

「うん。なんからしくないというか、何を聞いても上の空というか…、」

「それにあんだ今日、授業中ずっと外眺めてたでしょ？」

子供の注意力は中々侮れない。純粹であるが故、人の心中の機微に敏感なのだ。いつも一緒に行動していたということが最も大きな要因と言えるが、三人は一葉が普段と様子が違うことに気がついてきた。

「ここんとこ夢見が悪くてね。若干寝不足だけだよ」

さも何でもないように装いながら言う。この時、一葉は嘘は言わなかったが本当のこととも言わなかった。

どういいうわけか、ここ最近一葉はこの世界に来る前の自分の夢をよく見るようになっていた。

影を求めて、骨を軋らせ、血肉を啜り、世界を殺そうと心に誓っ

た時の夢だ。

獣だ鬼だと畏怖と蔑視で見られていた時の自分。

戦い、傷つけ、殺すことでしか生きていると実感できなかった自分。

もし、ここでなのはたちに自分のことを話してもきっと彼女たちは信じないだろう。

前世のころの夢を見るなど妄言もいいところだ。仮に信じたとしても、とても陰惨なその内容を話すわけにはいかない。

そんなことをすれば、きっと彼女たちは自分から離れていってしまっただろう。

それは嫌だった。今、間違いなく楽しいと断言できるこの時間を終わらせることだけは一葉は避けたかった。

「どんな夢見るのよ？」

アリスが眉をひそめて聞いてくる。他人の夢の話ほどどうでもいい物はないというのに律儀なものだと内心で思いながら適当にぼやかすことにした。

「あんまり覚えてない。いやな夢だったな〜って感じは残ってんだけどね。でも夢ってそんなものでしょ？」

「そうかな？私は割と夢の内容覚えてる方だけど」

「そういう人の方が少ないらしいよ」

同じ制服を着た生徒たちの流れは商店街の近くまでくるとだいぶ

まばらになつてくる。

商店街のアーケードの入口を中心に、商店街側に住居を構える家族と住宅地側に住居を構える家族とで別れるのが原因だ。

この四人の中では、一葉、アリサが住宅街に住んでいる。すずかは少し離れた郊外に屋敷を構えており、なのはだけが商店街側に住んでいる。

いつもならば、ここでさようならなのだ。今日はみんなで翠屋にお茶を飲みに行くことになっているために綺麗なモザイク調の石畳が敷かれた商店街に四人は入った。

実は、この道は通学路ではないが、商店街を突っ切たほうが遥かに時間が短縮できるのである。

「そっぴや、妙な声が聞こえてたな」

「声？」

ふと思ひ出したように一葉は夢の中で聞こえてきた声のことを言つた。

あの夢は過去の自分の記録のはずだ。しかし、最後にノイズが入るように聞こえてきた声には全くその記録が残っていないかつた。

「ああ、なんか「誰か気付いて下さい」って言つてた」

「何よそれ？」

アリサとすずかは再び眉をひそめが、一人だけ違つた反応を見せたのはなのはだつた。

「ねっねえ！その声つてもしかして男の子の声だつた！？」

「んにゃ、全く違う。女の人の声」

「そ…、そうなの？」

「そうなの」

しゅんとしてしまったなのはをみて一葉だけでなく、すずかもアリサも訝しんだようになのはを見る。何か思うところがあるのだろうか。

「なあ、なのは」

「にゃ？」

一葉は声をかけるとなのはは顔を上げた。

「なのはが言ってる声って、今聞こえてるやつのことか？」

『誰か…、僕の声を…聞いて…』

「にゃ！そう！これなの！」

なのははハツとした表情をつくり首を何度も縦に振った。

実は先ほどから聞こえていたのだが、ひどく小さな声なうえに今の今まで誰も反応していなかったので一葉は自分の中で幻聴だろうか勝手に解釈していたのだがなのはの反応を見る限り幻聴の類ではないのだろう。

「声？すずか聞こえる？」

「うん」

「すぐかは首を横に振る。二人にはおそらく本当に聞こえていないのだろう。」

「幽霊とかだったりして」

「冗談半分で一葉は言ってみただが、意外にも面白い反応を見せたのはアリサだった。顔が青を通り越して白くなっている。」

「アリサ、もしかしてホラー苦手？」

「ちっ違っわよ！」

「吠えるアリサ。しかし、弱冠声が震えているので全くといっていいほど説得力がない。」

「これは間違いなく面白いことになる。一葉は予感めいたものを感じた。」

「なのは、声のする方わかる？」

「うん！こっちなー！」

「そう言っで一葉の手を取って駆けだすなのは。一葉は引っ張られる直前にしっかりとアリサの制服の袖を掴んでいた。」

「ちよっ！離しなさいよー！」

「断る」

「なっなんでよ!？」

なのは引つ張られる一葉に引つ張られるアリサは抵抗してみる者の、掴まれた腕が外れることはなかった。

連結された三人に並走して走るすずかは笑っていた。

「アリサちゃん、アリサちゃん。怖くないんでしょ？」

いかんせん、先頭を走るのが運動音痴なのはなのだ。

運動能力が他と群を抜いているすずかは息一つ乱さずに走っている。

「当たり前でしょ！」

先ほどの白い顔が嘘のように今のアリサの顔は真っ赤だった。怒っているのか、一葉に手を掴まれている羞恥心なのか、間違いなく前者だがすずかは続けた。

「じゃあ、なんで嫌がるの?」

行こうよ。という強制ではなく問いかけて聞くすずか。プライドの高いアリサが絶対に理由を言わないだろう。さらに、そうすることと思考と回答の幅を制限させることができる。

あくまで、アリサの意思で行くという言葉ですずかは口から出させるつもりだった。

押し黙るアリサをしり目に、一葉はすずかに視線を送った。よくやった!と。

そして、すずかはそれに視線で応えた。だって面白くなりそうなんだもん！と。

視線で人は意思を疎通させることができるのだ。

「わかったわよ！ついていけばいいんでしょ！？」

結局、策にはまったアリサはすずかが一番欲しかった言葉を口から出した。声が震えているのは、走りながら会話をしてたために息が切れていたからということにしといてあげよう。

その瞬間にすずかが心の中でガッツポーズをしているのが間違いない。なく見えた。

それが一葉と、すずかが視線だけで会話をできるようになった初めての瞬間だった。

第三話 声（後書き）

ようやく本編に追い付きました。

原作見たことないんで、ここからどうなるのか正直自分でも判りません。

四話目 遭遇

思えばあれが始まりだったのだ。

後になって一葉はそう思うようになる。

もし、あの時に声を無視していたら、彼に出会っていなければ今の自分はいなかっただろう。

それは一葉だけではない。

高町なのはも、後に出会う戦友たちも。きっとあれが節目だったのだ。

絶え間なく流れる川のように進む時間の中で、あの時間違いなく自分たちは岐路に立ったのだ。

魔法少女リリカルなのは〜Broken beast〜

なのはたちが住む海鳴市は関東の南に位置する。漁港がないために海産は盛んではないが、文字通り海が名物の街だ。シーズンになると多くの観光客がやってくる。

そして、もっともその海を美しく見れるという観光スポットが海鳴公園と呼ばれる場所である。

夕暮れ時となると、黄昏色になった太陽が海を蜂蜜を垂れ流した

かのような朱金色に海を染め上げる。

今がまさにその時間帯であった。

朱色の染料を垂れ流したかのような空は、まばらに浮かぶ縹雲をも同じ色に染め、地平まで続く海は太陽の輝きを反射させてキラキラと輝いていた。

なのはを先頭に走りつづけた四人がついたのは、その海鳴公園だった。

沈みかけた西日が長い影をつくる。

なのはは一葉の腕を掴んだまま、声のする方へと歩を進めた。

「声が大きくなってきたの！」

「言われんでもわかる。いい加減手を離してくれ」

「あんたもね」

実は一葉はまだアリサの手を掴んだままだった。そのアリサはずかの制服の裾をギュツと握りしめていた。

腕を介してアリサの冷たい腕から微かな震えが伝わってくる。

なのはがここだと公園に入った瞬間からアリサの顔は青くしたままだった。

「ねえ、本当に聞こえるの？その声」

アリサに比べてずかは何ろりとした表情で一葉に言う。胆が据わっているのか、はたまたホラーが大好きなのか、半ば目が輝いている気もする。

「今も聞こえるよー。助けてくれー、助けてくれー、足をくれー」

だつて」

「そんなこと言っていないの!」

なのはに怒られた。確かに助けを求める声をダシにアリサが怖がるようなことを言うのはいささか不謹慎すぎたかもしれない。

「ゴメンゴメン。聞こえるのは本当だよ。でも、これでマジで変死体とか発見したらヤダあ…!」

最後の台詞を聞いたアリサが今にも泣いてしまいそうなのにいつそう顔をこわばらせる。それはどこかおびえた小動物を彷彿させる。

結局、一葉はなのはに手をひかれ、アリサは一葉に手をひかれ、ずずかがアリサに引つ張られると言ったおかしな一団がぞろぞろと公園を歩く。

人気がないわけではないので訝しんだような視線がときどき送られてくる。

しばらく歩くと、公園に創られた人工の緑地帯。その茂みが去りと動いた。

ヒツ!とアリサの咽喉から引かれたような声が出てきたが皆は聞かなかつたことにしてあげた。

おそらく、ここで追い打ちをかけると本当に泣き出してしまいそうな気がしたからだ。

「ここなの」

なのははそいうと音の下茂みに入って行った。今さらだがこの中で一番胆が据わっているのはなのはかもしれない。

木々が重なり、その隙間からしか光が入らない薄暗い緑地の中を歩くとそこにいたのは幽霊ではなかった。

「イタチ？」

他よりも少し太いカシの木の根元で蹲るように眠っている小動物がいた。

なのはは一葉の手を離しイタチのもとまで駆けると、まるで壊れ物を扱うかのように優しく抱き上げると白い制服に血がついたことに気がついた。

呼吸はまだしているので生きていることには間違いないが、ぐったりとしままピクリとも動かない。このままだといつ事切れるかもわからない。

「怪我してるの……」

「確か商店街から少し外れたところに動物病院あったな…、そこにつれてこよう」

よく見てみると、イタチの首には赤い宝石がつけられていた。

誰かに飼われていたのだろう。脱走してところを猫かカラスにやられたのかもしれないと一葉は思った。

ともかく、早いところ病院に連れていかないとまずいことは判り切っていたのでなのはがイタチを抱えたまま来た道を駆け足で戻ることとなる。

「しかし幽霊を探しに来て手負いのイタチを見つけたとは」

「ふん。幽霊なんていない証拠よ」

先ほどまでの様子が嘘だったかのようにアリサの様子が戻っていた。まるで鬼の首を取ったかのように不敵な笑みを浮かべている。

「でも、助けてって声を辿ってついた先に怪我をしたいたちが居たんだ。もしかしてあいつが呼んでたのかね？」

そついう超常現象があるならば幽霊が居てもおかしくないと付け加えると、アリサの顔はまた青くなった。やはりアリサは面白い。

そう思いながら走っていると、不意に目に入ったすずかの浮かない表情が目に入った。

どこか儂げで、触れれば壊れてしまいそつなその表情は何故か一葉は印象に残った。

一葉がその理由を知るのはしばらく後のこととなる。

五話目 もう一つの声

動物病院と海鳴公園はそう距離はなく、怪我をしたいたちを抱えた一葉たちは転がるように病院の入口へと入って行った。

幸いなことに他に診察待ちの患畜はおらず、すぐにイタチを診てもらえることとなった。

結果だけ言ってしまうと、イタチの怪我自体はそうひどくはないらしいのだが衰弱が激しいのでしばらく入院が必要とのこと。

そして、あれはイタチではなくフェレットだそうだ。

「イタチとフェレットってどう違うんですか？」

一葉が好奇心で診てくれた先生に聞いてみたところ「品種？」と疑問形で返された。

本当に獣医なのだろうか、と一瞬疑ったのだが腕は確からしく瞬間に四人が持ち込んだフェレットの処置を終えてしまった。

一葉が診察料は明日持つてくるとので待つてくれと言ったところ、大笑いして子供がそんなことを気にする必要はないと言ってくれたのだが、病院だって慈善事業ではない。

フェレットに使った薬や包帯もただではないうえに、入院中の費用だって人間と違って保険のきかない動物ならばバカにはならないはずだ。

「君たちが今日したことはとっても尊いことなのよ。私としてはそれが報酬。お金なんて取れるわけないでしょ」

「ただ、と続けようとしたが少しは大人に格好つけなさいと言われ封殺されてしまった。」

「見かけよりもぎつくらばんな性格をした先生に礼を言い、明日再び顔を出すことを伝えると四人は動物病院を後にした。」

「四人が動物病院を出ると、既に陽は半分以上が沈みかけており切れかかった街灯が神経質に点滅している。」

「最近はずかしくなり、陽の出ている時間も長くなったのだが陽が沈むと身を切るような寒さがまだ残っていた。」

「一葉となのははともかくとして、郊外に住んでいるはずかと住宅街の一番端に住んでいるアリサは歩いて帰るのならば危険な時間帯となってしまうために迎えの車を呼ぶこととなった。」

「そしてアリサとすずが迎えに来る車が来る前に、四人は決めておかなければならないことがあった。」

「それはフェレットの引き取り先である。」

「拾って、治療が終わり完治したら野生に返すなどということができる人間はここにはいなかった。」

「そしてあのフェレットは元々誰かに飼われていたのだろう。赤い宝石のついた首輪がその証拠だ。」

「捨てられたか脱走したかまでは判らないが、少なくともそれが判るまで保護をする必要があったのだ。」

「私の家は犬が居るから無理ね」

「ごめんなさい。私の家もちょっと…」

「確か、アリサの家は犬屋敷ですずかの家は猫屋敷だったと記憶している。」

そのような場所にフェレットなどという小動物を放り込んだならば、アリサの家ではボロ雑巾以下になるまでもおもちやにされるか、すずかの家では猫の腹を満たす餌になることしか想像ができなかった。

いくら二人の家の敷地が広大といえど、わざわざフェレットの墓をつくらせることはない。

そしてなのはの家では飲食業を営んでいるために動物を飼育することは極力避けなければならぬ。

つまり消去法でいくと一葉の家しか残らないのである。

捨てられた子犬のように懇願するような三人の視線に耐えきれなくなった一葉は、一応親に聞いてみるから明日まで待ってくれ。と言ったところでちょうど二人の迎えの車がやってきた。

なのはは方向が同じなすずかの家の車に乗せてもらい帰って行き、一葉もアリサに乗っていくかと聞かれたが用事があると言い謹んで断った。

一葉が一人になったときには太陽が西の水平線に完全姿を隠し、空には半分に掛けた月が浮かんでいた。

「やっ…、」

そうして一葉は歩き出す。

声が誘う場所へと。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

『誰かこの声に気付いて…、』

まるで脳を中心に直接スピーカーが埋め込まれたように響く声に誘われて一葉は歩き出した。

先ほどのフェレットを見つけた時に聞こえていた声とは違う、穏やかな女性の声だ。

そして、一葉の夢の中で聞いた声でもあった。

フェレットを病院へ担ぎ込んですぐにこの声は聞こえてきた。今度こそ一葉にしか聞こえない声だったらしく、なのはは全くと言っていいほど反応を示していなかった。

さっきまで聞こえていたものよりも遥かに穏やかで静かな声。

海鳴公園とはちょうど真反対にあたる稲荷を祀った八束神社という場所がある。

向かい合った古びた稲荷の石像をしり目に、色が褪せ落ちた鳥居をくぐり煩惱と同じ数だけある百八段の階段をゆっくりと上がっていく。

声はその方向から聞こえていた。

既に神社の明かりは落とされており、街灯もなく下弦の半月だけが一葉の足元を照らしている。

鬱葱とした陰樹の森が本殿のすぐ後ろにあり、一葉は迷うことなく森へと足を踏み入れた。森の中は最低限の手入れしかされておらず、背の高い常緑樹が多く生えている代わりに背の低い植物は全くなかった。

そのおかげで一葉は微かに木漏れる月明かりだけでも足取りを淀ませることなくまっ直ぐと声のする方へ歩いていくことができた。

森へ入ってしばらくすると、一本の巨木が生えていた。樹齡は千

年を軽く超えていそうな杉の木で幹には神木の証である麻縄が結ばれていた。

大人が五人がかりで手をまわしても一周ができないほど太い幹をしている。

「竹取物語かよ・・・、」

一葉の第一声はそれだった。

杉の巨木の一葉の目線と同じ高さ、ちょうど幹の真ん中あたりになるだろうか、大樹の内側からぼんやりと淡く鈍い輝きが滲み出ていた。

暗闇でもわかるその輝きは、間違いなく黒なのだがよく見ると赤や黄、緑と言った様々な色が混じっておりカラスの羽根のように角度によって色が変わって見えた。

一葉はとりあえずその光源に手を伸ばして、触れてみる。

それはおおよそ木の持つ温度ではなく、人肌がそれよりも少し上、ちょうど毛のある獣のような温もりがあった。

『あなたは…？』

不意にそんな声が聞こえてきた。一葉は状況的にこの木の中にいる何か自分が話しかけているのだろうと判断した。

「多分、君に呼ばれてきた。さっきまでの声は君だったんじゃないのか？」

その時、一瞬だけ木を通して伝わってくる手の温もりが上がった気がした。心なしか光も強くなっている気がする。

『私の声が、聞こえたのですか？』

「聞こえていなかったら今こうして会話することもできないと思うが……」

『私を、ここから出してくれるのですか？』

「出し方が解らん。仮にできたとしても実は悪霊でしたってオチは勘弁してもらいたいしな」

一葉のその言葉を聞いてどう言う訳か声の主はクスクスと笑いだしてしまった。それはどこか上品な笑い方で、姿が見えないためにふとすずかの柔和な微笑みを想像してしまう。

『安心してください。私はいわゆる霊的なものではありませんから。むしろあなたたちが機械と称するモノに近い』

「その機械がなんで木の中にいるんだよ？」

『不運が重なったとしか言いようがありません』

「それに今言ったばかりだが、出し方を知らない。いくらなんでも神木を傷つけるわけにはいかないだろう」

『それは大丈夫です。手をかざしたまま木に魔力を送ってください』

「まりよくってなんだよ？」

知らない単語が出てきた一葉は眉をひそめながら反芻すると、声は落ち着いたまま続けた。

『そうですか。ここはまだ管理外世界なのですね』

そういつと一拍置いて声に真剣味が増した。

『よろしい。では私の言うとおりにしてください』

「ちょっと待てや。なんでいつの間になんな上から目線になってるんだ？」

『久しぶりに人と話すので興奮しているのですよ。気にしないでください』

不本意ながら一葉はその声の通りに従うこととする。ただし、実は心靈系の類でただ瞬間に憑かれ殺されてはたまったものではないのでいつでも走って逃げることができるように気持ちだけは森の出口の方へと向いていた。

瞼をおろして集中すると声の言うとおりに心臓の少し奥の方にある温かな何かがあることに気がつく。

その何かを血に乗せて、血管を通して体中へと巡らせ掌に集中させる。

するとぼんやりとした温かさが自分の手に集まっていることが判ったが、一葉は眼を閉じているためにそれを視認することはできない。

それでも確実に何かが起こっているということだけは理解できた。

『そのまま耳を澄ませて下さい。聞こえるはずですが、あなただけ私を起動させるパスワードが』

寒さを孕んだ夜風が森の木々を踊らせる。木葉同士が重なり合う音に混ざってはつきりとした声が一葉の耳に届いた。

「死は我が友…、」

聞こえる。間違いなく、これは一葉のためだけに用意された言葉だった。

「夜は我が僕…、」

身体が熱い。まるで身の内から炎が燃え上がっているのではないかと思うほど胸の奥を中心として熱が体中に広がっていく。

しかし、それは決して不快なものではなくむしろ歓喜さえ覚える。

「鴉にこの身を啄ばませながら…、」

これはかつての自分が血に酔っていた時の感覚に似ている。もしかしたら自分は再びかつての自分に戻ってしまうのではないかという恐怖が浮かんでくるが既に手遅れだった。

一葉は最後の調べを口にする。

「楡の館でお前を待つ」

言い終えた瞬間に、瞼を通して鈍い光が一葉を包んだ。

反射的に一步下がりに顔と頭を手で保護する形をとる。

「ずいぶんと暗くて鬱つうとした機動パスワードですね」

フィルターが外れたかのように、先ほどよりもはつきりとした声

色が聞こえてきた。

瞬間的に力一杯目を瞑ってしまったために僅かに霧がかかるが、一葉は慣らすようにゆっくりと目を開けるとそこにはあり得ないモノがいた。

「はじめまして、マイマスター。私は聖王を守る翼であり、盾。護国四聖獣が一、月の舞い手」

あり得るはずがない、黒い炎を身に纏った一葉と同じ身の丈を持つ黒い怪鳥がかしずくように一葉に頭を垂れていた。

「契約は交わされた。これより私は、あなたのためだけの翼となり盾となりましょう」

そして怪鳥は静かに頭を上げて、まっ直ぐと真摯な視線で一葉を見つめた。

尾も、翼も、クチバシも、全てが黒く染まった怪鳥で唯一黒でない部分、まるで上等のサファイアのような瞳は見ているだけで吸い込まれそうなほどに美しかった。

「あなたが私の新たな王だ」

五話目 もう一つの声（後書き）

オリジナルデバイスを出しました。

黒い鳥の姿をしたユニゾンデバイス。

別に人型じゃなくてもいいよね？

六話目 ベヌウ

「つまりなにか？お前は鳥の形をしてるけど実は機械で、ベルトっていう国で王様の護衛をしていたんだな？」

「ベルトではなくベルカです。そして聖王を守っていたのは正確には私ではなく、私を使用する騎士です」

今一葉は自室にいた。

あの後、一葉は本気で幽霊かと思いとりあえず携帯で写真を撮ってからテレビ局に売り込みに行こうとしたところ目の前にいる鳥に黒い炎で携帯電話を消し炭され、中に入っているデータは全て灰と帰した。

「ふざけたことしないで下さい。私の存在が世に知られれば立場が悪くなるのはあなたです」

そう言われて、原型を失くした携帯を片手に涙を流さずにはいられない一葉だった。

一葉の部屋には必要最低限のものしかない。

八畳ほどの部屋にあるのは、ソファアにもなる折りたたみのベッドとあまり服の入っていないクローゼットとタンス。そして本棚と勉強用の机だけである。他にも趣味で熱帯魚を飼育しているが小学生のお小遣いでは限界があるために二十センチのキューブ水槽に数匹程度の小魚しか入っていない。

一葉はとりあえず家に帰ると、制服を脱いで無地の黒いTシャツとジーンズに着替えた。

両親は共に仕事に出ており、一葉が帰ったときにはまだ帰っていない。帰らなかったため帰りがだいぶ遅くなってしまったことに気づかれない。

今は両親とも一階のリビングでテレビを見ているはずだ。

驚いたことに黒い鳥は自身の大きさを調整できるようで、今は八ト程の大きさとなつて一葉の机の上にいる。横に置いてある紅茶を淹れたマグカップとそう変わらない大きさだ。

「かつての私の主は戦闘中に虚数空間と言う亜空間の奔流にのまれてこの地球にたどり着きました。しかし、主は既にこと切れており私はあの木の根元に落とされたまま長い間放置されていたのです」

「それで成長した木に巻き込まれたってわけか。何とも盛大で間抜けな話だな」

「返す言葉もありませんね」

とりあえず一葉が家に着いてから真つ先にしたことは鳥から話を聞くことだった。

一度好きに喋らせてから解らないことを聞いていくつもりだったのだが、出てくる単語の全てが初めて聞くものだったために予想以上に長い時間を費やすこととなってしまった。

話をまとめると、この鳥は太古に存在した国王を守るための道具だったらしく、戦闘中に時空間の奔流に巻き込まれ地球にまで来たということだ。

持ち主が死に、成長した木に巻き込まれ今日にいたるまでの長い時間自分の声に気がつく魔導士が来るのを待っていており、今日ようやく一葉という新しい主を見つけることができた。

一葉は初めて聞いたのだが、機動パワードというものを口にし

た瞬間から契約は交わされているらしく今は一葉が正式な主のことだ。

そして、ユニゾンデバイスというのは魔導士と一体化することで術者の戦闘能力を爆発的に高める者のことを言うらしい。

本来、ユニゾンデバイスは人が他を取っているのが基本なのだが、護国守護聖獣という今一葉の目の前にちよこんと座っている鳥を含めた獣型が四機だけ開発されたという。

「んで、魔導士っていうのはリンカーコアって言う疑似器官が身体にある奴のことをさすのか…、」

「はい。マスターには魔導士たる資質があります。それも平均に比べてかなり魔力の容量が大きい」

「地球では全く役に立たない才能があると言われても全く嬉しくないんだが」

そう言いながら一葉は紅茶を一口すする。少しさめてしまったが程良い苦みが口の中に広がる。

「マスターは驚かれないのですね？」

不意に鳥はそんなことを言ってきた。驚かないというのは何を指して言っているのかわからないが、一葉はカップから口を外して軽くため息をつく。

「まあ、オレ自体が万国びつくり人間ショーの一員みたいなもんだからな…、」

「…、そうなのですか？」

鳥は首をフクロウのようにかしげる。こうして見ると実は機械と
いうことのほうが嘘ではないかと思えるほどだ。

「あり得ないことはあり得ない。それを知っているだけだよ」

「はあ……、」

自分が前世の記憶を持っていて、かつて世界を殺した人間だと知
ったらどう言う反応をするのだろうと思いつながら一葉はカップを置
き改めて鳥をまじまじと見る。

大きさはハトほどになっているが、その外見は本来地球には存在
しない鳥だろう。強いて挙げるならばアトリが一番近いだろう。そ
れでも羽毛の色は黒く、よくよく見ると、色々な色が混じり合っ
ており角度によって変わる。

そして翼も尾も、流れるように艶やかで長いものを持っており、
非常に美しいのだが明らかに航空力学に反してるにもかかわらず、
この鳥は飛ぶのだ。

確かに地球にもクマバチという航空力学的には飛べない生物が飛
んでいるが、これは全くの別物だろう。羽の形が空を飛ぶ形をして
いない。

そして何より特筆すべき点は炎を操るということだ。

それも、普通の赤い炎ではなく黒い炎。炎色反応でも造ることが
できない存在するはずのない炎だ。

確かに、このような鳥をテレビ局に持っていったならば大騒ぎと
なっただろう。そして契約者である自分もあまり好ましくない立場
になっていたのは間違いない。

ここで一葉はふと思いついたように言った。

「そついや、お前名前は？」

今まで気がつかなかったが、名前をまだ聞いてはいなかった。先ほどまでの話を聞く限り、デバイスというものには総べからず固有名詞がついているそうなので目の前にいる鳥も例外ではないはずだ。

「まだありません。マスターと再契約をしたときに初期化されてしまったので」

「さつき言ってた月の舞手ってのは違うのか？」

一葉は先ほど鳥が名乗ったときに言ったことを思い出し尋ねたが、首を横にして否定される。

「あれはいわば二つ名です。名前ではありません。そついう訳でマスター。私に新た名前をつけて下さい」

「オレがか？」

「はい。これから私はあなたの相棒になるのです。かつこいい名前をお願ひします」

「難しい注文だな」

一葉はそう言いながら手を組んで考え始めたが意外と早く思いついた。

漆黒の炎を操る黒い怪鳥。もはや今日の前にいる存在のために用意されたと思えない名前だ。

「ベヌウ」

「ベヌウ…、ですか？」

「ああ、神話に出てくる火を吐く黒い怪鳥だ。まさにお前のこと
だろ？」

「なるほど。悪くありませんね」

どこか納得するかのようには頷く。しかし、鳥が頷く光景というの
はいささかシニールに思える。

「了解しました。月の舞手ベヌウ、登録完了しました」

「とりあえずよろしくでいいのかな。ベヌウ」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。マイマスター」

こうして二人は契約を交わした。

そしてこれが後に『鬼人緋山』と呼ばれる魔導士が誕生した瞬間
だった。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

『僕の声が聞こえますか！？』

「おわあ！ビックリしたあ！！」

突然頭に響いた声に一葉は片付けようと持っていたマグカップが

ら紅茶を零しそうになってしまった。

数時間前から一葉はベルカについてベヌウから教えてもらっていた。歴史や文化、様々な英雄や伝説は聞いていて非常に楽しいものだったためにつつい時間忘れて話し込んでしまったのだ。

気がついたらいつもの就寝時間を大幅に過ぎていたので、風呂には明日の朝はいることにしてそろそろ床に就くために着替えようとしていたところだった。

「なんだ今の？」

「念話ですね。この近くに他に魔導士がいるようです」

ベヌウはとりあえず一葉がティッシュ箱でつくった急ごしらえの寝床にはいりこみながら言った。緩衝材の上にタオルを敷いたので結構心地がいいはずだ。

「イヤ、この声ってさっき話したフェレットを見つけた時に聞こえた声なんだけど」

『僕の声が聞こえる人 お願いです！ 僕に力を…、僕に少しでいいですから力を貸して下さい！！』

再び頭に声が響く。余ほど切羽詰まっているのか声に余裕が全く見られない。

「ならばそのフェレットとやらが魔導士かその使い魔だったのでしょうか。マスター、どうしますか？」

ベヌウの言うかどうかというのは助けるか無視するかどちらにするのかということだろう。声の状況からすると、今危険な状況だ

ということが容易に想像できる。

わざわざ、進んで危険な場所に行く必要はなく無視しても別段構わないのだが一葉には一つ懸念があった。

「この声を聞いた奴が友達でオレのほかにもう一人いたんだが…、絶望的な運動音痴の癖にバカみたいなお人よしなんだよ」

「急ぎましょう」

そう言うや否やベヌウは翼を広げて窓際にとまった。ここから飛び出るから窓を開けるといふことらしい。

ベルカの騎士道精神というものなのだろうか、魔導士同士の争いには関心を持たないが一般人が巻き込まれる可能性があると言わせたところベヌウは助けに行くと即決した。

その言葉と目に迷いは一切感じられない。

「結界が張られているようなので場所は大体わかります。私がマスターを背に乗せて飛んでいくので捕まってください」

翼を広げ、早く動けと一葉に催促するベヌウ。しかし、一葉は不安だったため最低限のものは持っていきかけた。

「ちょっと待て。持っていきたいモノがある」

「早くしてください。こうしている間にも御友人が巻き込まれているかもしれないですよ」

わかってるよ。と言いつつ一葉は机の引き出しを開けて紫色の紐で縛られた浅黄色の布包みを手にした。

大きさはちょうど筆箱と同じぐらいだろうか、ずっしりとした重

量感が一葉の手に馴染んだ。

できれば使わないことを願うんだがな…、

そう思いつつ、窓を開けベヌウ捕まる。するとベヌウは初めて一葉に会ったときのサイズに戻り風のごとく闇に色塗られた夜天へと飛びだっていった。

六話目 ベヌウ（後書き）

なのはたちが本当に空気なつえに展開に無理があると自分でも思う
…。

次話ではようやく主人公の能力が出てくる…のかな？

出せればいいなあ…

七話目 力

なんなの！

なんなのなんなのなんのなんなの！！

フェレットを抱き抱えたまま疾走するなのはは恐怖と焦燥に焦がされていた。

夜、眠ろうと電気の明かりを落としてベッドに潜り込んだところで頭に直接響いてきた大きな声。

放課後に聞いたときよりもはつきりと聞こえるそれは必死になって助けを求めていた。

あまりに追いつめられた声を聞き、なのはは家を飛び出し声のする方角へと走っていった。

声に誘われるまま夜の町を駆けていくうちに、なのははその道を今日歩いたということに気が付く。

そう、それはフェレットをつれていった動物病院に至るのと同じ道程だった。

まさか・・・、とその考えに至ろうとしたとき岩が砕けるような大気を震わせる鈍い音が夜道に響いた。

体を一瞬強ばらせながらも、歩を進める速度を緩めずなのはが最後の角を曲がった時に見たモノはおおよそ、この世のモノとは思えない光景だった。

そこは爆弾が直撃したと言われても信じてしまいそうなほどに荒れた、なのはが通いなれた道だった。

舗装されたアスファルトは剥かれ、ブロック塀は砕かれていた。海鳴特有の青く塗られた街灯は二つにおれ、電気が弾せる音を神経

質に鳴らしている。

そして容易にその元凶であると判るそれは今なお暴れ回っていた。

黒い靄を集めて固めたような、出来の悪い綿飴のようだ。それは空を衝くような大きな、言葉にならない低い奇声をあげながら、ちよろちよろと器用に逃げ惑う小動物を追いかけ回していた。

その光景に、なのはの生き物としての本能が頭の中で警鐘を鳴らした。

人は自分の理解を超えた存在に遭遇すると恐怖に体を支配される。なのはは無意識のうちに、一步後ずさった。

その時になのはの踵が、堅いなにかにぶつかる感触がした。カランカランと乾いた音を出しながら転がるそれは、砕かれたコンクリートの破片だった。

先ほどまで轟音が大气を震わせていたにも関わらず、なぜかその音は不思議なほどに夜道に響いた。

その時、なのはは黒い靄と目があった。

否、目などない。しかしそうとしか表現できない空気が両者の間に流れていた。

なのはは体が竦み、今にも泣き出してしまいそうだった。

これが夢ならばいいのにと本気で思った。

しかし肌を切る風が、鼻につく匂いが間違いなくこれは現実なのだと教えてくる。

その時、隙をみて逃げたフェレットが唐突になのは胸に飛び込んだ。

反射的に抱えるように抱いたフェレットの温もりでなのはは我に返ることができた。

『走つて!』

不意に聞こえたその声になのはは従い、きびすを返し全力で走り出す。

このまま見逃してくれないだろうかという甘い希望はすぐに打ち砕かれた。

広くはない路地を破壊しながら靄はなのはを追いかけ始めたのだ。なのはが聞いたこともない音をまき散らしながら靄はなのはを指して走り出す。

「ありがとうございます。来てくれたんですね」

「ニヤツニヤア！フェレットさんがしゃべった!？」

腕の中に抱いているフェレットが緑の双眸を向けてなのはに話をかけた。そのことに驚きを隠せないまでもとにかく今の状況の方をどうにかしなければならぬ。

「何がなん中わからないの！一体何なの!？何が起きてるの!？」

絹を裂くような悲鳴を上げるなのは。既に頭の中はいっぱいいっぱいでもな思考ができなかった。

「ごめんなさい…。でも力を貸してほしいんです」

「力!？」

追い詰められているせいか自然と声が大きくなってしまふのはと対照的に落ち着いた声でフェレットは言葉を続けた。

「はい。魔法の力です。あなたには資質がある」

「魔法!？」

何が何だか分からなかった。突然黒い化け物に襲われて、フェレットがしゃべりだし、そして自分には魔法の力があると言われる。なのはの中で言葉にならない感情を渦を巻いて回りだし、今にも頭が爆発してしまいそうだった。

フェレットとの会話に気を取られながら走っていたせいだろう。元々運動音痴のなのはの息が上がり足がもつれて転んでしまう。

とっさに腕に抱いたフェレットを庇うような形に倒れこみ、膝と顔をすり向いてしまう。

ヒリヒリとした熱さと、わずかに滲み出る血が今自分の身に起こっていることがたちの悪い夢などではないということを教えてくれた。

「あつあ…あああ…、」

なのはが立ち上がろうとすると既にすぐ目の前まで、黒い化け物が来ていた。

追い詰めた獲物に留めをさす獅子のようにゆっくりと慎重に、しかし確実になのはに近づいてくる。

「立って!」

フェレットが叫ぶが、なのはの腰は恐怖のあまりに抜けてしまった。

恐怖で足は竦み、歯が鳴る。

自分はここで死ぬのだと思った。

化物物はなのはの眼前まで来ると、黒い腕を大きく振り上げる。その動作によって生まれた風がなのはの頬を撫でた。

ああ、これで終わりなのだ。何とも呆気ない。

なのはは目を瞑る。

瞼の裏に浮かびあがってきたのは、大好きな家族、大切な友達、そして、かつて自分の心を救ってくれた少年の姿だった。

その少年は、いつも一人でいたなのはにアリサとすずかという親友をつくるきっかけを与えてくれた人。そしてたった一言だけなのはの持つ強迫概念から解放してくれた人。

なのはが覚えたどんな言葉よりも、少年の何げない一言の方がとても上手に喋った。

その時の記憶は、二年たった今でも色あせることのない写真のように輝いている。

「助けて…、」

死にたくない。少年の顔が脳裏に浮かんだ瞬間なのはは思わず叫んでいた。

「助けてー葉くんー!!」

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

叫んだなのはを襲ったのは、身を砕くような衝撃ではなく焼けつくような熱風だった。

「やりすぎだアホ！」

「気温と湿度、風の向きまでも調節して放ちました。多分怪我することはないでしょう」

「多分ってなんだ！」

目を開くと炎だろうか、見たこともない色をした炎の壁がまるで意思を持っているかのように化け物となのはたちの間に壁を造っていた。不意に空から聞こえたのは美しいメゾソプラノの凜とした声と、毎日のように聞いている少年の声。

それは恐怖のあまりに聞こえてきた幻聴ではないのだろうか。しかし、風を起こし空から舞い降りたのは、身の丈以上の黒い羽毛をした怪鳥と、その背に掴まるのはが助けを求めた少年だった。

「何とか間に合いましたね」

「だいぶぎりぎりだったかな」

なのはの胸に熱いなにかが沁みわたる。なのはは今にも崩れ落ち、涙をため今にも泣きだしてしまいそうな儂げな一葉を見た。

唇が小さく震えている。

「おいなのは。大丈夫だったか」

今にも一葉にしがみついてしまいそうななのはは咽喉をこくりと鳴らし、口の端を吊り上げてにつこりと笑みをつくった。

「えへっ、えへへ…、ホントに来てくれた…、」

それは一生懸命に笑っているけれど、空気にしか見ることができず、証拠に最後の方は声が涙ぐんでいた。

「あの…、あなたは…？」

おどおどという表現が正しいような申し訳ない声を出してフェレットは突然現れた一葉に尋ねた。

「こいつの友達。この鳥の説明は後ですから君の説明も後にして。とりあえずあれの止め方だけ教えてくれ」

一葉がベヌウの背から降りるとなのはたちから視線を離さないまま、親指で後ろを刺す。化け物はベヌウの放った炎の壁をどうにか乗り越えようと必死になってもがいていた。

「マスター、あれには実体があるとはいえ痛覚が存在するのは甚だ疑問です。私が作った壁は直ぐに破られると思ってください」

「だ、そうだ。手短に頼む」

状況が飲み込めていないだろうフェレットに一葉は早く言えと促す。少々強引だろうが状況がまるでわからにのは一葉としても同じなのだ。

早いところケリをつけなければならない。

「はっはい！」

フェレットはなのはの腕の中でぴょんととび上がり慌てて説明を始める。

「あれはジュエルシードと呼ばれるロストロギアが造った思念体です。僕はあれを封印しに来たんです」

早口で話すフェレットはそのまままくしたてるように続けた。

「だけど僕はあれを封印することができませんでした…、だから魔法の資質がある人たちを探したんです」

「それでオレとなのはがヒットしたわけか」

「はい…、」

こう説明している間にも、化け物は黒い炎の壁に迫っている。心なしか先ほどよりも距離が縮まってきている気がする。

ベヌウはすかさず黒い炎をつくりだすと、翼に乗せて強い風を起こしながら化け物にたたきつけた。

「しかし、オレにもなのはにもあれが封印することができるとは思えないんだが」

少し話したただけだが、おそらくベヌウにはそのような芸当はできないだろう。

ベヌウが造り出された経緯は王を守るためのモノ。つまりそれ以外の機能はないものと考えた方がいい。

「できます。あなたたちが持つ魔法の力とこのレイジングハートがあれば」

そう言ってフェレットは自分の首に下げられた宝石を器用に前足

で外し、なのはと一葉が見せるように掲げた。

「綺麗…、」

なのはがぼつりと零した。

たしかに濁みのない深い真紅色をしたその宝石は見ていると心が持つていかれそうな感覚になる。

「マスター、マスター」

突然、ベヌウが場の空気を遮り一葉に話しかけた。

「なんぞ？」

「そろそろ壁を突破されます。ユニゾンしませんか？」

「断る」

一葉は間髪いれずにベヌウの提案を拒否する。

「なぜです!?!」

あまりに予想外だったのだろう。緑色の目を丸くしながら頓狂な声を上げ、長い尾羽を振りながらベヌウは抗議するが一葉は一刀の下に切り捨てる。

「さつきお前の説明の中にユニゾン事故とやらがあっただろ。今ここで起こったらシャレにならないし、オレはぶつつけで使ったこともない武器を使えるほど胆も座ってないんだ」

「しかし、それではどうするのですか？」

ベヌウの質問は当然のものだったが、一葉には一葉なりの考えがあった。

「おいフェレット。そのレイジングハートとやらはなのはにも使えるんだよな？」

「え…？は、はい」

「じゃあ、なのはにそれを使わせてくれ。オレはあれを足止めする」

そう言うで一葉はジーンズのサイフポケットから机の引き出しから持ってきた布包みを取り出した。

「にや！？ダメなのそんなの！危なすぎるの！」

「マスター！？」

なのはとベヌウがやめると騒ぐが、一葉は気にせず前へと歩を進ませながら布包みを縛った紫色の紐を解く。

中に入っているのは、鍼治療で使う鍼だった。

「ベヌウ、よく見ておけ。これから相棒になる人間がどんな力を持っているのかをさ」

その声色は先ほどまでのとは確実に違っていた。一葉が身に纏う空気も、いつのまにか張り詰めたような緊張感を纏っている。

なのはとベヌウはそれを感じ取ったのか、それ以上何かを言うことはなかった。

「フェレット、早めに準備を終わらせてくれよ」

そう言つと一葉は黒い炎の向こう側にいる化け物へと踊りかかる。

こうして、世界を壊した獣が再び戦場に放たれた。

七話目 力（後書き）

結局主人公の能力は次話に持ち越し。

万能という訳ではありませんがなのはの世界ではチートに近い能力になると思います。

八話目 レイジングハート

失くしたモノを取り戻す。

血と、肉と、骨と、狂気、それとあと一つ…、

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

「想像してください！あなたが魔法を制御する杖と身を守る強い服を！！」

「とつとりあえずこれで！」

起動パスワードの詠唱を終え、目を覆うほどの桃色の光が天を衝いた。

突然言われたフェレットの言葉になのはが思い浮かべたのはレイジングハートを中心に金色の輪を杖頭に付けた白と桃色の柄をした杖と、聖祥の制服をモチーフにした白を基調とした青いラインの防護服だった。

なのはの頭の中でデザインが決まると、途端に今まで身につけていた衣服は消え、なのはが思い描いた服が現実のものとなり、杖から織り込まれていく防護服は左腕から右腕、そして胸から足へとかけてなのはの身を包む。

「成功だ…、」

ほとばしる桃色の光の中から、服が変わったなのはが現れるのを

見てフェレットを目を輝かせてつぶやいた。

「へえ！？ええ！？ ウソ！？」

しかし、当の本人は困惑の渦にいた。

「なつ、なんなのこれ？」

そう言いつつ自分の体を見る。

今まで来ていた衣服が、本当に自分の想像した通りのものになっていたことに驚きを隠すことができなかった。

しかし、こうしている間にも黒い炎の壁の向こうでは一葉が身を張って、時間を稼いだいたことを瞬時に思い出す。

一葉がベヌウと呼んでいた、大きな黒い鳥も加勢に向かってはいるが危険なことには変わらない。

早く行かなければ、そう思った瞬間に炎の壁を突き抜けて風を切る音を立てながら人ほどの大きさもあるコンクリートの塊がなののは向かって飛んできた。

「きゃあー！」

なのはとつさにレイジングハートで顔と頭を守る体制を取る。

Protectio

レイジングハートの赤い宝石の部分から機械音が響き、透明な桃色の障壁がなのはの前に現れ、なのはを襲ったコンクリートの塊は障壁に当たった瞬間に四散した。

砕けた塊はアスファルトやブロック塀に突き刺さり、電信柱は電

線を引きちぎりながらその衝撃で倒れる。

どれほどのスピードでなのはに襲いかかってきたのか、もし身体に直撃していたならば、自分が電信柱のようになっていたのだと理解した瞬間になのはの足は竦んでしまう。

しかし、そんなコンクリートの塊が飛んでくるような中心地に自分のために時間稼ぎをしている少年が居る。

なのはの中の早く助けにいかなければ、という気持ち恐怖に打ち勝つ。

「僕らの魔法は発動体と呼ばれるプログラムに組み込まれた方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです」

フェレットは言つやいなや、なのはの肩に飛び乗り魔法と解説を始めた。

「そしてアレは忌まわしい力の下に生みだされてしまった思念体アレを呈出するにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです」

「よくわからないけど、どうすれば一葉くんを助けられるの？」

ゆらゆらと踊りながら燃え盛る黒い炎の壁を見据えながらなのははレイジングハートを強く握りしめる。

壁の向こうでは、フェレットが思念体と言った黒い化け物の咆哮が堅いものが碎ける音と共に聞こえてくる。

まだ一葉が無事な証拠だ。

「さつきみたいに攻撃や防御といった基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なん

です」

「呪文？」

「心を澄ませて、心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ。」

そうしてなのはは瞼を下ろす。

早く行かなければという思いが気持ちを急かすが、ここで魔法の使い方を知らなければただの足手まといになってしまう。説明書を読まずにゲームを開始してもろくなことにならないとなのはは知っていた。

心を敏感にして、気持ちを落ち着かせる。

不思議と水を打ったかのような、静かな精神の境地にすんなりと入ることができた。

その時、炎の壁の向こうの咆哮が不意に鳴きやんだ。

なのはの背筋に粘つくような激しい不安が這い上がってくる。

まさか…、と。

その不安が瞬時になのはを現実へと引き戻す。

指の先が痺れ、唇が小刻みに震える。

この嫌な予感がどうか当たりませんようにと。

なのはは願うような想いで碧い双眸を未だなのはと、化け物と一葉を隔てる炎の壁へと向けると、炎が揺らめき壁の中心から割れるように黒い炎は飛沫のように消えていった。

「え…？」

「なっ…!?!」

なのはの頓狂な声と、フェレットの驚愕するような声が同時に発せられる。

なのはの嫌な予感当たらなかった。しかし、今まで見えなかった壁の向こうの光景はなのはが一葉が無事でいてほしいと願う想いの遙か上をいていた。

そこには無傷で立つ少年と、少年にかしずくように従う黒い怪鳥。そして、無数の剣で串刺しにされ動かなくなった黒い化け物だった。

「遅いぞなのは」

「へっ?ご、ごめんなさい…、」

未だに、半ば呆然としているなのはに一葉はいつものような口調で話しかけた。しかし、その視線は既に動かなくなっている化け物から外すことはなく、いつでも動けるように警戒を解いていなかった。

「早く封印とやらをしてくれ。」

こいつ切っても切っても再生するんだ。さすがに疲れた」

「うっ、うん!」

一葉の言葉になのはは我に返り、再び瞼をおろして心と耳を澄ませた。

その剣はなに？

それは一葉くんがやったの？

どうやったの？

切っても切ってもと言ったことから、それは一葉がやったことに間違いはないのだろう。

溢れるように出てきては渦巻く疑念を払いながらも、なのはは再び集中する。

すると不意に心の中に一節の言葉が浮かび上がってきた。

これがフェレットが言っていた封印の呪文なのだろう。なのははそれを迷いなく口にした。

「リリカルマジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシード！」

なのはが封印の呪文を得たことを確認したフェレットは、なのはの肩の上で封印を行う器の名前を叫んだ。

「ジュエルシード、封印！」

Sealing mode . Set up .

レイジングハートから機械音声が響き、翼のような桃色の光が既に動かなくなった化け物へと奔る。

縄のようになったそれは串刺しのままの化け物を縛りあげた瞬間に、化け物の額にX X I という焼印のような数字が浮かび上がった。きた。

Stand by Lead y .

「リリカルマジカル、ジュエルシールドシリアルXXI！封印！」

Sealing.

なのはが叫んだ瞬間に、無数の桃色の光が化け物を縛りあげたままその身体を貫いた。

化け物の低い最期の断末魔が夜天にと響き、そして粒子状となり消えていった。

化け物の姿はなくなり、突き刺さっていた剣も化け物が消えると同時にいつの間にか姿を消していた。そしてまるで戦場のような悲惨な光景だけが後に残った。

「おろ？」

一葉が砕けたアスファルトの隙間に何かを見つけ拾い上げようと腰をかがめた瞬間、なのはの耳元でフェレットが叫んだ。

「触らないで！」

一葉はその言葉に瞬時に手をひっこめ、突然耳元で叫ばれとことで、なのはの心臓が飛び出るかと思うほどに驚き、耳をふさいだ。

「急に叫んでしまってスイマセン。だけどそれは触ると危険なんです」

そう言いながらフェレットは今までいた肩からなのはの体をつたって器用に降り、なのはを先導するように一葉に近づいた。

なのははそれにフェレットの後をついていくように、砕かれて不

安定となったアスファルトの上を危なっかしく歩いている。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

そこには淡く発光する小粒の真珠程度の大きさの宝玉が落ちていた。なのはは言われたとおりにレイジングハートで触れようと杖を前に出すと、ジュエルシードのほうから浮遊し近づいてきた。

ジュエルシードがレイジングハートの核の部分に触れると、溶けるように中に入っていた。

— R e c e i p t n u m b e r X X I .

すると、なのはを包むように桃色の光が溢れだすと身につけていた服は元に戻り杖も小さな宝石に戻った。

「あ、あれ？終わったの？」

「はい、お二人のおかげで…。ありがとう。」

フェレットはなのはと一葉に礼を言うと、そのまま力尽きたように倒れこんでしまった。

「ちよっ、ちよつと！大丈夫!？」

なのはは心配したような声を上げてフェレットに寄り抱き上げる。息はしており、なのははホッと一息をつくくと一葉のそばにいたベヌウが静かに声を出した。

「お二人とも…、」

急におとなしいような声になったベヌウ。今さら近所迷惑を気にするような声色になったベヌウに一葉は訝しむような視線で答える。

「そのフェレットが気を失ったせいだと思うのですが結果がとられました。早急にこの場を離れることを推奨します」

そう言うとベヌウは小さいサイズに戻り、一葉の肩にとまった。その時、遠くの方からけたたましいパトカーと救急車の音が聞こえてくる。夜の静寂を打ち砕くようなけたたましいサイレンは間違いないくこちらに向かってきていた。

なのはと一葉は一度顔を見合わせ、再び今この場の惨状を確認した。

隕石が落ちたかのように砕け、所々クレータになっているアスファルト。辺り一帯のブロックベで原型をとどめているものはなく、電柱は倒れ千切れた電線からは神経質な電気がほとばしっている。

「もしかして、私たちここにいと大変アレなのでは…、」

頬をひきつらせて、不格好な笑みをつくるなのは。頬には冷たい汗が流れていた。

「アレがなにかわからんが、その意見には激しく同意する」

それ以前に深夜に徘徊している小学生がいたら間違いない補導対象だ。

もし捕まったら家にも学校にも連絡がいくだろう。

なのはと一葉は再び顔を見合わせ頷き合う。二人の視線は雄弁に

語っていた。

逃げよう、と。

「とりあえず、ごめんなさうい！」

なのははそう言いながらフェレットを抱いて走り出した。

一葉もベヌウを肩にとまらせたままそれについていくが、どこかその表情は浮かない。

どうやってなのははに説明しようか、そのことが一葉の頭の中で渦巻いていた。

八話目 レイジングハート（後書き）

原作見てないと限界を感じ始めた今日この頃。

みよっかなあ…、

次話はベヌウ視点で始まります

九話目 相棒

彼は獣だ。

影を振り切り、血肉を嚼り、骨を軋らせ、獲物の咽喉元へと喰らいつく。

例えウサギが相手でも、決して手を抜くことのない獅子が彼に重ねて見えた。

いや、あれはもはや狩りですらない。

あまりにも圧倒的で理不尽すぎる暴力が、名もなき獲物に襲い掛かる。

そうして始まるのは、自衛を語った一方的な命の搾取。

それでも、彼の背中はずいぶん哀しく見えた。

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

「ベヌウ。手は出すなよ」

ベヌウは困惑していた。

自分の新たなマスターが、一人でロストロギアが造り上げた思念体と戦うと言い出したからだ。

それはあまりに無茶で無謀。いくら自分を起動させるほどの魔力
資質と才能を持っていたとしても一葉はまだ子供なのだ。

先ほどまで一緒にいた一葉の友人のほうはまだ子供らしい。イヤ、
あれが普通の反応なのだ。

思えば一葉は異常だった。

この世界に魔法文化はない。

あの少女も予期できないイレギュラーに見舞われ、困惑しきって
いた。いきなり知らない技術、次元世界と言っ異世界、そしてベヌ
ウという存在をいとも簡単に受けれた。

子供は順応性が高いと言ってしまうえばそれまでだが、一葉はそれ
は明らかに違っていた。

今この場にいるのは、一葉とベヌウ、そして黒い思念体だけだっ
た。

一葉が、ベヌウに命じたことはただ二つ。

なのはと自分たちを隔たる壁をつくること。
そして決して手を出さないこと。

ベヌウは二つ目の命令を速やかに実行した。しかし、二つ目の命
令は迷っていた。

繰り返すが一葉はまだ子供なのだ。魔法にも出会ったばかりで戦
い方も知らない、武器も何も持っていない子供だ。

否、武器はあった。

一葉が家を出る前にシーンズのポケットに押し込んだ、浅黄色の

布袋。それから取り出した人の髪の毛ほどの太さしかない鍼だ。しかし、それはあまりに貧弱で矮小。

少し力を入れただけで折れてしまっただろう。

今、ベヌウが理解出来ないことが二つある。

それは一葉がなぜここまで自信を持っているかということ。

そして、もう一つは一葉が纏う空気だった。

闘気とでも言うべきものが、初めて一葉と出会った時から今の今まで感じ取ることができなかったそれが、まるで明確な敵を見つけた途端スイッチが入ったかのように一葉の空気が変わった。

それは今までベヌウを使用してきたマスター、聖王を守るために存在した王族特務と比べても遜色がない程のものだ。

それは到底一葉のような子供が身につけることなどできないモノ。才能だけではなく長い訓練と、果てのない命のやり取りを経てようやく身につくものだった。

ベヌウの中で一葉が子供であるという先入観を優先するか、それとも自分の根拠のない直感を優先するか決めかねていたのだ。

しかし、始まりは突然だった。

一葉が掌に乗せた鍼を滑らせると人の髪の毛ほどの太さしかない鍼は風に乗り宙に舞う。淡い月の光にキラキラと反射する鍼は何の前触れもなくその形状を剣へと変えた。

そう。それは言葉通り、何の前触れもなかったのだ。

まるで最初からそこにあっただかのように、最初から鍼が剣であっ

たかのようにだった。

あり得ることがないことがごく自然で、ごく当たり前の行われた。

魔力の循環などは切行われていない。

それは当然だ。一葉は魔法の使い方などまだ一切教わっていないのだ。

仏神像が手にする利剣を思わせるデザインの剣は同じ形状のものは一つとしてなく、大きさも大人の身の丈以上のものから、子供の身の丈程度のものまで様々だった。

一葉はなにも持っていない手を思念体に向けると同時に宙に浮いていたすべての剣の切先が思念体へと突きつけられる。

そうして狩りは始まった。

一葉が真つ先にしたことは思念体の眼を潰すことだった。

一葉が右手を大きく手を振ると、赤くぎよろりとした双眸に比較的小さい剣が両目に突き刺さる。

耳をふさぎたくなるような雄叫びにひるむことなく、次は動きを止めるために手足を切断した後には無数の剣を雨のように降らせ、体を地面に縫い付けた。

しかし、思念体は声にならない声を上げながら、手足を再生させ抵抗を試み、突如をして鞭のように伸ばし一葉へと叩きつけた。

アスファルトの碎ける轟音と共に、煙と破片が飛び散る。

そこでベヌウはあり得ないモノを見た。

煙りの中で一葉は腕だけでなく、不規則に飛び散る破片すらも全てかわしていたのだ。

それもごく自然に、体に既に刷り込まれているような動き。かつて歴代の使用者と共に幾千もの戦場を渡り歩いたベヌウですら見惚れてしまうような鮮麗された動きだった。

ここでベヌウは初めて気がつく。
自分の直感が正しかったことを。

一葉は宙に舞うアスファルトの破片を足場にしながら思念体の上を取ると、いつの間にか右手に持っていた無数の鍼を思念体の上に投げる。

鍼は瞬時に剣となり、数えるのが馬鹿らしくなるほどの剣の雨が思念体の背中に降り注いだ。

それは最初から最後まで一方的なものだった。

一葉は思念体が再生させる手足を片っ端から切り落としていった。警戒はしているものの、一葉は最後のほうは一步も動くことなく、無表情のまま作業のように手足を切断していく。

気がつけば夜道に響く轟音は、一葉が放つ剣が思念体の手足を切断しアスファルトを衝き砕く音だけだった。

それはベヌウの目にはひどく哀しく映った。

あまりにも無慈悲で冷酷。命を狙われた相手に情けをかけるとは決して言える立場ではないが、一葉のような子供が一つの躊躇もなくこのような残虐なことができることが哀しかった。

思念体は最期の力を振り絞ったのか、大地を揺るがすような低い声を上げながら今までよりも矮小な腕を再生すると一葉に切断されるより早く近くにあったコンクリートの塊を投げつける。

しかし、一葉は当たり前のように半身だけ動かしそれをかわすと思念体が必死になって再生した腕を指だけ動かし切り落とす。

「ごめんな…、」

呟くような一葉の言葉が終焉の合図のだったかのように思念体はそのまま動かなくなった。

「なあ、ベヌウ。オレっておかしいのかな…？」

不意に一葉は後ろで動かずに待機していたベヌウに話しかけた。それはベヌウに対する問いかけでもあるが、自分に対するモノでもあるように思える。

「一般的に見たら…異常でしょうね」

ベヌウは正直に答えた。この世界で目覚めてからほんの数時間しか経過していないが、一葉がこの世界の平均でも遙かに異常な体術と能力を有している程度直ぐにわかる。

魔法ではない、何か他の別の力。

そして鮮麗された、敵を狩る技術とそれを実行できる精神力。それは到底、たかだか九歳の子供が持ち得るなどあり得ないことだった。

「そっか…、そうだよなあ」

眩きながら一葉は顔を夜天に向けた。
境界が張られたこの空間では薄汚れた夜空しか見えない。

「オレさ…、楽しかったんだよ…」

ぼそりとひとり言のように一葉は一葉はつぶやいた。

「あの黒い奴の目を見た瞬間、体中の熱が沸騰したかと思った。
明確な殺意と敵意を向けられた瞬間に歓喜した。

また戦える、また殺せる。つてさ」

涙をこらえるように震えた声で一葉は続けた。今の、自分という特殊な存在を一人で抱え込むのは既に限界だったのかもしれない。そして、変わったかと思っていた自分が結局何一つ変わっていなかったことを思い知った。

「最低だよな。これだけ傷つけて、動かなくなっていくのを見て罪悪感よりも先に、もうお終いか、つまらないって思ったんだよ」

「それでも、きっとマスターは優しい人だ」

ベヌウは地面についた尾羽と風切羽を引きずりながら不安定になった足場を器用に歩き一葉に近づいた。

「オレは優しくなんてないよ…、」

「ならば、なぜ泣いているのです」

一葉は泣いていた。頬にこそ雫は流れていなかったが、上を向いたその瞳には今にも零れんばかりの涙がたまっていた。

「…、自分が情けなくてだよ」

ベヌウは一葉のすぐ傍らにまで来ると、大きく首を横に振って否定する。

「それは違う。マスターは最後に謝っていた。

思念体にか、それとも違う誰かにか私にはわかりません。それでも本当に最低な人間とは自分のことしか考えない者のことを言うのです。

あなたはまだ、誰かを想う心がある。何かを傷つけて後悔できる心がある。

マスターの最後の言葉とその涙が証拠です」

緑色の双眸でベヌウは一葉の横顔を見つめた。それはあまりの脆く、あまりに儂く、触れれば壊れてしまいそうなガラス細工を思わせるようなそんな表情だった。

「どうか自分を欺かないでください。どうか私を欺かないでください。」

私はマスターの相棒なのです。

マスターに悲しみがあるときは私も共に背負います。マスターに立つ瀬がなくなったときには私が拠り所となります。マスターが傷つく時があれば私は全てを弾く盾となります。

だからお願いです。どうか私にもマスターの業を共に背負わせて下さい。

私がマスターの相棒であると誇りを持って、声高らかに言えるようにしてください」

懇願するような声でベヌウは一葉に言った。

一葉という存在をベヌウはまだよく知らない。それでも自分のマスターが、この小さな少年が持つものはこの小さな背には大きすぎるものだということぐらいは判った。

それほどまでにベヌウの目には一葉の戦闘が哀しく、哀れに映ったのだ。

「確かにマスターは情けないかもしれませんが。そして私も無力かもしれません。」

ならば強くなればいいのです。

共に強くなっていけばいいのです。マスターが情けないと思っ
て涙を流している今を、あの時は情けなかったと笑い飛ばせるように
なるまで」

今にも泣いてしまいそうな声でベヌウは一葉に訴えかけた。

どうか自分を信じて欲しい。自分を受け入れてほしい。自分はあ
なたの味方なのだからと、言葉にはできない感情を必死に言葉にし
ようとベヌウは必死になって一葉に語った。

一葉は泣きそうだった。

泣いてしまいそうになるほどの嬉しかった。

闇の底で座り込んでいたかつての自分。ようやく手に入れた安寧
の中で、かつての自分におびえながら生きてきた自分。

その二つをベヌウは、相棒は受け入れてくれるというのだ。共に
強くなるうと言ってくれているのだ。

そのことが、涙が溢れ出るほどに嬉しかった。

「一葉だ…、」

「え？」

「相棒なんだろう……？マスター何て呼び名じゃなくて名前で呼んでくれ」

「はい……、一葉」

二人の間にそれ以上の言葉はいらなかった。

ベヌウは一葉を受け入れ、一葉はベヌウを受け入れた。それで充分だった。

明日になればすべてを話そう。自分がどうい存在か、どれほどまでに異質な能力も有してしまったのか、そしてかつての自分が犯してしまった罪を。

きっとこの相棒はすべて受け入れてくれるだろう。

そして、それでも共に歩むと言ってくれるだろう。

一葉はようやく、自らの翼を休める拠り所を見つけることが出来たのだ。

「ところで一葉。この惨状を御友人にどう説明なさるつもりですか？」

「あ……、」

ベヌウは炎の壁を消す直前の会話だった。

九話目 相棒（後書き）

原作見始めました。

まだ無印の二話目だけど普通に面白い。

十話目 日常

一葉となのはが逃げた先は海鳴公園だった。

なのはの運動音痴はいつものことなので途中はまでは一葉がなのはの手を引いて走っていたが、ベヌウに飛んで行けないかと聞いたところ「定員一名です」と返答が返ってきたので問答無用でなのはをベヌウの背に乗せた。

最初はイヤイヤ、悪いよ。申し訳ないよ。一葉くんが乗ってよと言っていたのだが、眼は期待でキラキラと輝いていて全く説得力がなかった。

多分一葉がベヌウの背に乗っていたのを見て自分も乗ってみたかったのだろう。

ともあれ、公園に着いた時に汗をかき、息を切らしていたのは一葉だけであった。

海を一望できる場所に位置した、背もたれのある黒いベンチに一葉が腰を置くとベヌウもすぐ近くに風で砂埃を上げながら地面に降り立った。

なのはがベヌウの背から降り礼を言うとベヌウは小さなサイズに戻り、一葉の左肩へと留る。既にここが自分の定位置と決めているようだった。

それにならってなのはも一葉の左側へと腰を落ち着かせた。

「すみません」

タイミングを見計らったかのように、一葉となのはが一息ついてからフェレットが気が付き謝罪の言葉を口にした。

その声はどこか弱々しく、本当に申し訳ないといった色で染まっている。

「あつ、起しちゃった？ゴメンネ、乱暴で」

「…、その乱暴というのは私のことでしょうか？」

ベヌウがジト目でなのはでなのはに視線を送る。確かにフェレットを抱いていたのはなのはだったのだが、実際に飛んで移動していたのはベヌウなのだ。

フェレットを膝に乗せたまま、大きく手を振ってわたわたと弁解する。

「にやつ！？そういう意味では…！」

「ケガは大丈夫なのか？」

自分の左肩にいる鳥となのはのやり取りを完全に無視して一葉はフェレットに傷の具合を聞く。怪我自体は大したことないと獣医師は言っていたが、先ほどまでの大立ち回りを考えると悪化していると考えた方がいい。

「ケガは平気です。もうほとんど治っているから」

フェレットはそう言うつと身を震わせて器用にも包帯を外した。すると地面に落ちていく包帯を一葉は何も言わずに回収する。

病院によつては包帯は消毒して使い回ししているのだ。

一葉たちが駆け込んだ病院ではベランダに包帯が干してあるのを見かけた。つまりこの包帯は借りものということになる。

ただでさえ無料で診察してもらっているのに、借りたものまで無

くすという恩知らずなことはできない。

「ホントだあ、傷の跡がほとんど消えてる。すごーい……」

辺りは暗く、光源は夜空で淡く光る半月と電球の消えかけた街灯だけだ。

一葉の位置からは暗くて傷跡を見ることができなかったが、なのは本当に感心したような声を聞く限り、本当にもう大丈夫なのだろう。

「助けてくれたおかげで残った魔力をほとんど治療に回しました」

「よくわかんないけどそうなんだ？　ねえ、自己紹介していい？」

「あ、うん」

唐突過ぎるなのは話題の切り替えにフェレットは半ば呆気にとられていたが、なのははそのことを気にする様子もなく、えへんと薄い胸をそらして偉そうに自己紹介を始めた。

「私、高町なのは。小学校三年生。」

家族とか仲良しの友達とかはなのはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノくんかあ、可愛い名前だね」

なのはは可愛らしく首をかしげながらフェレットにっこりとほほ笑むと、次に視線を一葉に送った。

「なんぞ？」

とりあえず一葉はなのは同様に首をかしげて見る。ふと視線を感じてその方向に映してみるとフェレットの緑色の双眸も一葉を見ていた。

「次は一葉くんの番だよ？」

「自己紹介オレもするの？」

「当たり前なの！聞きたいことがいっぱいあるの！
それと鳥さんも自己紹介！」

「あの…、僕からもお願いします」

ユーノの本当に申し訳なさそうな声と、なのはの強制するような声に押されて一葉は自己紹介を始めた。

「緋山一葉。なのはと同じく小学三年生。

詳しいことはもう夜が遅いので後日説明する」

「一葉のデバイス、ベヌウです。以下同文」

「デバイス！？使い魔じゃないんですか！？」

ユーノの驚嘆とした声が響いた。その様子から見るとやはりベヌウは自分で語っていたとおりかなり異質なのだろう。

なのはは、デバイスってなに？ とった感じで首をかしげている。

「それも含めてまた明日じゃダメか？明日も学校があるしさすがにそろそろ家に帰らないとまずいんだが…、」

「うう、そうだね。でも明日絶対話してもらおうからね！」

顔を紅潮させ、上目づかいで睨んでくるのは正直全然怖くなく、むしろ可愛く見えた。

「とりあえず、ユーノは家に…、」

「あつ、一葉くん。大丈夫！」

「なにが？」

なのははえへへと笑い、腰に手を当て胸を張って言った。

「実は、私の家でユーノくんを引き取ることができるようになりました！」

「おお、マジでか」

「うん！マジなの！」

家族に相談したところ、母親である桃子さんを筆頭に結構みんな乗り気ですんなりと話を通ったとのこと。

褒めて褒めて、と言いたそうに頭を出してくるのは。リクエストに応えて一葉はよしよしと頭を撫でてやると気持ちよさそうなのはは目を細める。

しかし、何故かベヌウにジト目で視線を送られ居心地が悪くなっただために中断。

そのまま解散することとなった。

一葉は、一応心配なので送って帰ろうかと言ったところベヌウが「私が飛んで送ります。そちらのほうが早い」と言ってくれたので任せることにした。

なのはを背に寄せ、漆黒に塗られた夜空へと飛び立っていくベヌウを見送ってから一葉も自分の家のある方向へと歩を進める。

「さて、明日からどうなることやら…」

誰もいない夜道で、一葉は独りでぼそりと呟いた。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

カーテンの隙間から差し込む光につられて、無地の黒いカーテンを開けて窓を持開ける。

その日は突き抜けるような雲ひとつない青空だった。すると庭に植えられているキンモクセイの新芽の香りが頬を撫でる。

普段ならば気持ちのいい朝だというのに、一葉の顔はまるで雨の日のように浮かないものだった。

一葉は自分の部屋の空気を入れ替えると、白を基調とした聖祥の制服に着替えながらティッシュ箱の中で未だスヤスヤと眠るベヌウを起こすことにする。

「オイ、朝だぞ」

近いうちにまともな寢床を用意してやらないと思いつつティッシュ箱を軽く揺らすとベヌウは直ぐに起きた。

「おはようございます、一葉」

まだ少しだけまとわりつく眠気を払うよに体を伸ばすとベヌウは黒いくちばしで大きく欠伸をしながら一葉と朝の挨拶を交わす。

「はい、おはよう」

一葉は鏡の前で寝癖を整えると鞆を持って下に降りようとしたが、ここで一つのこと気が付きベヌウの持ち上げた。

「どうしたのですか？」

「イヤ、父さんと母さんにお前を飼う許可をもらわないと……」

「ああ……」

一葉はまだ両親にベヌウの説明をしていない。

昨日、最初に帰ってきたときには両親とも仕事から帰ってきておらず、二度目の帰宅の時は気付かれないようにこっそり窓から入った後に疲労で直ぐに眠ってしまったからだ。

いくら小さなサイズになるとはいえ、生き物を家族で内緒で飼うことは限りなく不可能に近い。

一葉の両親は動物が好きだし、ダメと言われることはないとは思おうが一言言っておくのが筋だろう。

一葉は自分の肩にベヌウを置くとそのまま階段を下りて、朝食が

用意されているリビングへと歩を進めた。

結論だけ言おう。

呆れるほどに簡単に許可が出た。

一葉が肩にベヌウを止まらせたまま、リビングのドアを開けると両親の目は直ぐにベヌウのほうへと向いた。

最初は目を丸くしていた両親だったが直ぐに、何これ！可愛い！なんて鳥だ？ わからない？ 拾ったのか？何、飼いたい？ これは飼わなきゃ罪になる可愛さよ！ 当然だ！

といった風に面白いほどとんとん拍子で決まった。

当然魔法のことは伏せておき、ベヌウは何かの突然変異種だと思う、ということにしておいた。

ベヌウが大人しくしていたのも両親の目にはよく映ったのだろう。朝食はベヌウがもみくちやにされながら騒がしく進んだ。

念話とやらで助けを求めるベヌウを無視しつつ、一葉はシジミのみそ汁を啜りながら チョロイな。 と内心で思った。

その日、一葉がなのはに会ったのは学校の教室であった。

普段は一緒の通学バスに乗るのだが、ベヌウと話しながら歩いていたらバスを一本乗り遅れてしまったためだ。

ちなみにベヌウは途中まで鞆の中に押し込み、校門を通る前を外へと離れた。

今は校舎の屋上にいる。

「おはよー」

「はい、おはよう」

バスを一本逃したといっても一葉は普段から余裕のある時間出ているために、まだ朝のホームルームまで時間がある。

廊下や教室で子供たちの甲高い喧騒が響いていた。

一葉が鞆を自分の机に置くと、一葉が来るのを待っていたのかなのが直ぐに寄ってきて内緒話をするように身を屈め小さな声で話した。

「一葉くん。鳥さんは？」

「ベヌウは屋上にいるぞ。ユーノは？」

「今はお家。一葉くん、念話って知ってる？」

「教えてもらった。授業中でもいいから隙を見て話し合おう」

「何やってんのよアンタたち」

なのはがうん。と言いかけたところでアリサの声が二人の会話を遮った。

腕を組みながらどこか訝しげそうな視線を送るアリサの横にはアリサも一緒にいる。

「んにゃ、ちよいと昨日のフェレットの話を」

一葉がそこまで言うと、アリサとすずかは眉をひそめて心配そうな表情をつくった。

「二人とも昨夜の話聞いた？」

「ふえ、昨夜って？」

「昨日行った病院で車かなんかの事故があつて、壁とかが壊れちゃったんだって…、」

「昨日のフェレットが無事か心配で…、」

アリスは胸に手を当てて思い悩むような表情をつくる。すずかもそうだった。

「ええと…、その件は…その…、」

なのはの頭の中ではどうやってごまかそうか必死になっていいわけの言葉を探していた。

アリスとすずかは小学生とは思えない程に聡明だ。中途半端な言い訳だと、直ぐに矛盾を指摘されて問い詰められるだろう。

ただでさえ嘘が壊滅的に下手くそなのはがぼろを出したらこちらにまでまきぞいをくうと考えた一葉は助け船を出すことにした。

とりあえず、逃げ出したフェレットとなのはがばったり会ったということにしておいた。

ウソはついていない。そう、ウソはついていないのだ。少しばかり真実をどかしたただけだ。

顔を挽くつかせて不格好な笑みをつくるのはに訝しげな視線を送るもすずかとアリスは信じたようだ。

念話でなのはには『お前はしゃべるな。ボロが出る』と言ったところ横で相槌を打っていただけだった。

二人でした初めての念話がこの会話というのはなんと色気のない話である。

結局ユーノと名乗ったフェレットはなのはの家で飼うこととなったことと、一応、一葉は魔法のことを伏せたままではあるがベヌウを拾ったことをすずかとアリサに教えておいた。

黙っていて、あとではれた時が怖いからである。

案の定今度見せなさいとアリサに命令され、すずかも私も見たいと言われ、今度ベヌウをお披露目することとなった。

結局、授業が始まるまでなのはと一葉が話せる時間はとることはできなかった。

十一話目 デバイス

『ジュエルシードは僕たちの世界の古代遺産なんだ』

国語の授業中に不意にユーノの声が響いてきた。

何かビスケットか何かを齧っているのだろうか、ボリボリと音を立てながら頭の中に響く会話に耳を傾ける。

一葉は斜め後ろの席にいるのはに視線を送ると、なのはにも聞こえているらしくぴよこんと飛び出たお下げがぴくぴくと動いている。

『本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発言が不安定で昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めることがあるんだ。』

たまたま見つけてしまった人や動物が間違って使用して、それを取り込んで暴走することもある』

なんちゅー危ないもんが落ちてるんだ。一葉は念話に飛ばさないまでも顔をしかめた。

ベヌウもそう思ったのだろう。繋がった精神パスから一葉と同じような感情が流れて来る。

『そんな危ないものが何で家の御近所に？』

なのはの質問に、ユーノは声を沈めて申し訳ないような声で応えた。

『…、僕のせいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしてるんだけど、ある日僕が指導して発掘していた古い遺跡の中であれを発見

して調査団に依頼して保管してもらったんだけど、その途中で事故か、人為的災害に会ってこの世界に二十一個のジュエルシードが落ちてしまった』

『おろ？それってユーノ関係なくないか？』

先ほどまで黙って聞いていた一葉が口を出す。

確かに、責任者は責任を取るためにあるが調査団に依頼してジュエルシードを譲渡した時点で責任の所在は調査団に移る。

つまり、いくらユーノが監督を務めていたとしても責任を負う立場ではないはずなのだ。

『だけど…、あれを見つけたのは僕だから…、全部見つけてあるべき場所に返さないとダメだから…、』

壊れた笛のように絞り出した声でユーノは言った。その声は自らに十字架を貸しているような、どこは自虐的なものさえ感じる。

きつとユーノは真面目すぎたのだろう。

だからこそ、自分が負わなくてもいい責任までも責任と感じてしまっ。

昔の自分みたいだ…、一葉はそう思った。

『あなたは真面目なですね』

不意にベヌウの声が念話に介入する。

『だからこそ、必要のない責任まで負おうとする。そしてその結果、関係のないものまで巻き込むこととなった』

ベヌウの正論は刃のようにユーノに突き刺さった。

ベヌウにとってユーノは自分の主を戦場に立たせ、主の友人までも魔法という世界に引きずり込んだ張本人なのだ。

その過程で一葉は過去の自分と向き合い絶望することになった。結果としてベヌウと一葉との間にある種の絆が生まれたとしてもベヌウがユーノに良い感情を抱くはずがない。

『スイマセン…、だけど一週間…、いいえ五日あれば魔力が元に戻ります。それまで休ませてもらえば…、』

『その五日の間に再びジュエルシードが暴走したらどうなるのですか？』

また高町嬢を巻き込むのですか？

一葉を再び戦場に立たせるのですか？』

『それは…、』

ユーノはそうして黙ってしまった。

歯のかみしめる音だけが念話を通して聞こえてくる。それは自分の不甲斐なさに対してなのか情けなさに対してなのか、少なくとも今のユーノにベヌウが言うことを論破するだけの材料は持ち合わせていなかった。

それも当然だ。ベヌウの言っていることはすべて正しい。

一度巻き込んでしまった上に、自分の寢床まで用意して欲しいと言っているのだ。それはなんと甘い。

責任を取らなければいけないと自分で言っているのに、自分の身勝手に巻き込んでしまい…、命の危険にまでさらしてしまった。

その全てを理解しているからこそユーノはなにも言い返すことはできなかった。

『少しだけ…、少しだけだけど私はユーノくんの気持ちわかるな』

『高町嬢？』

なのはの声にベヌウが怪訝な声を上げる。

一葉も、念話に意識を集中させながらも黒板を映していたノートから顔を上げた。そこには振り返って柔らかな微笑みを浮かべるなのはの顔があった。

『ねえ、ユーノくん。そのジュエルシードを集める乗って私たちにもお手伝いできないかな？』

『おい待て。今なんで「たち」って言った』

『だって一葉くんも手伝ってくれるんでしょ？』

一葉の当たり前の質問になのはは断言しきつたように答えた。それは一葉が断ることなどないと信じて疑わない言い方だった。

『それに、一葉くんにはベヌウさんのこととか聞きたいこといっぱいあるし…、まさか私に隠し事をしてたなんて…、』

ちよつと待て。そう念話で言おうとした一葉は恐怖のあまりに言葉が出なかった。

文句を言おうとなのはの方を振り返った時に、なのはの後ろにはどす黒い瘴気の渦の塊が見えた。

確かになのはは今笑っている。柔らかな微笑みをつくっている。しかしその微笑みから出る背筋に粘つくような殺気が一葉を貫いていた。

それは極稀にみることができる機嫌が悪い時の桃子さんの微笑みによく似ていた。

『あ…、あの…、』

この場にはいないユーノには状況が判らないのだろう。戸惑った声
でたずねてくるが精神パスが通っているベヌウからも尋常ではない
恐怖の念が流れてくる。

恐ろしいことにこの殺気は教室の屋根を通り越して屋上にまで届
いているのだ。

気がつけば授業中の教室は静まり返り、誰もがなのはを見ていた。

「えつと…、高町さん。何かありましたか？」

冷や汗を頬に垂らしながら、引くついた笑みをつくり教科書を片
手に持った先生が聞いてくるがなのは柔らかな笑みを崩さないま
まなんでもありませんと答える。

触らぬなんたらに祟りはないと判断したのだろうか、先生はそう
ですかとだけ言い再び黒板にチョークで文字をつづり始めた。

『ユーノくん、今ジュエルシードっていくつあるの？』

『えつと…、二個だけ』

『あと十九個か…、頑張らないとね！』

一葉とベヌウを置いてきぼりにしながらやる気に満ちたのはと
まだ戸惑っているユーノの声だけが念話で頭の中に響く。

『あの…、本当に手伝ってもらっていいの…？』

『だってご近所にそんなのがあつたら危ないでしょ？それに一葉』

くんには拒否権はないから!」

有無を言わさぬ。まさにそれを体現したなのはだった。嬉々として協力を申し出る言葉とは裏腹に、その視線は一葉を舐める。

粘つくような寒気が一葉の背筋に走り指先が震え唇が渴く。断ったら何が起こるかわからない。それが判ったからこそ一葉はなにも言うことはできなかつた。

そして、結局その後何も言葉を発することなく授業は終わることとなる。

この日は土曜日のため、授業は午前中で終わる。チャイムと共に多くの生徒は鞆を持ち教室を出ていくが、なのはまっ直ぐと一葉の席へと向かってきた。

「一葉くん。少しお話しよ?」

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

「昨日、木の中から生まれてきた」

「それ絶対ウソでしょ!」

今、一葉はなのはの部屋にいた。

柔らかい桜色のカーテンやベッドシート、かわいらしい小物や出窓の窓際に置かれたたくさんのぬいぐるみがいかにも女の子らしい部屋にしている。

よく見ると、去年の一葉が誕生日にプレゼントしたぬいぐるみだ

けが枕の脇に置いてあった。

一葉がなのはの部屋にはいるのは、何もこれが初めてというわけではないがアリサもすずかも居ないことは初めてだ。

なのはの家にくる前に、翠屋に寄りおやつシュークリームを受け取りに行ったときに二人きりのなのはと一葉をみて頬に手を当てながらあらあら、まあまあ、と嬉しそうに微笑む桃子さんが上機嫌な顔でシュークリームをおまけしてくれたのがやけに印象的だった。

実際には今部屋にいるのは二人だけではなく、ユーノとベヌウがおり結局シュークリームはちょうど一人一個ずつと数があった。

今は四人で囲むようにして紅茶をすすりながらベヌウについての説明をしている最中だ。

「おおよそ事実です。樹木の成長に巻き込まれて動けなくなってしまうた私を一葉が助けてくれました」

ベヌウはなのはの勉強机に置かれたシュークリームを突っつきながら一葉の説明に補足をする。

翠屋製のシュークリームをベヌウは大変お気に召したらしく、つい先ほどまで無言のまま食べていた。

「あの・・・、昨夜デバイスって言ったのは・・・？」

おどおどとした声を出してユーノは質問をする。よほど信じられないのか、その視線には疑念と戸惑いが混じりあっていた。

「それも事実です。あなたも考古学者の端くれならば古代ベルカの護国四聖獣の話くらいは聞いたことがあるのでは？」

「!?!?!?!、やっぱりあなたは月の舞手……!?!?!」

驚愕し目と口をあぐりと開けたままのユーノと対照的にベヌウはクチバシだけでなく顔までクリームまみれにしながらシユークリームを貪っている。

「ねえ、ユーノくん。デバイスって?」

なのはは首を傾げながら口を開けたままユーノに問いかける。

なのはの声にユーノは我に返ったのか、デバイスについての説明を始めた。

「うん。デバイスって言うのは魔導士が魔法を使うときに使用する補助輪みたいなモノなんだ。

術士のリンカーコアから生み出される魔力を効率よく魔法に変える変換機の役割も果たしてる。

なのはに渡したレイジングハートがそうだよ」

「え?でもレイジングハートとベヌウさんってだいぶ違うよね?」

「デバイスにもいろいろな種類があるんだ。

例えば、レイジングハートには人工知能が付いてるでしょ。それはインテリジェントデバイスって言われてて、デバイス単体でも魔法を発動させることができる。

もう一つがストレージデバイスって言って、これは人工知能がない分、処理速度が速くなって完全な道具として使用されるモノがあるんだけど……」

ユーノはそこまで言うで一呼吸おいて続けた。

「ほかにも昔に滅んだベルカ式っていうものが、そのデバイスの一つがユニゾンデバイスって言うんだ。

それはもう製造自体が禁止されて、手に入れるには目が飛び出るほどの高額で取り引きするか、遺跡を発掘して捜し当てるしかないんだ」

「ほえ〜。じゃあ、ベヌウさんでとつても珍しいんだね」

なのはの感心した声にユーノは首を横に振った。そのユーノの行動になのははきよとんとした表情を作る。

「珍しいなんてモノじゃない。本来、ユニゾンデバイスは人の形をしているんだ」

「え？でもベヌウさんは鳥型でしょ？」

「だからなんだよ。護国四聖獣はずっと昔にベルカの王様・・・、聖王って呼ばれてるんだけど、その人を守る為だけに存在する王族特務っていわれる騎士たちが使っていたモノなんだ。

たった四機だけ開発された獣型のユニゾンデバイス。

影を駆ける者、常夜の守り手、闇の奏演者、そして月の舞手。今、現存するのは教会に保管されてる獅子型のユニゾンデバイス、影を駆ける者だけだと思われてたんだけど・・・、

文化的な価値は計り知れないよ」

「話しには聞いていたが、改めて聞くとすごいんだなお前」

シユークリームを食べ終えた一葉は、青いバラの絵が描かれたティーカップに注がれた紅茶を飲みながら自分の相棒の話を聞いて感心していた。

やはり、そういったものは本人の口から聞くよりも他人の口から聞いた方が信用できるものなのだ。

「私からしたら昨夜の一葉も充分すごいと思いますが、そろそろ話していただいけませんか？ 剣のこととか」

ベヌウはそう言いながら視線を一葉に移した。

いつの間にか皿の上に置かれたシュークリームはすべてたいあげられており、ベヌウの黒い羽毛はクリームまみれになっている。

一葉は座っていた床から腰を上げてベヌウを掴むと、制服のポケットの中からハンカチを出してベヌウを拭きながら言った。

「あれはただの手品だよ」

「手品？」

シュークリームをか頬張ったままなのはが首を傾げた。

気が付けばユーノもすでにシュークリームを食べ終わっている。明らかにフェレットや鳥の胃袋の体積を超えたモノをぺろりと平らげたに引きの存在の方がよっぽど手品だと思いが口には出さない。

一葉はベヌウについたクリームを拭き終わると、部屋の隅においてある自分の鞆から浅黄色の布袋を取り出して紐を解いた。

そこに収納されていたのは人の髪の毛ほどの太さしかなくさんの鍼だ。

それを一本だけ取り出すとみんなに見えるように前に出す。

「家の死んだ爺さんが鍼医師でね、形見分けでもらったんだ。これが昨日の剣の正体」

「え？」

なのはとユーノの声が重なった。表情も同じように目を丸くしている。

「別にこの鍔自体にタネがあるわけじゃない。

オレが勝手にこの鍔が剣であったかもしれない可能性にすり替えただけなんだよ」

「どういづことですか？」

「どうもこうも、他の世界から剣を引っ張ってきた。そうしか説明できない」

その言葉にユーノの顔は再び驚愕の色に染まり、ベヌウは刃に切りつけられたかの衝撃を受けた。

しかし、二人の驚きの意味は全く違った。

ユーノは魔法文化のない世界で鍔を式とした転位魔法を使ったと、そう勘違いして驚いた。

しかし、ベヌウは一葉が魔法の使い方を知らないことを知っている。そして、今一葉は「可能性をすり替えた」そして「他の世界から引っ張ってきた」間違いなくそう言った。

まさか…、という疑念の渦でもベヌウの中でバラバラだったパズルのピースが組み合わさっていく。

もし、ベヌウがはじき出した答えの通りならば、それは人に許された能力の範疇を大きく超えてしまっている。

あり得るはずがない。そう思いつつも既に確信にも似たものがベヌウの中にはあった。

その時不意に一葉から念話が届いた。なのはやユーノには聞こえ

ないようにベヌウにだけ向けられたものだ。

『お前には後で説明する』

それだけだった。

一葉はウソを言っていない。だが本当に大事な部分だけはぼかしていた。それに気がついたのはこの場ではベヌウだけだった。

「えつと…、よくわかんないんだけど…?」

ようやくシユークリームを食べ終えたのはが黄色い鳳仙花が描かれたティーカップを両手に持ちながら、伺うように上目づかいで聞いてきた。

それに軽くため息をつきながらなのはの頭をぼんぼんと軽くたたく。

「無理に理解しようとすんな。その内わかるようになるから」

「ううゝ…、」

顔を朱色に染めながら黙りこんでしまう。

一葉の代わりにユーノが転位魔法の応用だよと説明をしようとした瞬間に、部屋にいる四人すべてが大気が揺れるのを感じた。

「これは…!、」

「おそらくジュエルシードでしょうね。ここからそう遠くない」

窓の外ではジュエルシードが発動したと思われる場所だけが、灰色の封印で覆われていた。

「あれは、神社のほうだな」

「急がないとー!」

ユーノが急いでなのは肩に飛び乗ると、なのは手に持っていたカップを乱暴にソーサーの上に置き、転がるように部屋から出て行った。

部屋にはベヌウと一葉だけが残された。

「これ…、オレも行かなきゃまずいよね」

「でしようね。またあの殺気にさらされるのはゴメンですし、何より忘れ物を届けに行かないと」

ベヌウが呆れたような視線の先には机の上に置きっぱなしのレイジングハートがあった。

十一話目 デバイス（後書き）

誰かテンプレの意味を教えてください・・・

十二話目 忘れ物（前書き）

初感想いただきました。

ものすごくうれしいです。

期待されれば震えてしまうチキンハートですが頑張ります。

十二話目 忘れ物

戦場で最も恐ろしいのは敵でも武器でもない。

ましてや血でも、狂気でも、殺意でもない。

最も恐ろしいのは無能な味方だ。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

一葉が飛び出したなのはを追いかけようとして高町家の家の鍵がないことに気がついた。

どうしようかと一瞬だけ逡巡したのだがなのはが命の危険にさらされる可能性が高いために、背に腹は変えられない。

しかし、幸いなことに靴をはき玄関を飛び出そうとしたところでちょうど高校から帰宅した美由紀さんにはったり会ったので、またフレットが逃げ出してなのはが探しに行ったから自分も追いかけます。とだけ言ってなのはを追いかけて全力で疾走する。

場所はなのはの部屋から見えたが、おそらく八束神社だろう。

今はベヌウが空からなのはを探してくれている。

『…、一葉』

先ほどから何か言いたそうな雰囲気を出していたベヌウがようやく念話で一葉に話しかけてきた。

『これは、私の独り言なのですが…、』

ベヌウが語ったのは、かつてベルカにいた研究者の話だった。

その研究者は次元世界のほかにもまだ世界はあるのではないかと考えた。

それは、今ある世界とは別に、それでいて同時に運行されている並行世界と呼ばれるもの。

一本の巨木が人の運命だとすると、分岐し伸びるのが可能性。その可能性を可能性で切り捨てることなどもつたいなくはないか。

そして切り捨てられた可能性をもう一度引き戻すことはできないか。

一度決定づけられた未来を別の未来とすり替えることはできないか。

神に唾するに等しいその研究はベルカの総力挙げて進められ、莫大な資金と長年の研究にわたり一つの過程が生まれた。

それが“時間”という概念である。

もしも時間をCTスキャンのように輪切りにすることができたのなら、その切り口から並行世界へと介入できるのではないか。

その可能性に至ったその研究者はラボのチームをひきつれて一つの無人世界で実験を行った。

『冷静に考えれば、そのようなことは不可能だったのです。』

仮定として、未来を覗く機械があったとしましょう。それを覗き自分が死んでしまう未来が見え、それを回避することはできますか？』

『…、不可能だ』

一葉は少し考え込んでからベヌウの問いかけに答えた。
今は一葉の目の前には横断歩道があり信号機が赤く光っている。
少しでも早く行かなければという焦燥感に駆られながらも、上
った息を整える。

『その通りです。ではなぜだか解りますか？』

『もし、その未来が回避できた時は未来を見る機械は失敗作だ
たということになる』

現在から未来を見ること。それ自体が現在に“知らないはずのこ
とを知っている”という矛盾が生まれてしまう。

そして、既に決定づけが終わった過去を変えることも“あつたは
ずのことがなかったことになる”という齟齬が生じる。

『そんなことが人の身でできるはずがない。イエ…、出来てはい
けないのです』

ベヌウがなのはを見つけたようで、風を切り急下降すると小さな
風を起こしながら一葉の肩にとまり翼をたたんだ。

それと同時に信号が青に変わり、左右の安全の確認もそこそ
こに掌にあるレイジングハートを強く握り直すと、再び全力で走りだす。

『実験の結果だけを簡潔に言います。失敗しました。』

それも超大規模の次元震を引き起こして、実験を行った無人世界
だけでなく数え切れないほどの次元世界が消滅した』

神に弓を引いた結果がそれです。とだけ小さく最後に付けたした。

商店街をまばらに歩く人垣を縫うように走り、綺麗に舗装された石畳の道を一気に駆け抜ける。

ここまで走ってもなかなか追いつかないところをみると、どうやら最初の分かれ道で別のルートを走ってしまったようだ。

『今の話しを踏まえたうえで回答してください。』

一葉。あなたの“能力”はなんですか？』

それは語彙も言い回しもない直球な言葉だった。

自分の肩にとまっているベヌウの双眸がウソやはぐらかすことはいらないで欲しいと言っているかのように突き刺さる。

しかし、一葉はベヌウに誤魔化しをする心算など毛頭もなかった。昨夜はあれほどの啖呵を切られたのだ。

ここで嘘や誤魔化しで塗り固められた言葉で返すのはベヌウに対する侮辱であり裏切りだった。

『お前が思っている通りだよ。オレはその“あるかもしれない未来”と“起こったかもしれない過去”を並行世界から“現在”に持つてくることができる』

『やはり…、ですか』

ベヌウの声は驚愕を通り越して弱々しく胸をつかれたように半ば呆然としていた。

それも仕方のないことだろう。

ある程度予想していたとはいえ、かつて自分が仕えていた国が総力を挙げて行ったことが言葉で表現することがはばかれるほどまでに陰惨な結果を招くこととなったことを、一葉のような十歳にも満たない子供が、それも個人で当たり前のように行っているのだ。

それは冗談以外のなにものでもない。

しかし、まっ直ぐと前を見て走る少年の瞳には穏やかでありながらも、どこか深い憂いを帯びていた。

これはウソを吐く時の人間の目ではないことをベヌウは知っていた。

『条件も限界はあるけどね。オレができんのはオレが任意した空間に限って他世界に存在する“起きたかもしれない”に入れ替えるだけだ』

『それでも充分あり得ない能力です。

こう言ってはあれですが、一葉はこの世界にとって自分を壊す可能性のある癌細胞に近いのではないですか？』

『似たようなことを世界に言われた』

『世界に…、どういうことですか？』

『それは…、っと。この話はまたあとでな』

一葉は走り続けてようやくなのは後ろ姿を捉える事が出来た。

まだ小指ほどの大きさしか見えないが、神社の鳥居を階段を一直線に上っているところをみるとまだレイジングハートを忘れたことに気が付いていないらしい。

念話を飛ばしてみようにも、デバイスを持っていないのはに通じるか甚だ疑問であった。

しかし、ユーノが気がつくかと思念話を飛ばそうとしたときにはすでに遅く結界の中に入られてしまった。

なんて迂闊な。

戦場に立つ緊張感と覚悟が足りなさすぎる。それを小学三年生に

求めるのは酷だが昨夜痛い目にあつたばかりなのだ。

怒りにも似た苛立ちが一葉の胃の腑から沸き上がってくる。

『急ぐぞベヌウ』

『はい』

息を切らしたまま古びた階段の下まで来ると、張られた決壊に一人分が入れる程度の孔をベヌウが開ける。一葉は一度深く呼吸をして息を整えると、つい今しがたまで流していた汗がすうっと引いていった。

一葉はポケットの中から布袋を取りだすと、レイジングハートを固く握りしめて階段を一気に駆け上がった。

十三話目 覚悟

「なのは！早くレイジングハートを起動して！！」

絹を裂くような悲鳴でユーノは叫んだ。

目の前には原生生物を取り込んだジュエルシードの暴走体が敵意を込めた歯牙を剥き出しにして二人に突っ込んできている。

「ユ…、ユーノくん…、」

熱が消えたような声でなのはは力なく呟いた。

「レイジングハート…、忘れてきちゃった…、」

「え…、えええええー!?」

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

一葉が階段を登り切り、塗装のはがれた鳥居をくぐって最初に見たのは倒れている若い女性だった。

慌てて駆け寄り状態を見てみると、外傷はなく腹の上が規則正しく上下に動いているところを見ると異常はなさそうだ。

一葉は気を失っている女性を参拝道の脇に植えられているギンモクセイの根元まで連れて行くと、ベヌウは念のためにと炎の壁でギンモクセイの周りを囲んだ。

そして叩きつけるような怒声が響く方へと目をやると、そこには

トムとジェリーを思わせるような追いかけてつこが行われていた。

ただアニメと違うのは、なのはとユーノが本気になって必死に逃げ回っているのと、暴走体が本当に二人を殺そうとしていることだ。鋼色をした巨大な体躯の獣は四足歩行で牙を剥けながら、なのはたちに視線だけで人を殺せそうな敵意を四つの目から出し、涎をまきちらしながら咆哮している。

一葉は布袋から数本の鍼を取りだすと、それを一つの剣にした。前回のようになん本一本を剣に変え、宙に浮かすのではなく複数の鍼を一つの巨大な利剣として手に持ち暴走体となのはたちの間に投擲する。

京都の仁王像程にもある剣は空気を切り裂く音を立てながら一葉の手を離れると、同時にベヌウが放った黒い炎に包まれ、なのはと暴走体の間に大地を打ち砕くような轟音と砂埃が共に舞い上がる。

「キャッ！」

突然襲われた衝撃に、ユーノはなのはの肩から放り出されなのはは小さな悲鳴を上げて滑るように転んでしまう。

しかし、それを気にも留めずベヌウは炎に魔力を通すと剣に纏っていた炎がまるで生きているかのように暴走体に襲い掛かると、その形状を縄のように変え巨大な体躯を縛りあげた。

瞬きの間に起こった鮮やかな一連の流れに暴走体も何が起こったのか分からずに、天を衝くような咆哮を上げながら牙と爪を起して必死に自分を拘束しているものを外そうとするがベヌウの炎の拘束具は千切れる端から繋がっていく。

いくら力が強いといっても本能でしか動けない暴走体如きに破れるはずはなかった。

一葉は暴走体が拘束されたのを確認すると沸々と沸き上がる苛立

ちを抑えながら真っ直ぐになのはの方へと歩いていく。

軽い脳震盪が起きているのだろうか、ふらふらと起き上がろうとするなのはに手を貸してやるつもりは一葉に毛頭もなかった。

「おい…、」

一葉はなのはの前まで行くと膝をついたままなのはを見下ろしたまま絞り出したような低い声で声をかけると、その瞬間になのはの表情に怯えと動揺の色が走ったのが判った。

助けに来てくれたんじゃないの？

なんで怒ってるの？

そういう思考が青くなっただなのはの表情から伺えた。

「なのは…、戦場で一番怖いものが何か知ってるか？」

「…、え？」

不安と恐怖で押しつぶされてしまいそうな表情のままなのはは唐突に投げかけられた質問に頓狂な声を上げるしかできなかった。

「それはな、敵でも、命を奪う武器でもない。

ましてや明確な殺意や敵意。殺人が正当化される戦場に渦巻く狂気でもない」

何を言っているのかわからない。本当に解っていないようだった。それが一葉を更に苛立たせる。

その時、ユーノが土まみれになれながらもなのはの方へと走って戻ってきた。

しかし、一葉はそのことを視界の隅で確認するだけでなのはに答えを突き付けた。

「戦場で一番怖いもの…、それは無能な味方だよ」

凍えるような冷たい視線と共に吐き出されたその言葉は、なのはと戻ってきたばかりのユーノに刃で切りつけられたかのような衝撃を襲った。

だが一葉はそんなことを気にせずに続ける。

「ユーノ、なのは。オレを戦場に立たせているのはお前たち二人だ。

二人は魔法つていうただ唯一の武器を持たずに戦場に立ち、今戦えるのはオレとベヌウだけ。

それがどういう意味かわかるか？」

解る。一人の無力な人間がいるだけで、仲間全体が命の危機に晒される。

誰かが助けてくれるという甘えは戦場では通用しない。

一葉が言いたいことにがなのはには解ってしまった。

お前は足手まといたと…、

一葉が突き付けた事実になのはは眼を開いたままポロポロと涙を流し、ユーノは悔しそうに俯いて唇を噛んでいる。

自分が浅薄だったことにユーノは後悔した。

現地で出会った協力者。二人とも自分と年の変わらない子供だが、一人は膨大な魔力を持つ女の子。そしてもう一人は、戦闘自体は見えないが、ジュエルシードの暴走体は無傷で倒すベルカの守護獣を従える少年。

おそらく、この世界でこれ以上の助っ人はいないだろう。

だからこそユーノは油断してしまった。

何とかなるのではないか…、と。

それはなんとという甘え。なんとという怠慢。

自分ひとりでジュエルシードを封印する覚悟がいつの間にか、誰かに封印してもらおうという他力本願になってしまっていたことに、そして再びなのはを命の危険に晒してしまったことに気がついたユーノは情けなさとしづかしさ、そして自分に対する怒りを必死に抑え込んだ。

そしてなのはは傷ついていた。

いつも傍に居てくれて、いつも頼りになってくれた少年が、今はまるでいらなくなった玩具をわざと公園に置き忘れる子供のような冷たい目で自分を見ている。

いつも笑って、自分を支えてくれていた少年が、今自分を否定する言葉を突き付けている。

なのはは浮かれていたのだ。

魔法という力を手に入れたことに。

そして、アリサとすずかにも内緒な秘密を一葉と共有したことが、なのはは純粹に嬉しかったのだ。

そして、その状態のまま自分の取ったあまりに軽率な行動が一葉の怒りの琴線に触れてしまった。

愛想を尽かされかもしれない。

もしかしたら、もう元の関係には戻れないかもしれない。

その恐怖を不安がなのはを支配していた。

「想いだけでどうにかなると思ったか？気持ちだけで何かができると思っただか？」

それとも、いざとなったらオレが助けしてくれるとでも思っていたのか？

オレには今のお前たちには覚悟じゃなくて甘えしか見えてこない」

一葉の後ろではまだ暴走体が声にならない叫びを上げて暴れまわり砂埃を巻き起こしてる。

そんな喧騒の中でも一葉の言葉がなのはとユーノにはつきりと、そして冷たく突き刺さる。

「覚悟のない者が戦場に立つな。」

まだ、甘えが残ってるんなら二人とも今すぐ家に帰れ。

レイジングハートだけ渡してもらえれば後はオレがやってやる」

表情が死んだ能面のような冷たい眼をしたまま、一葉はなのはとユーノに言った。

なのはは呆然として涙を流し、ユーノは悔しそうに俯いている。

「オレは命のやり取りには慣れてるし、今はベヌウがいる。」

生半可な気持ちの人間がそばにいるよりオレとベヌウだけで戦った方が効率がいい。

それでも……、」

一葉はそこまで言うとう右手のコブシを二人の前に突き出し開いた。そこには深紅の宝石、レイジングハートがあった。

「それでも、お前らに覚悟があるというのならそれをオレに見せてみる」

その言葉にユーノはハツと顔を上げ、なのはの表情にはみるみる生気が戻ってくる。

「これは遊びやゲームじゃない。コンテニューはなしだ。もし死ななくても、一生背負わなければならない障害を負うことになるかもしれない。

それでも戦うっていうのなら…、あいつを止めてみる。

オレは一切手を出さない」

そう言うで一葉は初めて二人から目をそらし、視線を後ろに送った。

そこには、怒りの頂点を遙かに超えた咆哮を上げ自分が傷つくことも厭わずに黒い炎の拘束具から逃れようと牙と爪を起している獣がいた。

もしあれが解き放たれたらどうなるか考えなくともわかる。

本能のままに暴れまわり、眼に付くすべてのモノを喰い散らすだろう。

「人が戦うには何かしら守りたいものがあるからだ。

それが名誉であったり、権力であったり、財産、恋人、友達、そして家族。

お前たちは一体なにを守りたい？」

一葉の言葉になのはの頭の中をよぎったものはアリサとすすか、そして大好きな家族の顔だった。

自分が守りたい人たち。そして自分が傷ついたらきつと涙を流してくれる人たち。

一葉は強い。

なのははまだ、一度も一葉の戦闘を直接見てはいないが昨夜の暴

走体を無傷で倒したのだ。

それでももし一葉が戦っている別の場所でジュエルシードが発動したら、その時に大切な人が傷ついたらなのははきつと一葉を、そして何よりも自分を恨むだろう。

自分の街で危険なことが起きている。

それを知っている。

なのに何もしなかった。何もできなかった。

そんなことになるのは嫌だった。

傍観者にはなりたくない。

その想いがなのはにレイジングハートへと手を伸ばさせた。

十四話目 協力体制

恐怖はある。しかし、なのはに迷いはなかった。

— Stand by Ready · Set up .

一葉から受け取ったレイジングハートが、なのはの手に平で桃色の光をあふれさせる。

赤い宝玉はその形状を杖に変え、なのはに戦いの白い鎧を纏わせた。

「パスワードなしでレイジングハートを起動させた!？」

なのはの肩の上に乗っていたユーノが眼を見開いて驚愕の声を上げる。

それもそのはずだ。

魔法と出会ってたった二日の少女がデバイスの無詠唱起動をいとも簡単にやってのけたのだ。

既にベヌウと共に鳥居の上に避難していた一葉は、なのはが戦闘の準備を整え終えたのを確認するとベヌウに命じて暴走体を拘束していた黒い炎を解除させた。

その瞬間に暴走体は咽喉が張り裂けんばかりの叫びをあげ、四つの足で参拝道を砕きながら一直線になのはに向かっていった。

— Protection .

レイジングハートの機械音が響くと同時になのはの周りに透けた薄桃色の膜が張られる。

放たれた弾丸と化した暴走体は、レイジングハートが展開した障壁にぶつかり、土煙を上げ地面を削りながら社寺の近くから階段までなのはを押し出した。

「なのは！」

その勢いで放り出されたユーノは震えた声で叫んだ。

もし、防護障壁の展開が一瞬でも遅れていたら間違ひなく重傷を負うような一撃だ。

ユーノは咄嗟に鳥居の上で黒い怪鳥と共に傍観を決め込んでいる一葉に視線を向けた。しかし、一葉は仮面を張りつけた表情のまま冷たい視線で見下ろしているだけだった。

本当に手を出さないつもりなのか…！

この感情が理不尽なものだとは解っている。それを今さっき一葉に突き付けられたばかりだ。

しかし、なのはは一葉の友達ではなかったのか？

親友ではなかったのか？

ユーノはなのはが一葉と話している時の嬉しそうな顔を思い出す。一葉を信用し、信頼しきっている顔。まだなのはと出会って二日と少ししか経っていないがその程度のことぐらい直ぐにわかった。

そんな信頼を向けられている相手が目の前でこんなにも危ない目にあっているというのに、一葉は微塵も動く気配を見せない。

それがユーノを苛立たせる。

ジュエルシールドを抜きとしてもそれは人として間違っているのではないか？

何故そんなにも冷たい目で見ることができるのか？

その疑念はいつしかユーノの中で燻ぶるような怒りに代わっていった。

Protection Condition : All
green .

ふいに響いたレイジングハートの音声に我に返ったユーノは視線をなのはの方へと戻した。

そこでは徐々に晴れてくる土煙の中で、なのはが腰が引けながらも障壁を展開したまま薄桃色の紫電で暴走体を逆に吹き飛ばしていた。

力の抜けた低いうめき声を上げながら、その体重の全てを重力に預け鈍い音を立てながら倒れこむ暴走体。

原生生物を取り込んで実体のあるぶん強力になっているはずにもかかわらずなのははそんなことを思わせもしないまま一撃で暴走体を沈めた。

「いたたたた…、言うほど痛くはないかな？」

ユーノの中でつい先ほどまで渦巻いていた焦りとはまるで正反対の間の抜けた声が聞こえてきた。

「えと…、封印っていうのをすればいいんだよね。レイジングハートお願いなね」

All right . Sealing mode .
Set up .

なのはがそう言いながらレイジングハートを掲げると、レイジングハートの先端部分が音を立ててスライドし収納されていた小さな部品が現れる。そこから翼を象られた桃色の光からおびただしい量の魔力が生まれた。

桃色の翼から無数の縄が生まれ、暴走体を締め上げる。

すると、昨夜の思念体と同じように額に焼印のような数字が浮かび上がってきた。

— Stand by Ready .

「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアルXVII！！」

なのはが呪文を唱えるとそれを合図に暴走体を締め上げていた拘束がいつそうきつくなる。

文字通り締め上げるような悲鳴を上げる暴走体は四つある全ての目見開き、酸素を取り込むために苦しそうに天に向かって口を開き涎を撒き散らしている。

「ジュエルシード封印！！」

レイジングハートを構えて、なのはが最後の言葉を口にする。

すると暴走体は苦悶の叫びを上げながら、青い光の粒子となって大気中へと散って行った。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

「高町嬢はすごい才能を持っていますね」

コンビニで買ってきたチョコビスケットをカツカツと突きながらベヌウは一葉に言った。

今一葉とベヌウは緋山家の自室にいる。窓の外は既にとつぷりと日が暮れており、夜の闇が覆いかぶさっていた。

一葉は、ティーパックで入れた紅茶を啜りながらベヌウの言葉に耳を傾けた。

「まだ魔法と出会って二日しか経っていないというのにも関わらず、今日の戦闘でデバイスの無詠唱起動をやつてのけた。

それはよほど魔法に慣れたものしかできないものです。

それに胆力もあり、意外と頭もいい」

「イヤ、あれは頭がいいと言うよりも他人の感情に機微なんだから理屈よりも感情を優先させるような奴だしな……」

イルカが泳ぐ姿が描かれたマグカップを一葉は勉強机の上に置きながら答えた。

このマグカップは以前にすずかとアリサ、そしてなのはたちと水族館に買った時に購入したものだ。デフォルト化されたキャラクタ―ではなく、リアルに描かれた光のさす珊瑚の海を泳ぐイルカの親子の姿が描かれている。

一葉の家にもティーカップがないわけではないが、マグカップの方が多く量が入るので一葉は紅茶を飲む時マグカップの方を重宝していた。

「確かに。しかし、今はまだ少しばかり戸惑っているようですがあれはきつと素晴らしい魔導士になる」

「ずいぶんと評価が高いな。なのはのこを気に入ったのか？」

「感情の善し悪しで答えるならば非常に好意的には見ています。しかし、個人の實力に関して私は過大評価も過小評価もしません。その上で一葉、あなたを私のマスターと決めたのです」

ベヌウはビスケットを食べ終わると、満足したかのように毛づくろいを始めた。

こうして見ると、どう見ても饒舌なだけのただの鳥だ。

考古学者のユーノが顔色を変えるような存在には見えない。

一葉はベヌウを見ながら苦笑いするとマグカップの横に置いてある小皿に乗せた自分の分のビスケットを一つつまんで、口へと運んだ。

サクサクとした小気味よい触感と舌に乗る甘い味を感じながら今日のことを反芻した。

ジュエルシードを封印した後、ユーノを肩に乗せたなのはが直ぐに謝りに来た。

服は元の制服に戻っており、レイジングハートも杖の状態からただの丸い宝石へと姿を変えていた。

「ごめんなさい、私少し浮かれてた…、」

急に腰を曲げて頭を下げたためにユーノは地面に落ちこちてしまっが、器用に態勢を整えて着地するとユーノも頭を下げてきた。

「僕もです…、あなたとなのはに甘えていた。そのせいでなのはをまた危険な目に晒してしまった」

既に鳥居の上から降りてきていた一葉は小さなサイズになっているベヌウを肩にとまらせたまま静かに言葉を発した。

「オレが言いたかったのは、お前らが何も考えてなさ過ぎるってことだったんだよ」

つい先ほどまでとの冷ややかな声色とは違う声に二人は顔を上げた。そこにはいつも通りとはいかないまでも、なのはのよく知っている一葉がいた。

まだ完全に不機嫌さが抜ききっていないせいだろう。腕を前に組み眉をしかめながらなのはとユーノを見ていた。

「二人は自分のことも、自分以外のことも考えなさ過ぎだ。怪我をして困るのは自分だけだと思っただのか？」

二人が傷ついて、周りの人間が何とも思わないとでも思っただのか？ はい、眼を閉じて自分を心配してくれてそんな人を思い浮かべてみ。多分、瞬時に十人以上は出てくるから」

その言葉になのはは過保護ともいえる家族とアリサやすすかを筆頭とした学校の友達が、そしてユーノは部族の仲間たちの顔が瞬時に脳裏をよぎった。

「二人とも、なんかタイプが似てるんだよね。」

なんつーか…、こつ。これだと決めたら前しか見ずに走って一直線。

そんで壁にぶつかって痛い目を見て初めてバカなことをしたって気がつくタイプ」

一葉は自分の左右の視界を遮るように掌を自分の顔の横まで持つていくとそのまま前へと移動させて猪突猛進を表現するジエスチャ

―をした。

「さつきだって、オレが来なかったらどうなってたか言われなくてもわかるよな？」

「うん…、」

眉が下がり、まつ毛が震え眼が潤んでいた。萎れるような声で頷くなのはトレードマークのお下げは力なくうな垂れている。それはユーノも同じだった。

どん底の底までへこんだ二人の背中にはどこか淀んだ黒い空気を背負っているように見える。

「それでもお前らは戦うんだろ？」

「うん…、」

「はい…、」

まったく…、そう言いたげに一葉は大きいため息をつきながら頭をガリガリと掻き始めた。

突然の行動に訝しむような表情をつくるのはとユーノだったが、ベ又ウだけがその行動の意味を理解したようで呆れたように溜息をついていた。

「あのな…、なのはが傷ついて哀しくなる奴は目の前にもいるんだぞ。止めないとも思うか？」

「それは…、」

なのは俯いて押し黙ってしまった。

しかし先ほどの戦闘が一葉の言う覚悟ならばなのははそれを見せ
たし、問題なく終わらせた。

反対される道理はないのだが、これから危険なことを続けるとい
う背徳感から約束を反故にされてでも一葉に正当せいを感じてしま
う。

「だからなるべく俺の視界にはいるところにはいないとまた無茶す
るんでないかと怖くて仕方ない。

ジュエルシードの封印、協力してさっさと終わらせるぞ」

「え・・・？」

その声はなのはとユーノの声が重なったモノだった。

よほど予想外だったのか、まだ惚けた顔を作っている。

「手伝ってくれるの？」

まだ、肩を小さくしたまま伺うようになのはが聞いてくると一葉
はあきれたように肩を竦ました。

「オレに拒否権はないんでなかったのか？」

「ふえ？」

確かに言った。その場の勢いのことだったので今まで忘れていた
がなのはは間違いなく一葉にそう言っていた。

「とりあえず、今日はここまでにしよう。今後の話しはまた明日
に持ち越した。

家まで送るよ」

「う……うん」

まだきよとんとした顔をしているなのはを見て一葉は困ったかのように笑うとなのはの頭の上に手を乗っけてぐしゃぐしゃと撫で回した。

「にやつ、にゃああ!？」

一葉の余りに突飛な行動になのはは猫のような奇声をあげて顔を朱に染めた。

「とりあえず、今日はお疲れさまだ。」

なのははオレが言いたかったことがわかったんだろう？
だからレイジングハートを手に取った。今はまだそれで良いよ」

一葉は手を止めてなのはの頭を軽く叩いた。髪は乱れ、その撫で方には優しさの欠片もなかったが、なぜかなのはは嫌な気はしなかった。

一葉のなのはを認めたような言い方もあったのだろう。

先ほどまでなのはの心を覆っていた陰鬱な雲がウソのように掻き消えていく。

一葉も協力をしてくれる。お疲れさまと言ってくれた。そのことがたまらなく嬉しかった。

なのはは小さな声でありがとうとだけ呟くと、一葉は満足しように頷いた。

今はまだそれでいいのだ。覚悟云々以前になのはが今どれほど危険なことに首を突っ込もうとしているのかだけは理解して欲しかった。

力は覚悟に導かれ、覚悟は力に溺れる。

なのはは力を手にした。力に溺れるか、覚悟が導かれるかはまだわからない。

それでも今は自分の立ち位置だけは理解しただろう。

一葉はそれで満足だった。

そうしてなのはと一葉は手を繋いで蜂蜜を垂れ流したかのような黄昏に染まる空を見上げながら、神社を後にした。

そして今に至るといふことになる。

一葉はいったんリビングまで降りて空になったマグカップにティーパックを入れてお湯を注ぐ。すでに数回出したティーパックは色が薄くなってしまっているが寝る前なのでこのくらいが丁度いい。

湯気の立つマグカップの中身をこぼさないように慎重に階段を上り、自分の部屋のドアノブを回して部屋に入ると、ベヌウは机の上で一葉が帰ってくるのを待っていた。

一葉にとつてはここからだ今日の本番なのだ。

自分の過去と犯した罪。そしてどういった存在なのかを目の前にいる相棒に伝える。

不思議と恐怖はない。

この黒い相棒は、すべてを知った上で自分とともに歩んでくれると信じているから。

十五話目 牝牛の心臓

なのは……、彼を……、一葉をあまり信用しな方がいいと思う」

「え……？」

家に帰り、軽くシャワーを浴びてからパジャマに着替えたなのは電気の明かりを消してベットに潜り込んだ。

今日の出来事を反芻しながら明日から一葉と一緒に頑張ろうと決意を胸に眠りに就こうとした時に不意にユーノが言った言葉に耳を疑った。

なのはは布団から上半身だけを起こしてユーノの方を見るとユーノもバスケットで丸まっていたのだが、首だけを上げた状態でなのはの方と見つめていた。

「正直……、僕は彼が怖い……」

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

「俄かには信じ難い話です……、しかしウソにしては……」

「オレの作り話とも妄想ともとってもかまわないが、オレは自分の経験した真実しか口にしていない」

一葉の言葉にベヌウとの間に重い沈黙が降りる。

部屋に響くのは水槽のモーター音と神経質に秒針を刻む時計だけだ。

時計の短針はすでに日が変わる時間を指しており、一度入れ直した紅茶はすっかり冷めてしまっている。

一葉はベヌウに自分の全てを話した。

それこそ前世の記憶を持っていることだけでなく、自分の能力でできる限界、可能性を入れ替えるという力を使い世界を殺したこと、そしてその経緯と理由を。

「……信じられないか？」

一葉は悩むように固まっていたベヌウに苦笑いしながら問いかけて冷えきった紅茶を喉に流した。

「いえ……、しかし戸惑ってはいます。」

あまりにも私の予想を大きく超えていたので

ベヌウは小さく首を横に振ると、緑の瞳を一葉に向けた。その瞳は実に真っ直ぐで、誠実で、それでいて真剣なものだった。

「あなたの魂は罪と血に塗れているのですね……、」

「ああ……、」

「しかし、罪を償うためにあなたは这个世界で機会を得た。そう考えることはできないのですか？」

「償って消える罪なんてありやしないよ」

一葉は笑ってしまった。これは自嘲の笑いだ。償う、という言葉自体が人が現実から逃げるために人が造り上げた妄言なのだ。

犯した過去を消えない。刻まれた罪は消えない。償う。その言葉はなんとという傲慢なのだろう。

しかし、ベヌウは一葉の予想もしない言葉を続けた。

「ならば戦えばいいのです」

「……、なに？」

「戦って戦って、戦い続けて奪ってしまった以上の命を救えばいいではないですか。」

あなたは誰かのために怒ることができる。

傷ついた誰かのために力を使うことができる。

今日の高町嬢と一葉のやりとりを聞いたら誰にでもわかります。

やはり、あなたは優しい人だった」

一葉に向けられた宝石のような緑の双眸は真っ直ぐと一葉を貫いている。一葉も決してその視線を外そうとはしなかった。

「あなたには世界を殺すほどの力があるのだから…、守る力だつて、救う力だつてあるはずですよ」

「簡単に言ってくれるな。殺すのと救うのとは全く違う」

そう、いつだってそうだったのだ。

直すよりも壊すことの方が簡単で、描くよりも破ることの方が容

易く、あんなにも簡単に絡む糸は解くことの方がずっと難しかった。だから一葉は世界を殺した。救うよりも、殺す方が簡単だったから。

「だけど、今の一葉は違うでしょう？
なぜならば私がいるのだから」

ベヌウの黒いクチバシがさも当然のように言い放った言葉に不意に咽喉の奥が苦しくなり、胸の奥が熱くなったのを一葉は感じた。

「一葉に悲しみがあるときには私もともに背負うと言った。ならば一葉に喜びがあるときには私にも分けて下さい。

一葉に立つ瀬がなくなっただときには私が抛り所となると言った。ならば一葉は私が飛べなくなっただときの止り木になって下さい。

初めて出会ったとき、私は一葉の翼に、盾になると誓った。ならば一葉は私の牙となり爪となってください。

殺すことしかできなかった過去とは違う。

今は私と言う相棒がいるではないですか」

ベヌウには一葉がひどく哀れに見えた。

ベヌウの感情はプログラミングされたAI。云わば0と1の羅列なのだ。

しかし、だからこそ解る。

蓄積された記憶の引継ぎ。周囲において成長を続ける精神年齢。寿命という概念のない機械であるベヌウでさえ形容し難い哀愁を感じることもあるというのに、一葉は人の身でそれを受けている。本来ならばとうてい耐えられるものではない。いつ心が潰れてもおかしくないのだ。

しかし、一葉は狂うこともなく、壊れることもなく、それを受け入れている。

それは諦観か達観か、罪悪感からどんな罰でも受け入れるという、一種の自傷行為にも思えた。

事実、一葉は既に限界だったのだ。

罪と言う十字架を背負い、闇の底で一人膝を抱えていた。誰にも言えない苦痛を独りで耐えていた。

アンリマユは幸せになってほしいと願い一葉をこの世界へと送った。

きっと彼女は純粹にそう思っていたのだろう。しかし、一葉にとってそれは罰に近かった。

戦いに染まつた魂に引き寄せられる心と平穩を望む今の肉体に執着しようとする心。

魔法と出会い相反する二つの均衡が崩れ出した今、自分の抱える秘密を誰かに言えるということはとてつもない救いであり支えだった。

「まったく…、お前はオレには過ぎた相棒だよ」

一葉は大きく息を吸い、込み上げてくる歡喜の涙を無理やり引っこめると先ほどまでの重苦しい空気とはまるで正反対の声色で笑いながら言った。

照れ隠しの意味もあるのだろう。心なしか頬が朱色に染まっていた。

「今頃気づきましたか。常日頃もっと私を大事にしないとバチがあたりますよ」

「おお、それは怖い。それじゃ明日のおやつはベヌウ様のお好きなものにいたしましょう」

「ならば、高町嬢の御実家のシュークリームを所望しましょう。
あれは実に美味だ」

「仰せのままに」

「うむ、苦しゅうない」

そんな小芝居が終わると吹き出したように一葉とベヌウはクスクスと笑いだした。

「ベヌウ、お前に会えてよかったよ」

「私もです。あどきに私の声が届いたのがあなたでよかった」

そこで一葉はベヌウの言葉に引っかかりを覚えた。

「そう言えば、俺を呼んだときの声。あれは念話じゃなかったのか？

何でなのには聞こえなかった？」

二日前の夕暮れ時、ベヌウの声は一葉にしか届かなかった。ユーノの念話はすっかりと受信していたのにも関わらずだ。

それにベヌウはあまり興味なさそうに答えた。

「ああ、あれは私に適正のあるものにはしか傍受できない設定にしていたのですよ。」

私を扱えない人間に拾われても転売されるのが関の山ですからね」

「適正？」

「はい、私とユニゾンできる資質とでも言いましようか。
だから一昨日の思念対の暴走の時も、一葉はユニゾン事故のことを懸念していましたが、あの時の私の声が聞こえた時点でそんな心配はいらなかったのですよ」

そう言えばそうだった。今にして思えばあの場でベヌウがギャンブルにでる必要もなかったし、そういう性格でもない。

ベヌウは一葉に似ている。

戦闘になれば冷静に解析して確実な勝利を拾うタイプだ。

「私を含めた四聖獣の適正を持っている人間は非常に稀なのです。事実、四聖獣を扱うものが王族特務になるのではなく、四聖獣が選んだものが王族特務になると言われるほどでしたから。しかし、適性のあつた王族特務は例外なくその名を歴史に刻んでいます。」

一葉も生まれた時代と国が違えば騎士として名を馳せていたでしよう」

「騎士とか興味ない。理想とか規則に雁字搦めされて堅っ苦しそう」

「否定はしませんが…、一葉には騎士になっていただきます」

「…、なぬ？」

突然のベヌウの言葉に一葉は眉をひそめた。

ベヌウはクチバシで机の上をコツンを叩くと、突如として小さな黒い光で描かれた陣が現れた。

正方形の中に重なり合うように円が描かれた陣の中には見たこともない文字がぎっしりと描かれており、その一つ一つが黒真珠のように妖艶な光を放っている。

一葉が見とれていると陣の中心に光の粒子が集まり小さなアクセサリーが現れた。

「これは、十字架…、いや、剣十字か」

それは何の装飾もなく、ただ一つの特徴として南の島のようなターコイズブルーの宝石が中心に埋め込まれている黒い金属でつくられた剣十字だった。

「これはアームデバイス、“アルデバラン”といます。レイジングハートのように人工知能は搭載されておりませんが、その代わり処理速度に特化しカートリッジシステムが搭載されています」

「カートリッジシステム？」

「はい、質量兵器である銃の装弾を想像してもらえれば解りやすいと思います。あらかじめデバイスに魔力を込めた弾を組み込んでおくのです。

それを使用することにより一時的にですが爆発的に戦闘能力を底上げすることができます。

アルデバランには三十発分のカートリッジを組み込むことができます」

「オレは魔法が使えないんだが…、」

「これから覚えていきましょう。なにせよ手札が多いにこしたことはありません」

「これを手にすると騎士になるのか？」

「呼称としてそうなるだけです。我々ベルカの魔法を使うものは総じて騎士と呼ばれる。」

実際、四聖獣の使い手で騎士道精神を持ち合わせているものなど長い歴史の中で一握り程度しかいませんでした」

戦場を駆け抜けるいじょう、誇りや矜持は思考と行動を狭める枷としかならない。特に聖王を守るべき立場の王族特務に必要なだったのは忠誠心ではなく力だった。

他の魔導士や騎士たちから一線を画した実力を持つ王族特務を聖王はさらに圧倒的な力で抑えていた。四聖獣の所有者でありながら隙あらば聖王の命を奪おうとしている者さえいたほどだ。

王族特務にとって騎士というものは所詮は称号であり、人としての在り方ではなかった。

「道を誤ったときは私が引き戻しますし、踏み外した時は私が叱ります。」

一葉、あなたにはあなたしか歩むことのできない道を進んでください」

「オレにしか進めない道…、か
お前もついてきてくれるんだろう？」

「当然です」

数瞬の迷いもなく即答する相棒に一葉は口元をほころばせた。

「…、ありがとう」

そうして一葉はアルデバランを、牡牛の心臓と名のついたデバイ

スを手を取った。

十六話目 疑念

初めて人が人を殺すのを見たのは三つの時だった。

感情が抜け落ちた仮面のような表情の女が、口元だけを歪ませながら顔にかかる返り血を拭いもせず、人に解体していた。

壊れたスプリングラーのように赤い液体を撒き散らす“ソレ”は、辺りを鼻につくような粘ついた死の匂いで満たし、まるでその一体だけが血の赤で彩られた異界を作り上げる。

影が縫いつけられたかのようにその場から動けなくなり、あまりの理不尽で人智を超えた殺戮に目を奪われた。

不意に女は自分の存在に気がついたのかこちらを見てきた。

視線と視線が絡み合う。

女と目があったときに恐怖は感じなかった。

ただこれで終わりなのだという諦観と絶望感だけが頭に叩き込まれ、自分が死ぬということに納得してしまった。

捕食者に睨まれた獲物が動けなくなるのは恐怖で足がすくむからではなく、殺す側と殺される側に明確に別けられた絶対的な壁が殺されることを理屈を抜きにして受け入れてしまうのだということを知った。

あの時、自分は笑っていたのだと思う。

涙を流すことよりも、命乞いをする事よりも、恐怖を感じる事よりも、この女に殺されるのが当たり前だと感じてしまった自分

がおかしくておかしくて仕方なかった。

しかし、女は自分を見逃した。

それは気まぐれだったのか、既に殺しを終えたことで腹が満たされたのか、おそらくそのどちらでもない。

ただ自分など眼中になどなかったのだ。

去り際にまるで埃を見るような眼で自分を見る目が印象的だった。

そして六年後、再び自分はその目を見ることになる。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

既に部屋の明かりが落とされているにもかかわらず、僅かに隙間の開いたカーテンから差し込む月明かりのせいでいやに部屋の中が明るく感じた。

青白い光がなのはの輪郭を映しだし、困惑に満ちたユーノを見据える碧い双眸をより美しく引きたてていた。

「ユーノくん、どういこと？」

「言葉の通りだよ。なのはは一葉が怖くないの？」

「それは…、」

なのはの声に力がなくなってくる。

確かに一葉はなのはに隠し事をしており、それがなのはにとって

未知の力のものだった。

未知が恐怖と言うのなら、魔法というファンタジーに足を踏み入ることがなければ彼の力に畏怖し、恐怖したかもしれない。

しかし、今はなのも魔法に出会い戦いも経験した。

ある程度の体制もついたはず何も関わらず、なのには怖くないと即答できなかった。

「思い返すと、一葉は最初から異常だった。

ジュエルシードの暴走体に迷いもなく突っ込んで行って、無傷で勝利を収めていた。

今日だって、なのはが戦っている間なにもせずただ見ていただけだった。まるで本当に、いざとなれば自分がどうにかできると言わんばかりに……」

「だって……、今日のは私たちが悪くて……！」

取り繕うように声を上げるなのはとは対照的にユーノは冷静だった。

何となくだが、なのはは一葉に依存している節がある。一葉に嫌われるのを極端に避けていた。

だからだろうか、一葉に感じる違和感を意図的に見ないようにしている。

「うん、それは僕も認めるよ。あれは弁解しようがないほど全面的に僕たちが悪かった。

けどあの時も一葉は、まるで自分が何度も戦場に立ったことのあるような言い方をしていたし何度も命のやり取りをしてきたってハッキリと言っていた。

それがこの世界の、この国の平均なの？

違うでしょ？

それにあの時の目は…、」

ユーノはそこまで言っ言葉を途切った。

思い返すのは六年前の出来事。姓がスクライアになる前、自分の血の繋がった肉親をただの肉塊に変えた女の目。

刃のように鋭く冷たい視線。自分のしていることが正しいと信じて疑わない濁った瞳。

今日、一葉がなのはに無能な仲間はいらないと言葉を切りつけた時にユーノは一葉の瞳を見て恐怖した。

一葉の瞳があまりにも、あの時の女と似ていたから。

「あれは奪うことに慣れた人の目だ…、」

それに、一葉の剣のことだって…、僕はあれをずっと魔法だと思っていた…」

「え…、違うの？」

なのはの頓狂な声にユーノは首を縦に振って肯定する。

「魔法を使うには心臓の奥にある“リンカーコア”っていう疑似器官が必要なんだ。そのリンカーコアが生み出す魔力の量がそのまま魔法の威力につながる人が多いんだけど…、僕の念話が聞き取れた一葉には強さは判らないけど間違いなくリンカーコアはある。

僕は、最初はあらかじめ術式を彫ってある鍼を転送起点にして別空間にある剣を呼びだしているものだと思っていた。実際にそういう使い手はいるし…、

でも今日、一葉が剣を出した時に魔力の循環は一切なかったんだ」

「それって…、」

なのはにはユーノの言っていることが半分も判らなかつたが、ただ一葉が今まで使っていたのは魔法の力ではないということと、まなのはたちに隠し事をしていてということだけは理解できた。

「一葉は魔法以外の何か別の力を持っているっていうことになる。昨日なのはの部屋で説明してくれた時も、ウソはついていないけど今思えば意図的に本当のことをはぐらかしていた気がする」

その言葉になのはの瞳が揺れる。
部屋には生温かい空気が漂っていた。

「彼はまだ僕たちに言っていないないかがある。それが何かかわからないけど…、一葉が言う戦場でそんな人に背中を預けられるほど僕たちは強くない」

ユーノの言うことは尤もだった。

遺跡の発掘という一瞬の油断が命取りになる現場も戦う相手が人か遺跡かと違うだけで同じ戦場だった。

一葉が言う無能な仲間も怖い、同時に信用のできない仲間も同じほどに怖い。

事実、ユーノも何度かそれで痛い目を見たことがあったからだ。

「僕はどうしても彼が信用できない…、だから…」

「きつと…」

ユーノの言葉を途中で遮つてなのはは言った。

擦り傷をこすられたかのように痛々しく力のない声だったが、ユーノが黙った静かな部屋には異様に大きく聞こえる。

「きつと…、一葉くんにも言えない理由があるんだよ…。
だから私は言ってくれるまで待つよ。
一葉くんから言ってくれるって信じてるから…、」

なのはの視線はユーノから自分の下半身を覆っているピンク色の
掛け布団に移っていた。

伏し目がちに濡れたまつ毛が月の日から反射してキラキラと光
っている。

なのはの頭の中で湧き出る一葉に対する疑念と友達を疑うという
背徳感と罪悪感が入り混じり渦巻いていた。

「なのは…、」

ユーノはなのはの反応を見てはじめて罪悪感を覚えた。

ユーノにしてみれば親切で言ったつもりだったのだ。それほど
までユーノの目には一葉が異常に見えた。

あの時の一葉の目を見たせいもある。あれは視界に入るものをこ
とごとく奪ってきた者の目だ。もし、なのはが一葉のそばにいて傷
つくことがあるばそれこそ自分の責任になるとユーノは思っていた。
だから忠告した。

ユーノには罪悪感があったが後悔はなかった。

「ユーノくん…、もう寝よう？」

「うん…、」

そうして二人は眠りにつく。

言葉にならない感情をその胸に抱えたまま。

十六話目 疑念（後書き）

話がまるで前に進まない…
いつになればフェイトを出せるのだろうか…

十七話目 信用

僕は彼を野生の獣を見るような目つきで見る。

なぜなら、それは期待と渴仰と、恐怖にも似た底しれないモノに縁どられていたから。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

灰色のコンクリートでつくられた高校の校舎は闇夜の月に反射して不気味に光っている。

結界によって外界と遮断された異界には色のついた霧がかかり、滾々と湧き出る泉のように空気に香りがあり、色があった。

熟れた果実が落ちるまでの、ゆったりと時間が進む風景の中で異物のように浮いているいくつかの影が動いている。

Stand by Ready

「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアルXX！ 封印！！」

なのはがレイジングハートを掲げ、封印式を叫ぶと天を衝くほどのおびただしい桃色の光が異界の空を割る。

同時にむき出しになった青い宝石はレイジングハートのコアへと吸い込まれていった。

「終わったか」

「なのは、お疲れ様」

ジュエルシードの封印が終わるとつい先ほどまで結界を維持するために離れていた場所にいたユーノがなのはの足にまとわりついてきた。

一葉もバリアジャケットを纏った状態のままなのはの元へと歩いてくる。

ベヌウからもらったアルデバランはなのはの祈禱型である杖状のレイジングハートと違い、青黒い槍の形をしている。

柄と刃が一体となったシンプルな造形ながら、その刃は突くだけでなく切ることも想定されたやや反りのある形をしており、振り回しやすいように細く軽い設計となっていた。

まるで光を当てた水晶のように鈍く光るそれはまさに紫電清霜という言葉がふさわしかった。

初めて一葉がアルデバランを発動させた時も、あまりに妖艶な輝きを放つそれに見惚れてしまったほどだ。

なのはもユーノもなのはも初めて見せた時は「綺麗…、」とだけ呟いてじっと見つめていた。

一葉のバリアジャケットは正式には騎士甲冑と呼ばれ、なのはのそれとは大きく異なる。

なのはのバリアジャケットは布を主にしたデザインだが、一葉の騎士甲冑は装甲を思わせるものだった。

しかし、今一葉が身に纏っている赤いラインの入った黒を基調とした甲冑は、鎧と呼べるものではなく、むしろ軽装具を彷彿させるものだ。

脛当てと左にだけ装備された籠手と手甲、そして心臓の部分と言

う必要最低限の箇所だけに黒い着物と包み袴の上から装着しただけという甲冑本来の防御力を捨てて、機動力を重視したものだ。

しかし唯一の白い部分である腰布はに刺繍された文字はベヌウの魔力が編みこまれており、詠唱も魔力循環もなしで強固な障壁をつくることができた。

そして目から下を覆い隠すようにつけられた牙を剥ける獣を模した面具は幼い一葉に不釣り合いなほどに似合っていた。

神社の一件からすでに一週間が過ぎており、今夜で五つのジューエルシードが封印された。

投げられた石のように過ぎた一週間の中でなのはと一葉は驚くほどに魔法の才能を開花させていった。

あれから戦闘らしい戦闘はなかったが、なのはは魔力の編みこみが早く正確になり、一葉は前世から引き継がれた知識と技術に魔法を惜しみなく組み込んでいった。

頭ではなく体に魔法を叩きこみ恐ろしい程の速度で成長していく二人にベヌウは戦慄を覚えるほどだった。

なのはと一葉はバリアジャケットを解除するとそのまま帰路につくことにする。

月明かりだけが生きているような夜だった。

規則的に並べられた人工の明かりは温かみはなく、ぼんやりと淡く光る月の下を薄っすらと映る影を踏みながら二人と一匹は歩いていた。

しかし、その足取りは対照的で一葉は既に定位置となった左肩にベヌウをとまらせ散歩帰りのような気楽な足取りなのだがなのはは腕をだらけさせて力なくフラフラと歩いている。

さすがに空気を呼んだユーノがなのはの肩に上らない程だ。

「な、なのは。大丈夫？」

足取りの安定しないなのはに踏まれないように注意深く足元を歩くユーノは心配するようになるのはに声をかけた。

「だいじょぶ、なんだけど…、ちよつと、疲れた…、」

それだけ言うとなのはは右足を自分の左足に引っ掛けるという器用なもつれかをする和一葉はとっさになのはの襟首を掴んでアスファルトに倒れこむことだけは阻止する。

しかし、その衝撃で襟に咽喉が占められたのか　ふうえ！　という奇怪な声を上げてむせてしまっていた。

「あ…、ゴメン」

「何でだろう…、転ぶところを助けてもらったのになんか釈然としないの…、」

ケホケホと何度か咳を出して咽喉を整えとなのはは涙で潤んだ瞳で視線を送った。

連日のジュエルシードの探索でなのはの体には疲労が蓄積されていた。

その毎日が人目につかないように深夜の時間帯に活動するため、当然睡眠時間は削られ慣れない魔法を駆使しながらいつ暴走するかわからないジュエルシードの封印を行っているから疲れるのは当然である。

また、一葉のアルデバランには封印術式が組み込まれていなかったために封印はなのは一人でやっている。

探索と周囲の警戒しかしていない一葉に比べたらその困憊具合は

比ではないはずだ。

それに関してはさすがに一葉にも後ろめたさがあった。

「とりあえず明日はゆっくり休ませるか……」

さすがになのはの疲労もここまでたまってしまえば体に触ってしまっ。

このままジュエルシードの探索を続ければ間違いなく身体を壊すだろう。

明日は日曜日なので都合もいい。

「僕も一葉の意見に賛成だな」

一葉の言葉に賛同したのはユーノだった。

「でも……」

なのはは逡巡するかのように一葉とユーノに弱気な視線をさまよわせた。

自分のせいでジュエルシードの探索に支障をきたすのが申し訳ないと思っっているのだろう。

「明日はお休み。もう五つも集めてもらったんだから、少しは休まないともたないよ。」

それに明日は約束があるんでしょ？」

「う、うん。そうだね。じゃあ明日はちょっとだけジュエルシード探し休憩ってことで」

明日は河川敷にあるサッカー場でなのは父である高町士郎が監督

兼オーナーを務めているサッカーチーム翠屋FCの試合があるのだ。それになのはとアリサ、さすがが応援は行くという約束をしていた。

「でも、一葉くんは明日本当に来ないの・・・？」

そう、一葉はその中に含まれて言いなかった。

なのはただでなくアリサとすずかもしつこく誘っていたのだが結局一葉が首を縦に振らなかった。

「サッカーとかキョーミないです。それにことあるごとに士郎さんがチームに引き込もうとするから正直メンドイ」

士郎はサッカーがよほど好きなのか、そのこととなると人が変わる。

一葉の身体能力は小学生の平均としては非常に高く、そのような原石を放っておくはずがなかった。

ことあるごとに一葉を誘っては桃子さんに窘められている場面なのははちよくちよく目撃している。

以前など一葉がなのはたちと翠屋に行ったときにポータブルDVDプレイヤーを持ってきて仕事そっこのけでサッカーの素晴らしさについて熱く語っていた。

「うう・・・、ごめんなさい」

今までの父の行動を思い出したなのはは身内の痴態に頬を赤らめてしまう。

もし、明日一葉がこのサッカー場に顔を出したらその場で服をひん剥かれた後にユニフォームに着替えさせて試合に強制参加ということになるかもしれない。

そしてその光景が不思議なほどにリアルに想像できる。

事実、明日の試合が決まってから土郎は直接的ではないにしろなのはに試合当日一葉くんを連れてきて欲しいなく、みたいなことを言っていた。

「まあ、そんな訳でオレは明日図書館にでも行つてまったり過ぐすよ」

それからは取り留めのない話を小さな声で続けながら、冷たく固い舗装された夜道を歩いていった。

深夜に小学生が歩いていることは見つかる大変にマズイことになるので人気のない細い路地を進み海鳴公園を目指す。

「ほいじゃ、ベヌウ。後は頼んだぞ」

「ええ、一葉も気をつけて」

海鳴公園の入り口にまでつくると二人は中に入らずに、一度立ち止まるとベヌウは本来の大きなサイズに戻った。

ここ一週間で二人の家の分岐点に当たる公園の入り口につくとベヌウがなのはを乗せて飛んで変えるということが半ば恒例化していた。

念のために認識阻害の魔法を使うがベヌウの黒い羽毛は夜の闇に溶けると視認が困難になる。

ベヌウは自分の背になのはとユーノが乗ったことを確認すると翼を大きく広げて風を起こしながら夜天へと舞っていった。

なのはは冷たい風が顔に当たるのを感じながらベヌウの羽毛しが

みついていた。

間近で見るとベヌウの羽毛は純粹な黒ではなく様々な色が混じり合っており、月の光に反射してキラキラと妖艶な輝きを放っている。最初の方こそ少しばかり怖かったが慣れてしまつと夜の空の散歩は非常に心地の良いものになっていった。

上を見上げれば普段見るよりも遙かに近い月と、下を見れば家の一つ一つが彩る光のイルミネーションが見える。

いつも地面を這っていれば目にする事など永劫にかなわなかったであろう鳥の視点を知ることができた。

「お二人とも、一葉が怖いですか？」

不意に響いたベヌウの声になのはとユーのは大げさに反応した。

それは念話ではないというのに、風を切るおとが混じる中異様にはっきりと聞こえた。

「確かに一葉は異常かもしれませんが。しかし、高町嬢。

一葉と過ごした時間は私よりもあなたの方が遙かに長い。

たとえ魔法を知ったとしても一葉は一葉です。

あなたと常に共にあった少年そのものなのですよ」

なのはは顔が熱くなるのを感じた。

先週の神社の一件の以降、なのははなんとなくだが距離を置いていた自覚があった。

それをベヌウに気付かれていたということはおそらく一葉も気づいているのだろう。

ユーノに言われたことが起因しているとはいえ、ベヌウに言われて一葉を少しでも疑っていた自分が恥ずかしくなったのだ。

「だけど……彼は」

ユーノも思うところがあつたのだらう。しかし弁解しようと思つて口を開いたところをベヌウに遮られた。

「言いたいことはあるかもしれませんが、これから共に闘う者同士です。」

信用しろとは言いません。しかし信頼はして欲しい。

何より、一葉はあなたたち二人が傷つくのを極端に嫌がつている」

私も嫉妬してしまうほどです…、と二人の耳に微かに届く程度の小さな声で付け足した。

「ベヌウさん…、一葉くんの力つてなんなの…？」

ユーノくんは最初、転位魔法の応用つて思つてたらしいけど…、」

「それは私の口から言えることではありません。しかし、いつになるかは判りませんが一葉自身の口から語られる時が来るでしょう。一葉ももう自分が一人ではないとようやく気付き始めたところですよ。」

長い目で見守つてやってください」

「う…、うん」

なのは力なく返事をした。

魔法に出会つてから初めて知る、自分の知らない一葉になのはは戸惑つていた。

気がつけばベヌウは高町家のすぐ上にまで来ていた。

ベヌウは風を切り急下降すると、なのはの部屋の窓に一番近い屋根に下りる。

瓦にベヌウの爪が当たり、深夜の静寂に包まれた庭にカツンと乾いた音が響いた。

「それでは高町嬢、よい夢を」

「うん、ありがとう。おやすみなさい」

ベヌウはなのはが窓を開けて部屋の中に入るのを確認すると再び翼を広げて、僅かに欠けた月を指して飛び立っていった。

「信用はしなくてもいい…、言われちゃったね…、」

「なのは…、」

なのはは月の光に溶けるように消えていくベヌウを見送りながらぼつりと呟いた。

十七話目 信用（後書き）

アクセス数が五万を超えました！
たくさんの人が目を通してくれてるようですね！
うれしい限りです！

十八話目 距離

雲一つない空だった。

降りしきる太陽の鬘が煌々と新芽のはえた木々を照らし、咲き始めた木蓮の香りがイチョウの並木道にいっぱい漂っている。

重なり合う扇形の葉々の隙間から木漏れる光を梯子を身に受けながら一葉とベヌウは図書館へと至る道中にいた。

まだ五月だというのに、その日の気温は初夏のもので一葉は無地の黒いTシャツにダメージジーンズというラフな出で立ちに何冊かの本の入ったシオルダーバッグを肩に下げている。いつものようにベヌウは一葉の左肩に留まっていた。

時間はまだ昼前で、おそらく今頃なのはたちが応援に行っている翠屋FCの試合が行われている頃だろう。

当初の予定では一葉は今頃、借りた本を返した後に冷房の効いた図書館で読書を楽しんでいるはずだった。

しかし、今現在一葉とベヌウは困惑の渦にいた。

『どっつする・・・？』

『どっつしましょう・・・』

「あ！今また喋らんかったか！？」

二人の目の前にはどう言っわけか念話を聞くことができる車椅子の少女がいた。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

『高町嬢はともかく、ユーノは完全に一葉を疑っていますね』

『まあ、無理がないわな』

一葉とベヌウは朝起きて、しばらくしてから図書館を目指して家を出た。

海鳴市の東に位置する図書館は海沿いに建てられており、一葉の家から徒歩でそう遠くはない距離にあった。

道沿いに植えられたイチヨウのトンネルを抜けると古い洋館を思わせるような大きな建物が見えてくる。

それが海鳴市にある唯一で最大の図書館だった。

何年前かに、市にある小さな図書館を一つに統合してたてられたものだと聞いている。

建物の周りには何本かの木蓮の低木が植えられており、少し離れたイチヨウの並木道にまで柔らかい香りが風に乗って匂ってくる。

今日は一日ジュエルシードの探索が休みになったので一葉はここ最近行くことのできなかつた図書館へと足を延ばすことにした。

以前に図書館に訪れた時に借りた本は返済期間が間近に迫っており、早めに返さなければならなかったので今日の休息は一葉にとっても都合のよいものだった。

一葉が肩に下げている黒いショルダーバッグは去年の誕生日にすずかから貰ったもので、詳しくは知らないが海外の有名ブランドのものらしい。

ポケットが多く付いており見た目よりも多くモノが入る機能性に優れたもので、既定のモノを使用しなければならぬ学校を除いて

普段一葉が愛用しているものだ。

『魔法っていう力が固定観念化された世界から来たんだ。その他の力を当然のように扱う者がいたら誰だって良い感情は持たないさ』

『まあ、私もそうでしたから…、ユーノのことを強く批判できないんですがね…』

一葉はここ最近、なのはとユーノに距離を置かれていることに気がついていた。

注意しなければわからない程のものだが、距離を取っているくせにチラチラと一葉の横顔を見てきたり話しかけようとして躊躇ったりと遠回しにジリジリとした焦燥感が一葉の中に燻ぶっていった。

なのはとユーノが聞きたいことは判っている。

それは一葉の剣のことだ。

魔力を介さないで発動させる一葉の能力は、ユーノの目から見たら異質で異端なのだろう。そしてそのことをなのはに伝えたことが容易に想像できる。

『いつか二人に一葉のことを話すときはくるのですか…？』

『どうだろうな…』

生温かな風が吹くたびにひらひらと揺れながらゆつくりと舞い落ちるイチヨウの葉を見ながらベヌウの質問に眼を細めながら答えた。いつか、もしかしたら誰かに話すことにならなければいけない時が来るかもしれない。その覚悟はしていたつもりだった。

しかし、それは今ではない。

魔法と出会ったことでベヌウと言う相棒には話したが、今自分の周りにいる人たちには子供の戯言としか受け取って貰えないだろう。

し、一番近しいと思われる位置にいるのはとユーノに話すにしても二人はまだ幼すぎる。

一葉の陰惨な経歴を受け入れることなど到底できないだろう。

『結局おれは臆病ものなんだよ…。正直、嫌われるのが怖い…』

それは今にも消えてしまいそうなほど薄くて透明な声だった。

牙を起して爪を砥ぎ、肉を千切って血に塗れていた過去の自分の願い。

忘れようとして、死んでも目をそらしてはいけないのに見て見ぬ振りをし続けていたモノ。

なのに最期の最期に求めてしまった願い。

誰かに受け入れてもらいたい。

醜い自分を仲間にしてもらいたい。

優しく美しい人たちと共に在りたい。

その全てが叶ってしまった今、一葉はそれを壊すことを極端に恐れていた。

『一葉…、』

ベヌウは一葉の横顔を盗み見た。それはドキリとするほど儂い、寂しい目で前を見据えていた。

不意に一葉の背に氷を這わせたかのような悪寒が走った。

殺意や殺気という物騒なものではない。

しかし、突然に泡だつた鳥肌と直感的ともいえる嫌な感じは一葉を反射的に動かすには十分な理由だった。

肩に下げている鞆を抱えてとっさに道の右側に飛ぶ。

ベヌウはなにも感じなかったのだろう。一葉の突然の行動に驚きながら翼を広げて崩れた体勢を立て直した。

そして一葉が側道にたつた瞬間に、今まで一葉があるいていた場所に風を切る音を立てるほどのスピードを出した車椅子が通過していった。

「チイイ・・・外してもうたか!!」

アスファルトを焦がすようなドリフトをしながらブレーキをかける軽い関西の訛りのアクセントが入った少女が電動の車椅子を操作しながら心底悔しそうに言った。

年の頃は一葉と同じだろうか、肩で切りそろえられたセミロングの茶色い髪と、こぼれんばかりの大粒の瞳を持った少女だった。

「アホか！外してなかったら死ぬわ!!」

「なにゆうてんのや、人間ちよつとやさつとじゃ死にはせんわ！」

どこからくるのか解らない自信を満ち満ちと発した少女は太陽の光を一心に受けたひまわりのような笑顔を作つてそう言った。

「まあ、それはそうと久しぶりやないッチー。今までなにしてたん？」

「イッチー呼ぶないってんだらうが小狸」

まるで何事もなかったかのように電動の車椅子を左の肘掛けに付属された操作スティックで巧みに操りながら、モーターの駆動音をたててゆっくりと近づいてくる。

少女の膝には無地でクリーム色の布がかけられており、それが長い間足が動かないことを示していた。

「こないな美少女つかまえて誰が小狸や、誰が」

少女は腿の上に置いてあった淡い黄色の花の刺繍がされた手提げカバンをばしばしと一葉にぶつける。

中には何冊かの本が入れられており、おそらくその全てがハードカバーなのだろう。ところどころ角が当たり地味に痛く一葉は顔をしかめた。

「お前だ、お前。と言うか自分で美少女とか言うな」

一葉はぶつけられていたカバンを奪うと、それを当たり前のように肩にかけて、そのまま図書館に向けて再び足を進めた。

少女の方も、恒例なのかカバンを取られたことに対して何も言わずに車椅子を操作して一葉と並列して進みだした。

その一連の動作があまりに自然で、あまりに当たり前すぎてベヌウは驚いていた。

一葉は常に人と一線を置いている。

踏み込みすぎず、慣れ合えず、何かあったときはいつでも逃げ出せるような立ち位置を確保していた。

それはみんなと違うという劣等感からか、それとも誰にも言えない秘密を持っているが故の背徳感からか、それとも別の理由からかはわからない。

魔法やジュエルシードのこともあり最近になりなのはとの距離が変化し始めたが、一葉にとって人との距離の置き方を変えたのはそれが初めてだとベヌウは思っていた。

しかし、今日の前にいる車椅子に乗った少女は一葉との間にまるで壁や、距離を感じないものだった。

「なんや、えらい可愛らしい鳥さんつれとるなあ。どうしたん？」

「怪我してるとこ拾った」

内容など在于てないようなとりとめのない話を続けていると少女は一葉の肩にとまっているベヌウに視線を送りながら聞いてきた。

「綺麗な鳥さんやね。なんて種類なん？」

「知らね。図鑑にも載ってなかったから突然変異種だと勝手に思い込むことにした」

「なんやん、それ」

一葉のはぐらかしたような言いかたを気にも留めずに少女はカラカラと笑っていた。

『一葉、こちらの少女は？』

少女と一葉の間に流れる穏やかな雰囲気の中、ベヌウは一葉に念話で聞いた。

一葉はそれに応えようとした瞬間、あまりにも予想外な出来事が起きた。

「ああ、私の名前は八神はやて、いづんよ」

「は？」

『え？』

「…ん？」

時間がとまった気がした。

十九話目 同志

私は彼の気持ちを知らない

私は彼の想いを知らない

私は彼のことを何も知らない

だけど、私と彼は同志だと思った。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

「唐突ですが、魔法使いになりました」

「バカにしとんのか、ケンカ売つとんのかどっちなんか聞いてもええか？」

はやては腕を組みながら額に青筋の血管を浮かべていた。

今、一葉とはやてがいるのは図書館の表玄関の前にある広場だった。

広場と言っても大げさなものではなく、どこぞの有名な空間デザイナーがデザインした幾何学的なモニュメントを中心としてベンチとジュースの自動販売機がいくつか置いてある程度のものだ。

モダンな石畳の上に置かれた塗装の剥げたベンチで何故か一葉は正座を強要されていた。

目の前には電動の車椅子に座り、ちゃっかりと膝の上にベヌウを

置いた不機嫌さを隠しもしないはやてがいる。

『あの…、八神嬢…』

「ベヌウは黙ったとき。あと私のことははやてでええから」

背筋が震えるほどの冷やややかな視線を一葉に送ったまま不吉なほどに冷淡な声ではやてはベヌウの念話を遮った。

その声にベヌウはいつぞやのなほを思い出して黙り込んでしまった。

一葉は一葉で恐怖に体がこわばり、冷たい汗が滲んでくる。はやてから必死になって目を逸らそうとするが、どこまでも見透かすような視線はじつと一葉を射抜いていた。

やばい…、本気で怖い…。一葉は泣きそうだった。

「まあ、ええわ…」

そう言っではやてがため息をつくときと張りつめた糸が切れたかのようにはやてと一葉の間にあった空気が和らいだ。

どうしたのだらうと不思議に思い一葉が顔を上げると、眉間にしわを寄せながら人差し指を額につけていかにも何かを考えているような格好のはやてが目に入った。

「とりあえず、百歩譲ってイッチーが魔法使いになったってことでええ。それで、どうなん？」

「どうなん…、とは？」

一葉ははやての不機嫌を伺うように言葉を探り探り聞いた。

ベヌウはそのような一葉を見て何とも複雑な気分になる。

普段の一葉は集団から一步下がって冷静に状況を見ており、精神年齢が周囲よりも遙かに高いためみんなが一葉を頼ってくる。いつもはアリサ、すずか、なのはと共に行動しているが、クラスの行事などは実質一葉が中心になって行われることが多々ある。

その一葉が九歳の女の子に、弱みでも握られているのかと勘ぐってしまふほどに頭が上がらないことがベヌウを何とも微妙な気持ちにさせたのだ。

「変に危険なことに首をつつこんどらんのかと聞いとるんや」

「いいや、そのようなことは全くございませんが」

はやての質問に一葉とベヌウは内心では大げさに反応していた。ジュエルシードのことなど知らないはずなのになぜ解つたのだろうかという疑念を腹の内に溜めながらも一葉は表情に出さずにシレッとした顔で嘘をついた。

「嘘やろ」

逡巡のためのもなく、確信的な声に今度こそ一葉の動揺は顔にでた。

瞳が揺らぎ、口が半開きになつた啞然としたような表情の一葉を見てはやては大げさにため息をつきながら呆れたような口調で言葉を続けた。

「あんな、イッチー……」

イッチーが嘘つくとき、眼をそらす癖があんの私が知らんども思つとつたんか？

もう一年以上の付き合いになんねんで……」

はやてが、この一葉の癖に気がついたのは出会って間もないころだった。

一年とちよつと前になる、まだ木蓮の花が咲いていない季節、はやては足のことがあり、小学校は休学扱いとなっている。義務としていかなければならないのは病院だけだ。

友達もおらず、家族もいないはやてにとっては本だけが唯一の娯楽ともいえた。

本の中だけは自分も誰よりも早く駆けることができ、世界中を旅し、空さえ飛べた。誰かと恋に落ち、幸せになれた。魔法だって使えたとし、怪獣だって素手で倒せた。

文字を通して知る世界を、はやては自分に置き換えて妄想に耽るのが何よりも楽しかったのだ。

そんなはやてにとって多くの知識と物語が詰め込まれた図書館はこの上ない遊び場だった。

開館時間に訪れては閉館の時間まで自分の世界に浸る毎日が続いていた。

それが変わったのは窓から差し込む夕日が蜂蜜を垂れ流したかのような黄金色に染まる黄昏の日だった。

車椅子であるはやては本棚の高い場所に置かれている本が取れない。いつもならば司書の人に頼むのだが、その時はどういふ訳か不在で周りにも人影がなかったため諦めようと戻ろうとした時、不意に後ろから声をかけられた。

幼い声には不釣り合いなほどに抑制のない声に振り向くとそこには日本人の平均である黒髪の少年がたっていた。

顔立ちは整ってはいるものの、鶯色の瞳はややつり上がっており、いわゆるイケ面と言うものではなかったがさっぱりとした中性的な顔立ちをしている。

身長も特別高いわけではないがこれと言って低いわけでもない。つまりどこにでもいそうな普通の小学生だ。

しかし、何故か理由は判らないがはやてにはその少年が普通には見えなかった。

はやてはその少年と初めて会う。

はやてはその少年の名前を知らない。

はやてはその少年が何を考えているのか知らない。

はやてはその少年のことを何も知らない。

しかし、何故かはやてはその少年が仲間だと思った。

運命があるというのならば信じよう。

神がいるというのならば感謝しよう。

はやては足のつま先から髪の毛の先までに電気が走るような感覚にはやては確信めいたものを感じた。

その少年もまた、孤独なのだ。

それからはやては図書館で一葉を見かける度に声をかけるようになった。

最初は壊れやすいガラス細工に触れるようなおそろおそろといったものだったが、一葉相手に遠慮を感じなくなるまでそう時間はかからなかった。

気がつけばはやてにとって一番は本ではなくて、一葉と過ごす時

間となっていた。

初めての、唯一の友達の小さな仕草や癖は直ぐに気がついた。

一葉が両利きであることも、動揺すると直ぐに瞳が揺れることも、そして嘘をつくときに人の目を見れなくなることもだ。

はやてにとつて一葉は抛り所だった。

一葉と話すだけで柔らかな、温かなものが、心を満たしていく。
一葉が語る言葉だけで、心に光が光が溢れた。

だからこそはやては最後の一步を踏み出すことを躊躇っていた。

はやてが共感した一葉の中にある孤独。

鴉のように闇に同化し、冷たい心臓を抱いて物影でじつと息を潜めて隠している底の知れない何かに触れることを。

はやてにとつて一葉と共に在るのは心地が良すぎた。

そして同時に一葉に嫌われることを、失うことを極端に恐れていた。

今回のこともはぐらかそうとしたところを見ると本当にははやてには教えるつもりはなかったことが伺える。

それはとても寂しいことだが、踏み込むことができなかった。

「なにやっとなるんかは知らんし、聞きません。

聞いたところで巻き込みたくない言うて教えてくれへんやろしな。せやけど、もう少しだけ私を頼って欲しかったわ・・・」

時期の過ぎた沈丁花のように急にしおれてしまったはやてのは濡れたまつげを伏せた。

「本当にどうしようもなくなったらはやてに頼るよ」

一葉は取り繕うではなく、真摯な言葉ではやてに言つと、はやては顔を上げて一葉の表情を眉をひそめながら訝しげに見つめる。

「まあ、ええわ。その時は私がどーんと受け止めたる」

「おお、よろしく頼む」

はやては内心では嬉しく思いながらも、どこか呆れたかのようなため息をつきながら唇を微かに吊り上げて柔和な笑みを作ると二人の間に穏やかな空気が流れる。

普段と変わらない雰囲気に心が緩み、初夏の青臭い風が吹くこの場所でこのままとりとめのない話しを続けたいという怪しい気持ちになる。

しかし、そうは問屋がおろさない。

「誰が足崩してええ言つた？」

雰囲気に流されてそのまま足を崩そうとした一葉にびしゃりとはやては言い放った。

そろそろ足が限界に近いにもかかわらずはやては一葉に正座を崩すことを許さなかった。

「とりあえず、そのまま魔法についての説明をしてもらおうか？」

一葉とベヌウの背筋が凍るほどに素敵な笑顔ではやては言った。

十九話目 同志（後書き）

文章力や内容の向上のために感想など頂けたら幸いです。

二十話目 偽善

深い孤独の海に漂う彼女の心は

群れ方を知らない鯨を思い起こさせる

濁りのない清んだ瞳は

彼女はまだ真に求めるモノを教えてくれる

自分と彼女は同志だ

しかし決して同類ではない

魔法少女リリカルなのは Broken beast

『感じのよい少女でしたね』

『お前にとつてはな、こん畜生…』

はやてが午後から病院で検査があるからと言って別れた後、一葉は電気が走っているかのように痺れる足を引きずりながら図書館のカウンターに本を返して直ぐに翠屋へ向かった。

本来ならば図書館で本を読む予定だったのだが図書館の表玄関はガラス張りになっておりカウンターから一葉がはやてに正座をさせている姿が丸見えだったらしく、司書のお姉さんに何かを含んだような笑顔で対応されて居た堪れなくなつて直ぐに出てきたのである。

この時間帯ならば既にサッカーの試合を終わっているだろうというところでとりあえず翠屋へと向かうことにしたのだ。

『何でお前ら初対面であんなに仲良くなってるんだよ…』

『何か運命的なものを感じました』

そう、魔法に関する応答は全てベヌウが行った。

その間一葉は真綿に水が染みるように足の感覚がなくなっていくのを背中に冷たい汗を泡立たせながら耐え忍んでいた。

ベヌウはジュエルシードについては掻い摘んだ説明だけで終わらせ、青い宝石を見つけたら危険なので直ぐに知らせたいということだけ伝えた。

むしろはやてが興味を持ったのは自分にも魔法の才能があるということだった。

魔法の力で何ができて、どこまでが限界なのかを根掘り葉掘り聞いていたのだが、何か通じるものがあったのだろうか。

はやてとベヌウがいつの間にかやたらと仲良くなっていた。

結局、はやてが病院へと行かなければいけない時間帯になるまで一葉は正座の姿勢を強要され、話中に夢中になっていたベヌウも一葉の現状を完全に忘れてしまっていたのだ。

『しかし、はやてもまた恐ろしいまでの魔力を有していますね。

この星…、と言つか街には強力な魔導士を育む成分でも彷徨しているんですか？』

『その理屈でいくと、海鳴の住民十五万人は全て魔導士ということになるが』

『…、失礼。失言でした』

ベヌウはこの町の人間総てが魔導士と言う仮定を想像したところ、かつてのベルカのような戦争ばかりの世界になることしか想像できなかった。

『それはそうと、はやての言葉…』

『ああ…』

心なしか二人の声に影がさす。

思い出すのははやてが別れ際にぼつりとつぶやいた言葉だ。

——魔法で家族はつくれへんのかな…？

掴めば消えてしまいそうな霞みのように儚く寂しげな声だった。はやての口から不意に零れおちた一言には悲しみに…、いや、哀しみに溢れていた。

『はやてに家族は…？』

『知らない。あいつの家族構成を聞いたことがない』

一葉ははやてのことをよく知らなかった。

名前が八神はやてで、自分と同じ年で、足が不自由で、本が好きで、そして普通に生きている人間には到底理解しようのないどこまでも底のない孤独を抱えている少女。

はやては自分のことを話さない。話したがらない。

その理由は判らないが、あえて一葉は無理に聞くことはしなかった。

『だが、普通に考えて足の不自由な子供に家族がおらんことはないと思うが…、仮にそうだとしても周りの大人が放っておくはずがないしな』

かつて一度だけ、一葉ははやてを家にまで送ったことがある。

住宅街の一等地に建てられたバリアフリーの立派な二階建ての家の表札には八神と掲げられておりとても小学生が一人で済むような家ではない。

『しかし、あの時のはやての目は…、』

一葉に似ていた。

初めてベヌウが一葉と出会った夜、ジュエルシードの思念体が暴走して一葉が止めた時に自分はおかしいと夜天を仰ぎながら嘆いていた時とドキリとするほどに同じ瞳をしていた。

痛みも辛さも通り越して苦しみと寂しさだけが残ってしまった、行き場を見失った渡り鳥のような哀しい瞳。

触れることも、理解することさえもできない深い闇を抱える者の瞳。

『オレはさ…、』

ベヌウの言葉を遮るように一葉は念話で声を発した。

『初めてはやてに会った時、オレに似てるなって思ったんだ』

はやてと初めて会った時、初めてはやての瞳を見た時に一葉は胸を衝くような衝動に駆られた。

誰とも群れず、誰とも混じり合うことのない、自らの命を断つこ

とで仮面をつけた獣である人生を終わらせた自分に限りなく近いものを感じたからだ。

『だけど、あいつは違う。まだ戻れる場所にいる』

はやてはまだ戻れる。引き返せる場所にいる。殺すことで拒絶するしかできなかった自分が至ることのできなかった場所以外にたどり着ける可能性がある。

『オレとはやては似てるかもしれないけど同類や同族じゃない。絶対にだ』

だからどうにかしたいと思った。

それが同情なのか憐憫なのか一葉自身にも判らなかった。しかし、愛されようともがいている少女の孤独と寂しさを、ほんの少しでも和らげてあげたかった。

それが傲慢だと言うことはわかっている。

しかし、まだ十にも満たない少女が仮面をつけて道化を演じていることがあまりにも哀れで、許せなくて、かつての一葉に悲しいほどに酷似していた。

それでも、一葉とはやては似ているけど違う。

伽藍の心だった一葉とは違い、はやての胸の奥には、まだ大切なものが眠っているはずなのだから。

一葉の言葉を聞き、一葉の心の内を察したベヌウは憂いを帯びた視線で一葉を見た。

『私はかつて一葉に、あなたは優しい人だといったことがありますが、あれは訂正しましょう。』

一葉、あなたは優しすぎる・・・、いつかあなた自身の身を滅ぼすほどに』

ベヌウの言葉に一葉は困ったような瞳をした後、曖昧に微笑んだ。

『俺のは優しさなんかじゃないよ。偽善と陶酔だ。

弱った奴に手を差し伸べていい人を演じていただけさ』

『それでも決して悪ではないでしょう？

一葉が共にいることではやての孤独は和らいでいる。

見えない善よりも、見える偽善の方がよほど人の心を救うことができる』

はやては一葉に思いを寄せている。

幼少期をすぎて男女の違いを意識し始める年頃で、足が不自由なことを気にもせず接してくれる少年。

一葉自信がそれを意識しなくても、はやてからしてみれば白馬に乗った王子様以外の何者でもないことは僅かな時間しか接していないベヌウにもわかった。

実際に、はやてとはなしているときの内容は全てが一葉に関係すること、はにかむような笑みからこぼれ落ちるそれは共通の知り合いを話題に出すという分を遙かに越えていた。

『一葉は今、一葉自信が無理だと言っていた“誰かを救う”ということができるではないですか。

あなたは間違はなくはやてが孤独から飛び出す翼に、悲しみを弾く盾になっている。

私としてはこのこと以上に嬉しいことはない』

西に傾き始めたばかりの高い太陽を見上げて言った。

そこには悩みなど一つもないような晴れ晴れとした、突き抜けるような蒼穹が広がっている。

しかし、悩みや葛藤がない生き物などこの世界に一つとしていない。

全ての鳥本草獣が明日を生きるために必死なのだ。

しかし、その苦しみを、悲しみを、しがらみを、巻き付けられた鎖の重みをほんの少しでも分けあうことができるのならそれはどんなに尊いことなのだろうか。

所詮は機械であるベヌウにとってはやてと一葉のやりとりはなにより妬ましく、羨ましく、そしてなにより美しいものだった。

そしてそれ以上に嬉しくもあつたのだ。

なのはとは違う、同じ痛みと悲しみを知るものが、背負うものが、理解できることが自分の哀しい主の近くにいることに我が身のように腹の底からこみ上げる喜びを感じた。

『何というか・・・、お似合いですよ。お二人は』

ベヌウがからかうように言った言葉に一葉は拍子が抜けたようなため息をついた。

『アホかお前は...、小学生のガキンちょ相手にお似合いだと言われても嬉しくとも何ともないわ』

言葉の通り、一葉の肉体は九歳でも精神年齢は二十七歳なのだ。いくら肉体に精神年齢が引っ張られているといっても十八も年下の

少女とお似合いだと言われても気が滅入るだけだ。

『しかし、十年後とかはどうでしょうか？』

『はやくは将来有望だと思いますよ？』

『…、なんでお前はそんなにはやくを推すんだよ？』

『先ほども言ったでしょう。運命的なものを感じた、と』

『それはお前の運命であってオレの運命ではないな？』

ベヌウのいう運命的なものとは後になってわかることなのだが、そのようなことを知る由のない一葉は柔らかな風が踊る商店街をベヌウと軽口をたたき合いながら翠屋を目指して歩いた。

しかし、花が落ちる前のような緩やかな時間は唐突に終わることになる。

「オイ…、」

『判っています。ジュエルシールドが発動したのでしょう』

突然に巻き起こった強大な魔力の奔流。

それを感じ取った一葉は、首から下げた剣十字を手にアスファルトを強く蹴った。

二十話目 偽善（後書き）

最近知ったこと。

サンマってメダカの仲間なんだって！

二十一話目 砲撃魔法

「これはまた、なんとも…」

「確か前に見た映画で似たようなものがあつたな…、タヌキが主役の奴」

一葉とベヌウの眼前に広がる景色は、さながら都会のマンガローブとでも言うべきなのだろうか。

突如として現れた街を覆う森は、ビルを飲み込みアスファルトを砕き、微かな風に揺れる緑の葉々はざらざらと音をたて何かの嗟い声のように不気味に木霊していた。

まるで現実と夢の境界のような浮遊感が海鳴市に広がっている。

「とりあえずなのはたちと合流するか…」

「先ほど探索をかけてので既に場所の見当は付いています」

いうや否やベヌウは翼を広げて元の体の大きさに戻る。

突然の行動に一葉は眼を剥けて、声を荒げた。

「バツ…！お前…！」

「人目ならば気にしなくても大丈夫です。既にここ一体に結界が敷かれています。」

解かれた後にこの惨状がどのような影響が残るかは判りませんが、結界内ならば魔法を介して行動する私たちは認識できないし、干渉もできません」

対照的に冷静に告げるベヌウの声に一葉は改めて辺りを見回すと、まだ日が傾き始めたばかりの時間帯の商店街だというのに人気がないどころか時間の流れすらも停滞しているようにも思える。

今までもジュエルシードが発生した時は自動的に結界が張られていたが、それが街を一つ覆うことすら可能だということに一葉は背に冷たい汗が流れるのを感じた。

「今までの暴走とは質が違うな…」

「ええ、湧き出る魔力の量もケタ違いです。もしこれが本能のままに暴れていたと思うとぞっとしますね」

空いっぱいに広がり影を落とす樹木を見上げてベヌウは言った。

木とは本来、長い時間をかけて成長するモノだ。

それは動物と植物の時間の概念が違うからともいわれているが、ほんの僅かな時間の間にこのような森を形成できることは信じられない脅威だった。

「ロストロギア、ジュエルシード。私が思っていたよりもはるかに危険なものですね」

「地球温暖化とか一発で解決できそうだしな」

一葉は吐き出すようにぽつりと呟くと呟くとベヌウの背に捕まり剣十字に魔力を通した。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

「ひどい…」

白いバリアジャケットに身を包んだのはは唾然としていた。

魔力の奔流を感じ取り、街を見渡す為の高町家の近くにある比較的高いマンションの屋上に上るとそこに広がるのはあり得ない光景。

ジュエルシードの暴走で現れた木々は瞬く間に街を飲み込み、異界のような不気味な存在感を惜しげもなく前面に押し出している。

今はまだ結界が張られているために誰も気が付いていないが、解かれた後にどれほどの被害が出るのか考えたくもなかった。

「多分人間が発動させちゃったんだ。強い想いを持った者が願いを込めて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから」

ユーノの言葉になのはの脳裏には一人の少年の姿がよぎった。

翠屋FCの試合でゴールキーパーのポジションにいた、白いジャージの男の子。

微かな違和感。それこそ咽喉の奥に小骨が引っ掛かった程度のモノに過ぎなかったが、彼のジャージのポケットの中から極微量な魔力の流れを感じた気がしていた。

そこに思い当って、なのはの中に堰を切ったダムのように後悔の波が押し寄せた。

気づいていたはずなのに、こんなことになる前に止められたかもしれないのという悔恨の蛇がなのはの心臓を締め付ける。

「つまり、あの中には核となる人間が取り込まれているってわけか」

「ふえ！？」

突然後ろから聞こえた声に驚いたのはは情けない声を上げてしまつ。

反射的に振り向くと、そこには既に黒い騎士甲冑を纏った一葉とベヌウがいた。

「消し炭にすれば簡単だと思っただけなのですが、どうやらそうもいかないみたいですね」

「中の人間まで炭化しそつだしなあ」

何やら物騒なことを当たり前のように口に行っている一葉とベヌウはなのはの横に立ち、ユーノに助言を求めることにした。

「ということ、ユーノ先生。どうしたらいいでしょうか？」

「え？あ…、うん」

飄々とした口調で獣の面付きの下で不敵な笑みをつくる一葉に呆気にとられながらもユーノは口を開いた。

「封印するには接近しないとダメだ。まずは元となっている部分を見つけないと。」

でも、これだけ広い範囲に広がっちゃうとどうやって探しているか…、」

徐々に尻すぼみになっていくユーノの言葉は戸惑に満ちていた。町全体に張り巡らされた根からはおびただしい量の魔力があふれ出ており、さらにその中から核を探し出さなければいけないのだ。例えるならば、それは夜の海に放り出された針を見つけるようなものだ。

探索に優れた魔導士ならばできるかもしれないが、一葉は魔法初心者であり、ベヌウもまた戦闘に特化したデバイスであるために探索魔法に関しては標準の域を出ない。

しかし手が無いという訳でもなかった。

最悪、手間はかかるが一葉が前線に出て核にぶち当たるまで手当たり次第に樹木を切っていけばいいだけだし、ベヌウの炎を加減して魔力が一番強く反応する一点を探すという方法もある。

ただし、どちらも核となった人間に危害が及ぶ可能性があるというデメリットの方が遥かに高いのだが手が無いというわけではないということが僅かばかりか一葉の心を軽くしていた。

「元を見つければいいんだね？」

「え？」

なのはの声に一葉とベヌウ、そしてユーノの声が重なった。

全員の反応を無視して、なのはは碧い瞳に決意を宿してレイジングハートを空へと構えた。

それは自分が何をすべきで、何ができるのか信じて疑わないような自信に満ち溢れている。

するとレイジングハートのコアが光り、なのはの足元に桃色の魔法陣が現れた。

一葉のそれとは違う、円の中に左右別に回転する二つの正方形が重なり合あったものだ。

「リリカル！マジカル！探して、災厄の根源を！！」

なのはが叫ぶと同時に魔法陣からおびただしい量の魔力の塊が周囲に飛び散った。

塊は線となり、それはさながら流星のように街を覆う樹木に群がる。

しかし、そのどれもが質量的にも魔力的にもダメージを与えるものではなく、太く逞しい幹や根にぶつかると霧散して消えていった。

規則的に回転する魔法陣の中心で瞼をおろし、なのはは眉をひそませて集中していた。

それは拡散させた自信の魔力から映像として送られてくる情報を処理するためだ。

根の先から先へ、枝の端から端へ、葉の一ま一枚までをも回路に電気を流すかのように余すことなく調べ上げていく。

その時、なのはは樹木の根幹部分に白い繭のようなものに包まれて意識を失っている二人の少年と少女の映像が頭に送られてきた。

「見つけた！」

「ほんと！？」

なのはの視線の先にはオフィス街があった。

高いビルが密集しているために他の箇所よりも木々が一際目立つ

ている。

「直ぐ封印するから!」

抑制の利かない声を出してなのははレイジングハートを構え直す。

「こっからできんのか?」

「出来るよ!大丈夫!」

それは勢いから出ただけの言葉ではなかった。

なのはには、確信めいた自信があった。

出来るか、ではない。するのだ。

この元凶の根源を断ち切るためになのはは自分の相棒を空へと掲げた。

「そうだよね、レイジングハート?」

— Shooting Mode . Set up .

レイジングハートなのはの問いかけに答えるとコアを包む金輪が分解されて、なのはの想いに呼応するかのように音叉のような形状に組み直される。

銅金の部分から排出される桃色の魔力の翼が、レイジングハートをまるで断罪の十字架を思わせる。

なのははレイジングハートの穂先を自分の魔力を介して送られてきた映像の方向へと向けると、遙か空の上から獲物を捕える鷹のような目つきで目標を見据えた。

レイジングハートは自分の幼い主の想いを汲みとり、桃色の魔法陣を口金と水返しに展開させ魔力を収束させる。

「行つて！捕まえて！」

刹那、大気が焦げた。

なのはがレイジングハートからはなつた魔力は大気を灼き、風に悲鳴を上げさせながら桃色の魔力が濁流のようにジュエルシードの核へと襲い掛かる。

さながら彗星をを彷彿させる流星は一瞬で目標を貫いた。

— Stand by Lead y .

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルX！ 封印！」

— Se a l l i n g .

なのはは超遠距離からの狙撃によってジュエルシードの封印に成功したことを示すようにレイジングハートのコアにシリアルナンバーが浮かび上がる。

その場にいる誰もが息をのんでみている。

それは一葉もベヌウも例外ではない。

「ユーノ、お前にもあれてできんの？」

「…、冗談言わないでよ」

なのはが放つた砲撃魔法が巻き起こした風を頬に受けながら半ば呆けたようにユーノは言った。

二十一話目 砲撃魔法（後書き）

友人が卒業論文をヤンデレについて書くと言い出した

この小説もヤンデレ路線で行ってみようかな…？

二十二話目 涙

風に吹かれるように彼の言葉は私の心を揺るがす

心を蝕む壺毒のように彼の瞳は私を狂わす

ああ、今日もまた

私は彼に溺れていく

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

結界が解かれた空は朱色の染料を垂れ流したかのような色に染まっていた。

蜂蜜色に映える街はまるで震災の後のように所々、アスファルトが砕け、家が崩れている。

ジュエルシードが呼び起こした森は姿を消してはいるものの、その爪痕だけは消えることのない傷のように残っていた。

「周りの人に・・・迷惑かけちゃったね」

なのはは姿を半分以上隠し始めた茜色の太陽を見つめながらボウと言った。

「そんな、なのははちゃんとやってくれてるよ!」

肩の上でなのはを庇護するようにユーノは声を高めてたが、なの

はは首を横に振りながらそのまましゃがみ込んでしまう。

今、なのはの胸の中は自責と後悔の念が波を立てて渦巻いていた。気のせいですまसानければ……、もっと注意していれば……、自分ももっとしつかりしていればこんなことにはならなかった。自分の無力が情けなくて涙さえ流れてこなかった。

なのはは足に手を回してそのまま膝に顔を埋めてしまおうとすると、自分に不自然に影が射しているのに気がついた。

「ていー！」

「こゃ！？」

無意識に顔を上げた瞬間、額に熱い衝撃が走る。

なのはは反射的に額を手で押さえて初めて自分が一葉にデコピンをされたことを知った。

そしてなのはの瞳に徐々に熱い滴が溜まっていく。

なぜこんなことをするのだろう。

自分は今こんなにも悲しんでいるのに、こんなにも苦しいのに何でこんな意地悪をするのだろう。

やっぱり、街がこんなことを未然に防げなかった自分を怒っているのだろうか。

今度こそ本当に一葉に嫌われてしまう。

そう思った瞬間になのはの渦巻く感情に、さらに恐怖の念が混じった。

なのはは一葉の真剣な瞳を意図的に逸らそうとしたときに一葉の

口が動いた。

怒られる……、

自分の心をえぐる言葉が吐き出される。

一葉から……、自分の大好きな人からそんな言葉なんか聞きたくない。

なのは目を堅く閉ざし、自分の耳を押さえようとした瞬間に聞こえてきたのは余りに意外な言葉だった。

「アホか、お前は」

「ふえ？」

なのは目尻に涙を溜めたまま顔を上げると、そこには腹の底から呆れたような表情を作る一葉の顔が視界にはいった。

いつの間にかバリアジャケット……、一葉のものは正確には騎士甲冑豊ばれるものらしいのだが、それが解除された一葉の顔には面付きが無くなっており、今にもため息をつかんばかりの一葉は言葉が続けた。

「おまえは意図的にジュエルシードを見逃したのか？」

「そ……、そんなわけ！」

「ないよな？」

「う……、うん」

なのはただでなく、なのはの肩にいるユーノさえ眉をひそませて困惑した表情を作っていた。

一葉がなにを言わんとしているのかその意図を掴めなかったからだ。

しかし、当の本人はそんなことも気にもせず唇を動かす。

「それだったらもう一発お見舞いしてやるところだが、なのははもしかして全部自分のせいだと思ってないでないか？」

「・・・うん」

「でも、オレも気付かんかった」

「でっ、でもそれは！」

「関係ないと言ったらグーで殴んぞ」

なのはとユーノの目の前で見せつけるように拳をつくる一葉をみて二人は押し黙ってしまった。

「オレは今日、なのはと一緒にサッカーの試合を見に行かなかった。それこそオレのわがままでだ。

もしかしたら、なのはが違和感を持ったときにオレも一緒にいたらこんな事態になるのを止められたかもしれない。

なのはは今、こんなにも苦しい想いをしなくて済んだかもしれない」

一葉はまっすぐな視線でなのはの濡れた瞳を射ぬくように言葉を紡いだ。

なのはの顔が朱色の染まっているような気もするが、それはあえて無視する。

「全ての理不尽は過去の現象に起きているんだ。イフの話をいくらしてもしょうがない。」

「もしもあの時ああしたら、あの時にこうしたら、いくら悩んで葛藤をしても後の祭りだ」

なのは一葉の鳶色の瞳を吸い込まれているかのように見つめる。空気に飲まれているのかもしれない。なのはのその瞳はどこか扇状的に潤んでいた。

「だけどな、本当にしてはいけないのは、失敗を何とも思わないことだ。」

「だけど、なのはは傷ついている。罪を感じている。心が悲鳴をあげている。」

「今はそれで十分すぎるほどだ」

一葉はそういふとなのはの頭の上に自分の額を置いてグシャグシヤとかき回すと、いつもは抵抗するのに今日に限っておとなしく一葉にその身を任せる。

「オレたちは友達だろう？仲間だろう？」

「だったら、なのはの痛みも哀しみも、苦しみもオレにも分けてくれ。」

「そして、それを次に繋げよう。」

「オレもなのはも、それにユーノだってそれができないほど弱くはないだろう？」

「一葉の言の葉が真綿に水が沁みるようになのはの心に染みわたっていく。」

「何でこの人は私が一番欲しい言葉を一番欲しい時にくれるのだろう、何でこんなにも優しいのだろう。」

なのはの瞳にはつい数瞬前とは逆の方向性の温かな涙がたまっていく。

「私の名が無いのが気になりますが…」

未だ本来の体の大きさのままのベヌウは一葉の一步後ろに下がった位置に佇みながら不満げな声を漏らすと一葉は苦い笑いをつくった。

「イヤ、お前は元から結構強いだろう。ベルカの守護獣なんだろう?」

半ばからかうような口調の一葉にベヌウは翼をはためかせて風を起こしながら抗議する。

「ちょっと!?!、何で私だけ仲間はずれなんだすか!」

「まあ、ベヌウのことは置いておいて…」

置かないでください! と叫びながら翼を広げて自己主張する怪物を完全に無視しながら一葉はなのはの頭の上に乗せていた腕を一度下ろして、拳をつくるとなのはの胸を軽く小突いた。

「振り向くなどとは言わないし、後悔するなともいわない。だけど、絶対に過去を否定するな。

それは自分自身を否定することになる」

一葉は揺るぎのない瞳でなのはを見据えながら、言った。

「それでも、後悔するのが嫌だったら強くなれ、そして強くあれ。迷うな立ち止まるな挫けるな」

なのはの胃のそこから熱い歓喜が沸き上がってくる。鼻の奥が熱くなり、温かい涙があふれ出してくる。

どこか不敵な笑みを作りながら、眩しい笑顔を送ってくれる少年はなのはの心を光で満ち満ちさせてくれる。

咽喉では抑えられても気持ちでは抑えられない感情が溢れてくる。

「一葉くんは……、いつもずるいよ……」

嗚咽をこらえながら絞り出した言葉は壊れた笛のような声をしていった。

自分ではどうしようもなかった、ぬかるんだ沼のような鬱の気持ちをあんなにもまつすぐな言葉で、こんなにも簡単に吹き飛ばしてくれた。

それこそ、一葉だけは自分のことをわかってくれていると思いつんでしまうほどに。

それがどこか悔しくて、だけどそれ以上に嬉しくて、なのはは泣いた。

声を上げず、嗚咽だけを漏らしながら、あふれる涙を拭いてもせず泣き続けた。

一葉はそんななのはを困ったように笑いながら泣きやむまで何も喋らずに待っていた。

二十二話目 涙（後書き）

そろそろフェイトがさせるかな？

二十三話目 遅刻

「……、寝過ごした」

「私は起こしましたよ？」

一葉がベッドから半身を起こして、ならなかった目覚まし時計の針を見ると時間は正午前を指していた。

「ご友人とのお約束、だいぶ時間が過ぎていますね」

どこか非難するような視線を送るベヌウの視線をうなじに感じながら一葉は諦めたかのようなため息をつく。携帯電話に手を伸ばした。

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

「二秒で来い」

受話器越しから聞こえてきたのは余りに無茶、かつ理不尽な要求だった。

一葉は今日、毎週末に月村宅で催されるお茶会にお誘いを受けていた。

その時に、まだ二人には見せていないベヌウを連れていくということになっていたのだが、昨夜は少しばかり夜更かしをしまい乗らなければ約束の時間に間に合わないバスの時間を布団の中で寝

過ぎてしまったのだ。

とりあえず、布団から這い出ると充電器につないだままの携帯電話を操作して主催であるすずかに遅れるという旨を伝えようとしたのだが、どう言っわけかアリサが電話に出た。

寝坊しました。ごめんなさい遅れます。と正直に伝えたところ、受話器越しから言葉よりも正確に不機嫌のオーラがひしひしと伝わってきた。

実は今日、お茶会の中でベヌウをすずかとアリサにお披露目する約束になっていたのだ。

ことの発端は三日ほど前になる。

二人にベヌウを拾ったと言ってから既に半月以上の時間が過ぎているのにもかかわらず、一葉はまだベヌウを見せていなかった。一葉自身も魔法やらジュエルシード集めでバタバタとしており、機会が伺えなかったのだ。

アリサもすずかも、他人の感情や動向に機微な子供な。どこか察していたのだろう。

二人の口からベヌウを早く見せろと強く言うことはなかったのだが、なのはがやらかしてくれた。

その日は霧のような雨が降っていた。

曇天の空から舞うように降りてくる雫を傘で弾きながら、放課後の通学路を一葉を先頭にみんなで歩いていった。

黒に近い灰色に濡れたアスファルトにつくられた水溜りを蹴りながら、話しの流れはペットのことからそれとなくユーノのことになっていったのだが、アリサが思い出したようにベヌウをいつ見せてくれるのか、と言いだしたのだ。

おそらくは、その場限りの会話だろうと思ひ一葉は 時間ができたらー と返答しようとする前になのはが口を開いた。

「え？ “二人にはまだ” 見せてないの？」

刹那、一葉の両肩に食い込むような痛みが走った。

「へえ、 “二人はまだ” …… ってことは、なのはにはもう見せてあげたんだ」

「私たちはまだなのに…、何でなのはちゃんだけ特別扱いなのかな？」

右側からアリサ、左側からすすかの声が冷たい蛇のようになじを這う。

ギチギチと肩に食い込む手は、アリサはともかくとしてすすかはまるで万力のように締めあげてきた。

一葉がこめかみに汗を浮かべながら必死になって言い訳をしているとことを見て、なのはは初めて自分の失言に気がついたのだろう。両手を大きく降っておさげをびよこびよこ動かしながら この前偶然！ と一葉を庇護するが二人うさんくさげな視線に封殺されてしまう。

この年代の女の子はみんな一緒、親友であればあるほどに同じ友人の情報を共有したがるものである。

なのははそのことを完全に失念していたのだ。

結局、週末に月村邸で行われるお茶会にベヌウを連れて強制収集

と言つ形に落ち着いたのだがそこまで話しを持っていくまでに一葉となのは体が灰になるまで自分の有するボキヤブラリーを出し尽くすこととなつた。

そして当日、一葉は寝坊して約束の時間を大幅に過ぎてしまつた。なるほど、アリスが怒るのは納得できしまつたので一葉は何も反論できずにただ、はい、今直ぐに参ります。としかいえなかつた。

「一葉はとことん女性に弱いのですね……」

「お前も女の怖さを知つて見るといい……、男が女に勝てる要素なんて一つも無いぞ……」

「私も人格的には女性に分類されますが」

「そういえば、主のオレよりもお前の方がえらそうだよなあ……」

イヤイヤ、そんなことはありませんよと言つ感情のこもらないベヌウの声をBGMに一葉は手際よく服を着替えて寝癖を整える。

しかし、どことなく顔に活気がない一葉の顔色にベヌウは怪訝に思い、眉をしかめていると、それに気がついたのか一葉は何事も無い風を装いながら唇を動かした。

「今日は、恭也さんもくるんだよ」

「恭也……、確か高町嬢の兄君でしたか」

ベヌウは一葉やなのはから直接的には聞かなくとも、二人の間で

織りなされる会話の端々から聞こえてくる情報を統合した結果を予想して言ってみた。

「そ。オレ、なんかあの人に嫌われてんだよね」

んなアホな。常識的に考えて一回り近く離れた少年にそんな大人げない感情を抱くとは考えにくいと内心で思いつつも言葉を続けた。

「確か、恭也氏は大学生でしたよね。大学生がたかが小学生を嫌疑の目で見ると常識的に考えてあり得ないかと……」

「なのはの家って武道の達人ばかりだとしてもか？」

「あ……」

それなら理解も納得もできるかもとベヌウは思った。

一葉のたち振る舞いは歩き方だけでなく、ただ立っているだけでも常人のそれとは違うということを見る者が見ればすぐにわかるだろう。

常に体幹の中心に重心を置き、踵を浮かせた擦り足のような歩き方は体ではなく、感覚として刷り込まれているために隠しようがないのだ。

そんな動きを歳はの行かない子供が呼吸するかのよつに当然のごとくしているのは怪しさ全開である。

「まあ、直接なにをしてくるってわけじゃないから実害はないんだけどね……」

心臓の部分で交わる白いラインの入った黒い半そでのシャツに袖

を通してから色の濃いジーンズに足をつっこむ。
そして、使い古したベルトの穴を限界まで締めると準備完了である。

「さて、行こか」

一葉がそう言うと、ベヌウは待ってましたとばかりに翼を広げて机の上から一葉の肩へと乗り移る。

月村邸のお茶会は、一般庶民である一葉やなのはが生半可な茶菓子を持っていっても、その気遣いが逆に先方に気を使わせてしまうためにあえて持つていくことはしない。

財布だけを後ろのポケットにつっこんだラフな格好で一葉は月村邸へと急ぐことにした。

二十三話目 遅刻（後書き）

就職活動のために時間があいてしまいました。

家にたまるのはペラペラの封筒の中に入ったあなたの才能が発揮できる所を探して下さいという紙切ればかりです。

二十四話目 出会い

潮の匂いをはらんだ南風が吹く街で

私は運命に出会った

魔法少女リリカルなのは（Broken beast）

長いまつげを伏せながらフェイト・テストロッサは海を見ていた。

波打ち際まで進んでは思い出したかのように不意に諦めて戻る海は、雲ひとつない空に浮かぶ太陽は溢れんばかりの柔らかな鬣で風ぐ海をキラキラと照らしている。

しかしフェイトを包んでいたのは温かな闇だった。

一番大好きな人が与える、笑いたくなるほどの痛みに満ちた言葉。体だけでなく心まで抉るそれは、フェイトの心をねっとりとしたタールのような黒い何かで満たしていた。

フェイトは母の命令でこの街にきた。

ジュエルシードというロストロギア。

願いを叶えると言われるそれでいったい何を願うのかは解らない。ただ、母のために。大好きな母に自分を好きになってもらうためにフェイトはここにきたのだ。

幸いにもここは管理外世界。

魔法文化のない世界だ。戦闘になるとしても、不運にもジュエル

シードを取りこんでしまった原生物相手程度だろうと思っていた。

「私以外にも、ジュエルシードの探索者がいる……」

まるで洞窟のように感情の抜け落ちた声がフェイトから零れおちた。

フェイトが地球に来たのは先週のことだった。

地球に来て最初に見たのはジュエルシードが暴走したと思われる後の惨状。家が壊れ、アスファルトが砕けていた。

しかし、その場にジュエルシードがなかった。

一度暴走したジュエルシードは、誰かが封印処置を施すまでとまらない。つまり、この街には魔導士がいるということになる。

思ったよりも厄介なことになるかもしれない。

しかし、フェイトにとってそんなことは関係なかった。

その魔導士がジュエルシードを持っているのならば奪えばいい。生涯になるのならば倒せばいい。

それが犯罪だということは判っている。しかし、フェイトはそのような罪悪感を薄れさせるほどの未来があることを信じていた。

フェイトはジュエルシードを母の元へと必ず持つて帰るという揺るがない決意を再確認すると、海から視線を外して探索に行くことにした。

本来ならば、こんなところで時間を潰している暇などないはずだった。

しかし、自分がまだ幼いころ、母がまだ優しくかったところに連れて行ってもらった海を思い出したのだ。

これが終わればきっと、私は母さんと幸せになれる…、

しかし、フェイトはここであることに気がつく。

「お財布が…、ない？」

ポケットに確かに入れていたはずの財布がなくなっていた。

赤い折りたたみの財布で、地球での通貨と身分証、そしてカードといった生活に必要な全てが中には納められている。

それがなければ、この地球で生活ができない。

財布を落としたという事実気がついたフェイトは体から体温がさっと引いていくのを感じた。

どうしよう…！！

どうしよう…！！

母さんのところまで行くか…、イヤ、そんなことをしたらまた失望させてしまう。

第一こんなことで母さんの手を煩わせるわけには行かない。

しかし、財布をいつ、どこで落としたのか見当もつかない。

家の中か、途中によったコンビニか、はたまた空を飛んでいるときか。

空を飛んでいるときならば絶望的だ。

創作範囲が広すぎる。

自分はなんと間抜けなのだろう…、

フェイトは自分が情けなくて鼻の奥がツンと熱くなり、目尻に滴

がたまつていくのを感じた。

「もしも〜し?」

不意に自分の背後からどこかおどけたような声が聞こえ、フェイトは反射的に振り向くと、フェイトの感情の振り幅は一瞬にして真逆のものとなった。

そこにいたのはフェイトと同年ぐらいの少年だった。

黒い髪に飛び色の瞳。

ひどく中性的な顔立ちをしているものの、声の質で男わかる少年は肩に黒い鳥をとまらせていた。

本来ならば、あまりにも特徴的な鳥の方に目がいくのだろうが、フェイトの目は少年が手に持っていたものに向いた。

そこには自分が落としたであろう財布が握られていたからである。

フェイトは歓喜と、そして感謝の言葉を少年に言おうとした。

しかし、フェイトが口を開く前に少年は、まるで死人を見たかのような驚愕した表情を作りようやく絞りだしたかのような声を上げた。

「……アンリマユー!？」

二十五話目 side 一葉

潮の匂いはらんだ南風の吹くこの場所で

オレは運命に出会った

後になって知る

自分はその場所で、あの瞬間に運命の分岐点にたったのだと

魔法少女リリカルなのは(Broken beast)

一葉は息を切らして走っていた。

原因は先ほどから振動する携帯電話にある。

「二分でこい」

その言葉の宣言通りに、アリサからの着信がきっかり二分おきに
来るのだ。

胃の腑から粘つくように締め上げるような恐怖の蛇がずっと一葉
の感情を支配していた。

受話器越しに聞こえてくるアリサの声にはおおよそ感情と言える
ものがなく、電話の向こう側では濁った瞳で携帯のディスプレイを
かち割らん限りの力で握っているアリサの表情が容易に想像できた。
それはアリサが本気で怒った時に見せる表情でもある。

かつて、何度かアリサのその表情を目の当たりにしたことがある。

それは名門といえど所詮は小学生と言ったガキを押し込んだコミユニティーの中で、自分たちよりも劣る、というか“群れる”ということができない者たちに群れをつくることが成功した者が行う洗礼。

平たく言えば虐めである。

一葉は群れ方を知らなかった。

今でこそクラスを中心となって動いてはいるが、精神年齢が周囲から変え離れている上に、中途半端に過去の記憶を記録として引き継いでいる。

かつての一葉は、いわば一匹狼。言い方が悪ければ孤独だった。

そのくせ身体能力は異常に高く、成績も断トツというほどではなが首席を争う位置にいる。

そんな一葉は当然のようにやり玉に挙げられうのは自然の摂理だったのかもしれない。

最初は無視から始まった。

しかし一葉はそんなことは気にもしなかったが、徐々にそれは陰湿なものに代わっていった。

上履きを隠す、ノートに落書きをされる、教科書を破かれる。

子供は無邪気さゆえに悪意を知らない。

周囲に流されることが善であると思いついて入っている子供はそれが普通だと思いついて一葉の虐めに加わっていた。

しかし、それはある日を境に突然無くなることとなる。

一葉がアリサとすずか、そしてなのはと出会った日のことだ。なのはも当時はクラスでは孤立していたし、すずかも興味はなかったのだろう。しかしアリサには参加はしないものの耳には入っていた。

それがまさか一葉とは思っていなかったのだが、一葉が虐めにあっていると知った次の日にアリサが一葉に問い詰めに来た。

それは事実かと。

一葉はとりあえず事実だけを簡潔に伝えた旨、別段気にしてはいないし時間がたてば収まるだろうと言ったところ、アリサは笑ったのだ。

にっこりと目が笑っていない素敵な笑みをつくった。

感情のこもらない、どこか虚ろな瞳で。

その時、一葉は背筋が凍るものを感じた。

この少女は決して敵にはまわしてはいけないと。

そして翌週に知ることとなる。

その直感が決して間違いではなかったことに。

一葉が学校に行くと、教室の席がいくつか空いていた。

最初は別段気にも留めなかったが、ホームルームになり担任から突然クラスの数人が転校したということを知られた。

それを聞かされた時に一葉は確かに見たのだ。

アリサが暗い、しかし腹の底からこみ上げる歓喜を笑い殺しているような表情を。

そして気がついた。転校したという生徒の共通点に。それは一葉を虐めていた主犯格の生徒だった。

気のせいだ。

そんなことは偶然だと一葉は自分に言い聞かせた。

しかしその想いは槌でガラスを叩くように呆気なく打ち砕かれることとなる。

ホームルームが終わるとアリサは一葉の席の前に来てこう言ったのだ。

「これで、アンタを虐める人間はいなくなったわよ？」

体が凍った。時間が止まった。

おおよそ言語では言い表せないような恐怖を感じた。

そして、一葉はこの時まで知らなかったのだ。

バニングス家は、人の人生を簡単にどうともできるほどの世界的な企業だったことを。

受話器越しに聞こえてきた声は、一葉が虐めにあっているという事実を知った時と同じ声だった。

普段は友達思いで、正義感が強く、素直になれないが常に他人のことばかりを考えている善人であるアリサは一葉から見ても気持ちがいい程の少女だ。

しかし、時折そのベクトルが反転するときがある。

それは自分の大切な者、友達や家族に危害を加える者には決して容赦はしない。

今回はおそらく、すずかのことに關してアリサの逆鱗に触れたの
だろう。

アリサもベヌウを見ることをかなり楽しみにしていた。それを一
葉は寝坊と言っくだらない理由で遅れさせてしまったということに
怒りを感じているに違いない。

となれば時間がたてばたつほどに事態がややこしいこととなる。

一秒でも早く月村邸に到着するために一葉はバス停に至るまでに
近道である海鳴公園を横断するルートを選んだ。

海鳴公園の中には無数の人工林がある。

長く続いた冬の分まで大地を暖めようとするようように容赦なく
降り注ぐ太陽の光を空いっばいに手を広げた枝葉で柔らかく防いで
くれる。

一葉は額と首筋に玉のような汗を流しながら走っていると視界の
端に何かが入った。

自然との調和をコンセプトにしてつくられた公園で異常に浮いて
いる、明らかな人工的な色の赤い財布だった。

走る速度を落としながら財布の近くまで行き持ち上げると、結構
な重量感がある。

一葉はどうしたものかと呼吸を整えながら懸念した。

時間はないが、拾ってしまったからには責任が生じる。このまま
見て見ぬふりはさすがに罪悪感を感じる。

落とし主も困っているはずだ。

『一葉』

『なんぞ?』

ふいに念話で話しかけてきたベヌウに一葉も念話で応える。

『あちらの方に何やら共同不審な少女がいるのですが、もしかしてその落とし主ではありませんか?』

ベヌウは海を展望できる広場の方に視線を送ると一葉も促されるように視線を移した。

確かにそこには、一葉の立っている場所から遙か向こうで不審者のように同じ場所を行ったり来たりしている少女がいた。

『お前、目えいいなあ…』

『人間よりは視野は広くつくられていますから』

一葉も視力はかなりいい方だ。

しかし、あれは意識してかなり注意しなければ気がつかないほどの距離がある。

鷹は遙か上空から雪原に同化した雪ウサギを狩ると言う話を聞いたことはあるが、ベヌウの策敵能力はそれの上を行くだろう。

とりあえず一葉はベヌウが指した少女の方向へと軽い駆け足で距離を縮めた。

距離が近づくに連れて少女の輪郭がはっきりとしていく。

この辺りではなかなか目にしなくすみのない綺麗な金の髪をツ

インテールで纏めている。

後ろ姿しか見えないがおそらく余所から来た人間だろう。

少女は一葉が近づいてきていることに気がついていないらしく、とりあえず声をかけてみることにした。

これで財布の持ち主がこの少女ならばラッキー、違ければ大人しく交番へ行こう。

これ以上遅れたならば後のアリサの反応が恐ろしいが、人道的なことだ。

大目に見てくれることを期待しようと、一葉は右往左往している少女に話しかけた。

「もしもし？」

そして少女は一葉の声に振り返る。

その瞬間、一葉のかいていた汗が一気に冷たい汗へと変わった。

極上の絹のように艶やかな金糸のような髪。

鬼火のように白い肌。

見ているだけで吸い込まれてしまいそうな燃え盛るガーネットのような赤い、大粒のそうぼう。

名のある名工が造り上げたビスクドール彷彿させる、まるで作りもののように人間離れをした美を持つ少女だ。

そしてその少女はあまりにも彼女に似すぎていた。

自らを世界と名乗った少女に。

「アンリマユ……!?!」

一葉の驚愕するような声に、少女はきょとんとした感じで首を傾げるだけだった。

二十五話目 side 一葉（後書き）

フェイトをようやく出せました

前話は文字数が少なくて今話と合併して出しました

時間かかったけどまあいいよね！

すべての責任はおもしろすぎる『始まりの魔法』を書いている坂本葵さんのせいさ！

読みふけていて自分の小説をないがしろにしていた僕の責任じゃないもん！！

二十八話目 縁

困惑した表情の二人の間に海から運ばれてくる湿った風が吹き抜けた。

生臭い潮の香りを孕んだ風は、一葉の鼻孔に粘つくように入り込み冬の鉄のように冷たく、硬くなった思考を緩やかにする。

目の前にいる少女は容姿こそ、一葉を陥れ、一葉が殺した、世界と名乗った少女だが、しかし、冷静になり注視すると少女の雰囲気纏う空気とも言えるかもしれないものが全くと違っていいほど違うものだった。

アンリマユは冷静と孤高を内包した、決して揺るぐことのない北極星だとしたら、この少女は時間と季節とともに揺らぎ形を変える儂い月だ。

少女とアンリマユが別人だとわかったことで、一葉はサツと引いた血が心臓から指の先まで戻っていくのを感じ、絞ったように苦しくなっていた喉が緩やかになった。

「ゴメン……。知り合いによく似てたものだから少し驚いた。それより、これ君の?」

「あつ！ そつ、そつです！」

一葉は拾った財布を差し出すと、白魚のように細い華奢な手で少女は一葉から赤い財布を受け取った。

少女は一葉から渡された財布を両手で胸元で大事そうに握り、ほ

つと安堵のため息をつき、一葉と目を合わせると二つに纏めた金糸のような艶やかな髪を空中に無造作に躍らせて大きく頭を下げた。

「あ…、あの…！　ありがとうございます…！！」

「あー、気にしなくてもいいよ。拾ったのも君を見つけたのもたまたまだし。でも、これからは気を付けなよ」

「はい…」

一葉が軽く注意すると少女は萎れた花のようにシユンとなってしまふ。それを見た一葉は困ったように笑いながら自分の財布に付けたキーチェーンを思い出して、それを取り外した。

「ハイ。これ」

「あの…、これって…？」

差し出された何の装飾もされていないシンプルな銀色の鎖を少女は反射的に受け取ると、何の用途の為なのかわらかないらしく、一葉は説明をした。

「それ、キーチェーンってね、財布を落とさないように、両端を財布の金具の部分とズボンにつけるんだよ。それあげる」

「え！？　悪いよー！」

「いって、いって。同じような他にも持ってるし」

あわてる少女に、一葉はなんでもないような口調で早くキーチェ

ーンを付けるよう促すと少女はありがとう、と小さな声でいいながら申し訳なさそうに赤い財布にチェーンを付け始めた。

「せめてなにかお礼を…」

金具と金具を結ぶために、カチャカチャと乾いた音を立てながら少女は上目遣いで何うと一葉は面倒くさそうに手をひらひらとさせながら答えた。

「そーいうのもいいよ」

「だめ！」

少女が口調を強める声が終わると同時にカチャンと型がはまる音がやけに大きく響いた。

先ほどまでとはうって変って押し気な言い方に、一葉はつい一歩身を引いてしまい、少女は少女で無意識のうちに声を荒げてしまったことに羞恥を覚え顔を真っ赤に染めていた。

「あ…！ あの…！ 恩を受けたらきっちり返せってお母さんが言ってる…！」

「ああ…、そうなんだ…」

取り繕うように言葉を紡ぐ少女に一葉は戸惑ったように声を出した。

「だけど…、実は今ちよいと急いでてね…」

「でも、ここままでしてもらってなにもお礼できないのは私が納得

できない」

少女の真摯な態度に、一葉は少女が真つすぐで心根が優しい子なのだと感じた。

見たところ、自分と同じくらいの年齢に見えるがかつての自分はどつだったのだろうと一葉はふと記憶を反芻した。

今でこそ二回目の九歳で家族にも友人にも恵まれているが、今の生を得る前の一葉は九回目の誕生日に人生の転機ともえることがあった。

一族の役目と業を継承するための儀式。

思えばあれが下り坂の頂だったのだ。

雪原の丘を転がり落ちる雪玉のように一度転がり落ちた小さな罪は四百年の歴史をかけて一代では背負いきれないほどの巨大で肥沃した業の塊のツケは一葉たちの代で清算することとなった。

人対人ではなく人対人を超えたものの戦に足を踏み入れるための儀式。それをきっかけに、槍の一族と、身に流れる血に異端の力を宿す一族との混血であった自分がすべてを貫く一本槍であるうとその身と心に揺るがない山のごとくの誓いを立てた。

しかし誓いは破れ、誇りは折れ、大山のごとくに不動だと思っていた己の志は絶望という風と憎悪という雨にさらされ朽ちていった。

そして、すべてが終わったころには一葉は槍ではなく、生き様そのものが爛れた悪鬼へとなり果てた。

そうなるように仕向けたアンリマユに対して一葉はあの無が確かに存在した世界で不思議と憎しみを抱かなかった。

アンリマユは肉体が滅んだために記憶が記録になったと言っていたが、そうでなくとも一葉はアンリマユにその感情を抱いたのか自分でもわからない。

あの時の一葉は壊れていた。気が触れていたわけでも狂っていたわけでもない。ただ、自分が自覚できる程に壊れてしまっていたのだ。

そして、それはアンリマユにしても同じだったのだろう。

自分を殺すという禁忌を躊躇うことなく、むしろ自ら望んだあの少女は壊れてはいけないうところが壊れてしまっていた。

そういう意味では、一葉とアンリマユは同類だった。それこそ、はやてと一様以上に。

目の前にいる、アンリマユと同じ容姿をした少女。

小鳥のように首をかしげながら赤い双眸でこちらを見ている少女と視線を絡ませると何とも言えない胃の腑がこみ上げるような感覚を覚える。

「それじゃあ、貸しー。ってことでどう？」

「貸しー？」

一葉が提案した妥協案に少女はきょとんとした表情を作り一葉の言葉を鸚鵡返しした。

「そ。オレが困ってることがあったら今度は君がオレを助けてくれ。それまで今日のことは貸しておくってこと」「

「え…、？」

「君はオレにお礼をしたい。でもオレは急いでいる。だから次に会うまで持ち越して事で手を打ってくんないかな？」

「で…でも、次会えるとは限らないし…」

少女の言葉に一葉は肩をすくませて笑った。

「会えないかもっ…、てことは同時に会えるかもしれないってことだろ」

「う…うん」

「人と人は見えない糸で繋がってるんだよ。中国だと天網っていうらしいけど、日本じゃ縁っていうんだ。それで、その糸にはちゃんとした繋げ方があるって知ってた？」

「…ううん」

少女は一葉が脈絡もなく語り始めた話に戸惑いを覚えながらも素直に首を横に振る。

その動作は小動物のように可愛らしく、無意識のうちにアンリマユと重ねてみていた一葉は心が溶けていく気がした。

しかし、一葉は努めてそれを表情には出さずに、少女の前に自分の手を差し伸べた。

「簡単だ。自分の名前を教えながら相手と握手すればいい。それだけで、人と人は繋がることができる。と、いうわけでオレの名前

は緋山一葉。君の名前は？」

「あ…、フェイト。フェイト・テストロッサです」

フェイトと名乗った少女は一葉が差し出した手を反射的にとった。

一葉の手にほんのりと温かな体温が乗る。

「ほら。これで縁ができた」

「うん」

最初は少しばかり呆気にとられた表情をしていたフェイトは、一葉が言わんとしていることを理解すると頬を僅かに朱色に染めて恥ずかしそうに微笑みながら握った手を優しく握り返した。

魔法少女リリカルなのは Broken beast

「じゃあ、これ以上時間かかるとガチで命にかかわるからオレはこの辺で」

一葉はそう言い残すとフェイトと繋いだ手を解いて走り出した。目指すのはすすかの家である。

先ほどからポケットの中で神経質に振動している携帯がズボンの布を通り抜けて腿に伝わってくるたびにアリサにナイフを喉元に突きつけられているような気がしてならなかった。

正直、既に電話に出るといふ行為自体に恐怖を感じている。

足に力を溜めて駆け出すが、逸る気持ちは抑えつつも公園を出る前に一度足を止めて振り返ると、視線の先ではフェイトが一葉に向けて大きく手を振っていた。

一葉はそれに同じ動作で答えるとすぐに踵を返して再び走り出す。

『アンリマユ…とは以前に話していた世界のことですよ。そんなにもあの少女と似ていたのですか？』

一葉が公園を離れてからしばらくしてベヌウが念話で一葉に尋ねてきた。

閑静な住宅街を抜けて、もう少しで大通りに面したバス停に到着するが、時間的にバスに乗れるか乗れないか微妙な為に一葉は足の歩速を緩めずに答えた。

『ああ、容姿だけはあり得ないぐらいに似ていた。だけど、ありや違う。中身は全くの別物だ』

『…そうですか』

二人の会話はそこで一度途切れてしまう。

一葉は何かを思案するように眉間にしわを寄せて思考の海へと意識をやっていた。

九年前に、アンリマユが言い残した言葉が心の奥のほうに針金のように引っ掛かっていた。

——私という存在になりえなかった子。私を模倣するために作られた子を助けてほしい

アンリマユは確かにそう言っていた。

あの時、アンリマユは自分という存在の可能性ではなく、自分を模

做するために作られた子供といったことが一葉はずっと気になっていたのだ。

もしかしたら、フェイト…運命と名乗った少女が何かしらのカギを握っているのかもしれない。

模写。描き手も込められた意味も違うが表面上だけは全く同じもの。

そういう表現が使えるほどにアンリマユとフェイトは似ていた。

『一葉。一応報告しておきますがあの子…、フェイト・テストロツサは魔導師ですよ』

『…それマジか？』

『マジです。それも高町嬢や一葉と同じ程のかなり高い魔力を有している。本来ならば魔法文明のない次元世界に魔導師が来ることはほとんどあり得ないはずなのですが…』

『ジュエルシード絡みか…』

『現状から考えるとその可能性が高いでしょうね。あのようなおまじないをしなくても再び相まみえることになったでしょう』

『ユーノが言っていた管理局ってやつかね？』

『流石にそれは何とも言えません』

一葉はブロック壁でつくられたT字路を左に曲がると住宅街を抜けて四車線の大きな街道に出る。

休日ということもあってか普段以上に多く走る車に交じって緑の

ラインが二本はいった白いバスが速度を落としながら路肩へと寄って行くのが一葉の眼に映った。

『っと、ちょうどバスが来たな。とりあえず管理局云々の話は後でユーノに聞いてみよう。何か分かるかもしれない』

『そうですね』

一葉は停留所に停車したバスに向かって走り出した。

しかし、この距離ならば十分に間に合うだろうと心の中で安堵した瞬間だった。

心臓の奥のほう指先でなぞられる違和感を突如感じた。

『これは…』

『ジュエルシールドが発動したようですね…』

何ともタイミングが悪い。

一葉は足を止めて言葉にしないまでも悪態をついた。

なのはは今月村邸にいるために間違いなく身動きが取れないだろう。

最悪、アリサからの催促を無視して一葉が駆け付けたところで、破壊してもいいのならば話は別だが封印式を持っていない一葉は役立たずだ。

しかし、このまま放置しておくわけにもいかない。

『ベヌウ。詳しい位置はわかるか？』

一葉はベヌウに詳細を尋ねた。

最近魔法関連に触れたために、リンカーコアが刺激されたために魔力反応には敏感になったが、大まかな位置しかわからない。

本来ならば、平均の魔導師ならば感知できるようなのだがベヌウに一葉は索敵に関して壊滅的に才能がないと言われていた。

『ここから北西に2・5?。幸い密集した住宅地からは外れていくようにです』

『わかった。北西に2・5?だな』

ベヌウに言われた位置を頭の中にある地図に照らし合わせた結果、一葉はそこが自分が言ったことのある場所だと気がついた。

『どうしたのですか?』

徐々に尻すぼみになっていく一葉の言葉に疑問に思い尋ねてみると、一葉は首を項垂らせて答えた。

『そこ…、多分ずかん家だ…』

二十八話目 縁（後書き）

だいぶ期間が開いてしまいました
まだ読んでくれている人っているのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613/>

魔法少女リリカルなのは～Broken beast～

2010年10月11日14時34分発行